コミュニケーション論

講師：松尾 康弘

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

言語聴覚士はコミュニケーションに障害のある方々やその家族へ専門的に支援を行う。さらに医療においてはチームアプローチが必要であり、介護・福祉・教育の分野においても多職種との連携、つまりコミュニケーションが必要になる。
本科目では対人関係の感性と能力を磨き、臨床現場で円滑にコミュニケーションを図ることができるようになることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	コミュニケーションの基本的な心構えを理解する	講義・TBL	
2	他者との関係を築くコミュニケーション方法を理解する	TBL	
3	演習を通しラポールテクニックを習得することができる	TBL	
4	演習を通しラポールテクニックを習得することができる	TBL	
5	非援助者の理解と情報交換、行動化の支援について理解できる	講義・TBL	
6	チームワークとコミュニケーションについて理解できる	講義・TBL	
7	・視覚障害・聴覚障害のある被援助者とのコミュニケーション ・認知症のある被援助者とのコミュニケーション ・人生の最期を迎える被援助者とのコミュニケーション について理解できる	講義・TBL	
8	試験・解説	試験・解説	

■受講上の注意

■成績評価の方法

講義への参加態度（40%）・最終試験（60%）により総合的に評価し、本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

必要に応じ資料を配布する

■備考

■実務経験

ことばとシンボルの世界

講師：假屋園 昭彦

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

ある物を別の物で表現する機能をシンボル機能と呼ぶ。シンボル機能は人間の思考の大きな特徴の一つであり，人間の人間たるゆえんは，まさしくこのシンボル機能にあると言える。本講義では，人間の思考の代表的な特徴であるシンボル機能について考察する。まず人間のシンボル操作の学問である記号論における基本的用語，概念を紹介する。そのうえでシンボルの世界に生きる存在としての人間のあり方を紹介する。具体的には，言語，哲学，芸術の領域から代表的な理論と実例を紹介する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	シンボルの意味　記号論とはどんな学問で何を対象とするのか	講義	
2	記号論の基礎概念（1）　ことばのしくみ	講義	
3	記号論の基礎概念（2）　ことばの意味と意味作用	講義	
4	記号論の基礎概念（3）　文節と意味作用	講義	
5	記号としての言語（1）：記号としての世界	講義	
6	記号としての言語（2）：日常的な記号世界	講義	
7	記号としての言語（3）：ソシュールの言語学：構造主義の誕生	講義	
8	記号としての言語（4）：ソシュール言語学：構造主義の展開	講義	
9	記号としての言語（5）：ソシュール言語学：構造主義と記号論	講義	
10	パースの記号論（1）	講義	
11	パースの記号論（2）	講義	
12	芸術における記号論：図像解釈学の紹介	講義	
13	芸術における記号論：図像解釈学の実例	講義	
14	民話・神話における記号論	講義	
15	文化記号論とはなにか	講義	

■受講上の注意

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

谷口 一美：「学びのエクササイズ　認知言語学」，ひつじ書房

■備考

■実務経験

情報科学

講師：小牧 祥太郎

単位数：2単位　時間数：45時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

昨今、医療現場においても適切な情報活用・管理が求められている。適切な管理・運用が行えない場合、情報漏洩リスクが高まり、施設・個人に対して脅威を与えることとなる。本講義では、情報活用に関する運用や管理について学び、情報モラルに関する理解を深めた後、昨今医療機関でも通常業務として使用が一般的となっているコンピューターの使用に関して基本的な操作を習得していく。また、本校の情報通信環境を活用するほか、個人所有のパーソナルコンピューター、スマートフォンを学習や情報取得手段として有効活用し、AIを活用した次世代のツールへの造詣も深め、情報リテラシーの向上を図る。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	学内の情報通信環境（Free Wi-Fi、コンピューター室の利用、アクセス手段、端末・電源等の管理について）について理解を深め、本校において使用するオンラインコミュニケーションツール（Microsoft Teams（以下、Teams））の使用環境を整備する。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施予定。
2	本校において使用する、メールソフト、クラウド、講義管理（出席・修得状況）ソフトなどの情報通信環境の整備と利用の仕方について学ぶ。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
3	コンピューターの挙動を理解し、Windowsの基本操作になれる。 今後の学習や実習で使用に耐えうるコンピュータースペックについて知り、遠隔講義配信ツール（Zoom）の操作についても学ぶ。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
4	デジタルデータの管理について学び、情報管理について理解する。 Microsoft Office Word（以下、Word）の基本操作に慣れる。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
5	Wordの応用操作（図や表の挿入）を習得する。 Wordで作成したデータのPDFへの変換方法を習得する。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
6	メールソフトの利用方法、メールマナーについて学ぶ。 （添付ファイルのPDF化処理など含む）	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
7	講義・学習で必要となる情報取得手段について学ぶ（文献検索・図書館利用法とオンライン検索方法など）。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
8	各種成果物（レポート）等で根拠として使用する、引用文献の引用方法・リストの作成について学ぶ。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
9	Microsoft Office PowerPoint（以下、PowerPoint）の基本的な操作を学ぶ。 PowerPointにて自己紹介スライドの大枠を作成する。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
10	作成中の自己紹介スライド（PowerPoint）へ審美的な装飾方法を学ぶ（アニメーションや図・表の挿入等）。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
11	作成中の自己紹介スライド（PowerPoint）の発表準備（仕上げ）とメール添付での送付を行う。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
12	PowerPointにて作成した自己紹介スライドの発表を行う。 インタラクティブ投票ツールを用いて、自己紹介スライドへの好意的な評価を行う。 ※学生人数次第で2部制とする。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
13	PowerPointにて作成した自己紹介スライドの発表を行う。 インタラクティブ投票ツールを用いて、自己紹介スライドへの好意的な評価を行う。 ※学生人数次第で2部制とする。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
14	Microsoft Office Excel（以下、Excel）の行・列などの基本的な操作を学ぶ。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
15	Excelの基本操作を学ぶ（データ入力操作、簡易な計算（合計・平均）について）。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
16	Excelの基本操作を学ぶ（書式設定等について）。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
17	Excelの応用操作を学ぶ（グラフの作成、可能なら条件判断・処理分岐まで）。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
18	プログラミングを通して、論理的な思考・問題解決能力を学ぶ（Code.org®を用いて）。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
19	言語聴覚士にとって活用可能性の高いスマートフォンアプリを調査し、プレゼンテーション資料として作成を行う（引用文献の引用方法の復習、情報取得手段の復習を兼ねて）。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
20	ChatGPT、Perplexity AIなどの人工知能ツールの適切な使用方法について学ぶ。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。

21	Word・Excelの基本・応用操作の復習を行う。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。
22	模擬試験（終講試験と同等水準の簡略版）を実施する。	講義・グループワーク	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。 Word・Excelについて復習をしておくこと。
23	試験・解説（あるいはまとめ）	試験・講義	コンピューター室にて実施。 Teamsのパスワードを把握しておくこと。

■受講上の注意

毎回の成果物はクラウドにて保存を行う。それにあたり、Teamsのパスワードは把握しておくようにする事。
講義状況によって、上記の内容や順番を変更する場合もある。また、講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

適宜、資料を配布する。
（基本的には、コンピューター上でデータ資料にて配布を行う）

■備考

基本的にコンピューター室にて講義を行う。

■実務経験

社会心理学

講師：大薗 博記

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

対人関係並びに集団における人の意識、態度及び行動についての心の過程に関する、社会心理学の基礎的な知識と研究法を習得する。さらに、それらの知識を元に、社会での人間関係などの個人の問題から環境破壊や文化摩擦などの社会問題まで、多面的な視点から考察できるようになることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	オリエンテーション	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
2	原因帰属とステレオタイプ：差別を生み出す心理	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
3	自己と態度：自己欺瞞の心理	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
4	格差と公正：平等な社会を阻む心理	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
5	メディアの影響：社会のフィルターを知る	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
6	進化してきた心：ヒトの社会性の起源	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
7	身近な人間関係：恋愛と家族	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
8	友人関係とネットワーク：絆としがらみが作る社会	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
9	社会的ジレンマ：集団での協力と裏切り	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
10	集団間葛藤：ウチとソトの対立	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
11	西洋と東洋の心の違い：文化的自己観と認知スタイル	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
12	文化と適応：文化差の起源を求めて	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
13	幸福感と社会：幸せとは何か？	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
14	社会心理学史：変遷する人間観	講義・討論	ミニッツペーパーの提出。
15	終講試験およびまとめ	講義・討論	

■受講上の注意

毎回、討論を行う予定のため、積極的・主体的に参加すること。

■成績評価の方法

毎回のミニッツペーパー30%と終講試験70%

■テキスト参考書など

教科書：なし
参考書：社会心理学, 有斐閣。社会心理学キーワード、有斐閣。その他、適宜紹介する。

■備考

資料プリントは適宜配布する。

■実務経験

基礎教育学

講師：髙谷 哲也

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

教育学分野の基礎的な専門知見を学ぶ。

人間が成長するうえで教育が果たす役割、教えることと学ぶことの関係、生涯にわたり学び続けていくということの意味などについて、理解を深めてもらう。加えて、ものごとを教育学的にみることのできる力を獲得することに重きを置く。そのため、実際に他者と協力しながら学ぶ演習に取り組みながら、そこから専門的な概念や事象の意味を理解したり、様々な学び方を身につけたりする学習方法も獲得してもらう。

基礎的な教育学の専門的概念やものの見方を獲得し、医療やヒューマンサービス分野における営みに自身の力で応用していける専門的力量を身につけてもらう。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「教育学」という学問の特徴と本授業の進め方を体験する	演習・GW	不安な事があれば遠慮なくお知らせください。
2	学習における自己評価の役割と重要性について理解する	講義・GW・映像視聴	グループでの演習の進め方のコツをつかめるよう意識しましょう。
3	学びと知識獲得のメカニズムについて自身の経験と関連づけて理解する	講義・GW	グループでの演習の進め方のコツを覚えましょう。
4	理想の教育像が経験に左右されることを理解する	講義・GW・映像視聴	自分と価値観・考え方が異なる人に真摯に学ぶスタイルを獲得しましょう。
5	子どもの成長を促す要素について理解する	講義・GW・映像視聴	他者と対話をしやすい空気の作り方を意識しましょう。
6	学習者の成長可能性への着目の重要性を理解する	講義・GW・映像視聴	自分の考えを正確に伝えることを意識しましょう。
7	成長における挑戦と失敗の意味について理解する	講義・GW・映像視聴	自分たちで学びを創りあげる学習に挑戦してもらいます。
8	教育と学習、教えることと学ぶことの関係を整理する	演習・GW	自分たちで学びを創りあげる際に必要なことを意識しましょう。
9	集団の中での学びと社会化について理解する	演習・GW・映像視聴	自分の力だけでは不安な時に、いかに上手に助けを借りるかに挑戦しましょう。
10	学習者の内面にある想いについて想像することのできる知識と力を獲得する	講義・演習・GW	これまでの学びの自分なりの意味づけ・意義づけをする学び方を経験しましょう。
11	教育におけるメディアの概念を理解する	講義・演習・GW	難解な概念や文章を読み解く際に、他者の力をいかに借りるかを考えましょう。
12	院内学級における教師の子どもとの向き合い方に学ぶ	講義・GW・映像視聴	映像資料を細部まで観察しながら視聴することを心がけましょう。
13	「省察」を通した専門職の成長について学ぶ	講義・GW・映像視聴	自分を客観視・メタ認知できるようになるために何が必要か復習しておきましょう
14	学習における相互評価の意味と「ほめる」ことの本質について理解する	講義・GW	他者の課題に対してフィードバックする際の心がけを意識して取り組みましょう。
15	本授業を通した学びをふり返り、最終課題を完成させる	講義・演習試験	個人の力と他者と協働する力の両面を発揮して最終課題に取り組みましょう。

■受講上の注意

他者と協力しながら学ぶ機会を多く設定しているため、互いに学びを楽しめるためには何が必要かを考えるとともに、遠慮なく他者の力を借りることができるようになってもらいたい。

■成績評価の方法

1. 各回の演習・議論への取り組み状況、提出ワークシートの評価（20%）
2. 各回の演習・思考内容を記載していく記録シートの評価（30%）
3. 最終課題（50%）

■テキスト参考書など

【参考書】木村元編（2015）『系統看護学講座 基礎分野 教育学』医学書院

■備考

授業では適宜資料プリントを配付する。

■実務経験

統計学

講師：島 義弘

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

統計学的な考え方を理解し，統計学の基本的な知識を修得することを目標とする。この科目を通して，実際のデータを扱う中で，適切な統計処理を施し，正しく報告・解釈できるようになる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	統計学の概要を理解できる	講義	該当箇所の復習（教科書，レジュメ）
2	尺度水準を理解し，データの図表で表すことができる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
3	代表値の意味を理解し，求めることができる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
4	散布度の意味を理解し，求めることができる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
5	標準化の意味を理解し，求めることができる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
6	相関係数の意味を理解し，求めることができる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
7	推測統計学の考え方を理解できる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
8	母集団と標本について理解できる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
9	正規分布について理解できる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
10	不偏性について理解できる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
11	統計的仮説検定の考え方を理解できる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
12	2つの平均値の差の検定を行うことができる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
13	3つ以上の平均値の差の検定を行うことができる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
14	カテゴリ変数の連関を調べることができる	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

欠席をしないこと。演習課題には積極的に取り組むこと。私語は厳禁，ただし，講義中の演習課題で分からないところは積極的に教員や他の受講生に質問し，理解に努めること。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

『公認心理師ベーシック講座　心理学統計法』 芝田征司（著） 講談社

■備考

教科書のほかに，レジュメを配布する。電卓（タブレット等の電卓機能で可）はあったほうがよい。

■実務経験

心理学Ⅰ

講師：山下 協子

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

「こころ」の問題は、特定の人たちの問題ではなく、私たちすべての人間の人生や生活に密接に関係している。本講義では、「こころ」の問題に興味をもち、取り組む姿勢を自分自身で考えることができるようになるために、様々な状況での感覚を体験する体験学習を交えながら、基礎となる心理学および臨床心理学について概説していく。心理学および臨床心理学の基礎的な知識を習得し、関連する用語や療法等について理解できるようになることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	心理学・臨床心理学および臨床心理士とは何かを知る	講義・GW	特になし
2	「心理学の歴史と方法」「心の発達」について理解する	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
3	「感覚と知覚」「学習」「記憶と思考」について理解する	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
4	「言語と知能」「動機づけと情動」について理解する	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
5	「性格」「対人関係と集団」について理解する	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
6	「精神分析」「分析心理学」について理解する	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
7	「クライエント中心療法」「行動療法」について理解する	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
8	「心理臨床に必要な精神医学の知識」「心理臨床に必要な心身医学の知識」について理解する	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
9	「発達検査および知能検査」「質問紙法検査」について理解する	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
10	「投影法検査」「心理療法の技法」について理解する	講義・GW	テキストの該当章を読んでおく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。
11	統合失調症について理解する（映画鑑賞①）	講義・DVD	統合失調症について復習しておく。
12	統合失調症について理解する（映画鑑賞②）	講義・GW	統合失調症について復習しておく。GWでは積極的に自分の意見を伝える。映画の感想レポートを課する。
13	「カウンセリングとは何か」について理解する	講義・GW	GWでは積極的に自分の意見を伝える。
14	「傾聴とは何か」について理解する	講義・GW	GWでは積極的に自分の意見を伝える。
15	終講試験およびまとめ		事前に配布する問題集を参考に復習しておく。

■受講上の注意

講義は基本的にはテキストに沿って進める。当日レジメを配布するが、事前に該当する章を読んで臨んでほしい。体験を目的とする学習材料をほぼ各回で用意する予定であるが、私語などせず真摯に取り組み、グループワークの際には積極的に意見を述べてほしい。

■成績評価の方法

試験90%、平常点10%（授業への参加態度、課題など）により総合的に評価する。

■テキスト参考書など

・テキスト：『基礎から学ぶ心理学・臨床心理学』山　祐嗣・山口　素子・小林　知博　　編 著；北大路書房
・授業での配布資料

■備考

講義用のレジメや資料は適宜配布する。

■実務経験

心理学Ⅱ

講師：山口 浩明、戌亥 啓一

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

心理学は主観的な評価によるカウンセリングやセラピーが行われるという一般的な印象があるが、実際には実験心理学で培われた客観的、量的なデータを積み上げ、解釈を行う自然科学を基盤とした領域である。根拠を持ったカウンセリングやセラピーにつなげるために客観的視点を持った心理学的アプローチの方法を身につけ、実践する経験を踏むことを目標とする。
「心理学Ⅱ」では、標準化された検査のデータを利用し、心理検査の理論や構成を知ること・理解することを通して心理学における客観的視点の重要性を認識することを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ウエクスラー系心理検査を例として心理の量的解釈を学ぶための基本用語を知る ウエクスラー系心理検査を例として心理の量的解釈を学ぶためのマニュアルを参照する	講義	特になし
2	ウエクスラー系心理検査Aを例に評価－結果を確認する（1）	GW・講義	予習・復習
3	ウエクスラー系心理検査Aを例に評価－結果を確認する（2）	GW・講義	予習・復習
4	ウエクスラー系心理検査Aを例に評価－結果を確認する（3）	GW・講義	予習・復習
5	ウエクスラー系心理検査Aを例に評価－結果を確認する（4）	GW・講義	予習・復習
6	ウエクスラー系心理検査Aを例に評価－結果を確認する（5）	GW・講義	予習・復習
7	結果の解釈に向けた基礎的な知識を知る（1）	GW・講義	予習・復習
8	結果の解釈に向けた基礎的な知識を知る（2）	GW・講義	予習・復習
9	心理検査Bを例に評価－結果を確認する（1）	GW・講義	予習・復習
10	心理検査Bを例に評価－結果を確認する（2）	GW・講義	予習・復習
11	心理検査Bを例に評価－結果を確認する（3）	GW・講義	予習・復習
12	心理検査Bを例に評価－結果を確認する（4）	GW・講義	予習・復習
13	結果の解釈に向けた基礎的な知識を知る（3）	GW・講義	予習・復習
14	結果の解釈に向けた基礎的な知識を知る（4）	GW・講義	予習・復習
15	終講試験とまとめ	試験	

■受講上の注意

積極的参加および予習・復習が必要である。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

配布資料

■備考

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

英語Ⅰ

講師：飯田 敏博

単位数：2単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

日常英語において、「センテンス・レベル」のライティングだけでなく、「パラグラフ・レベル」のライティングにも対応できることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	進行形を使った英文を作ることができる	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
2	未来形を使った英文を作ることができる	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
3	助動詞can, may, willを使った英文を作ることができる	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
4	助動詞must, shouldを使った英文を作ることができる	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
5	受動態を使った英文を作ることができる	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
6	比較表現を使った英文を作ることができる	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
7	不定詞を使った英文を作ることができる	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
8	現在完了を使った英文を作ることができる	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
9	分詞を使った英文を作ることができる	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
10	動名詞を使った英文を作ることができる	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
11	前置詞の使い分けを理解した英文を作ることができる	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
12	間接疑問文を使った英文を作ることができる	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
13	接続詞の使い分けを理解した英文を作ることができる	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
14	関係代名詞を使った英文を作ることができる	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
15	まとめ・終講試験	筆記試験	

■受講上の注意

テキストの練習問題は必ず解いてくること。テキスト、英和辞典、あるいは電子辞書（英和・和英のほか英英辞典の機能がつくとさらに良い）を必ず持参すること。

■成績評価の方法

試験（80%）、授業への参加態度（20%）
本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

テキスト：Three-line Writing in English（日常英語ライティング入門） 成美堂

■備考

資料のプリントは適宜配布する。

■実務経験

英語Ⅱ

講師：飯田 敏博

単位数：2単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

文法・語法を学び、英文構成力を身につけ、豊かな表現力をもった英語が話せ、書けることを目標とする

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	Be動詞、Have動詞を理解する	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
2	一般動詞を理解する	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
3	名詞、冠詞、代名詞を理解する	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
4	現在形、現在進行形を理解する	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
5	過去形、過去進行形、未来形を理解する	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
6	現在完了、過去完了、未来完了の時制を理解する	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
7	疑問詞、助動詞を理解する	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
8	助動詞の応用力を身につける	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
9	形容詞、副詞、受け身を理解する	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
10	同等比較、比較級、最上級を理解する	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
11	不定詞を理解する	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
12	分詞を理解する	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
13	動名詞、接続詞を理解する	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
14	関係詞を理解する	講義・GW	音読を含む予習・復習をすること
15	まとめ・終講試験	筆記試験	

■受講上の注意

テキストの練習問題は必ず解いてくること。テキスト、英和辞典、あるいは電子辞書（英和・和英のほか英英辞典の機能がつくとさらに良い）を必ず持参すること。

■成績評価の方法

試験（80%）、授業への参加態度（20%）
本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

テキスト：Keystone-Grammar-based English Writing- （基本英文から現代英語表現へ）成美堂

■備考

資料のプリントは適宜配布する。

■実務経験

保健体育

講師：寺前 重幸、冨安 恵子

単位数：2単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

バレーボール及びバスケットボールの基本的な動きを身につける。さらに、スポーツを通じて、コミュニケーション能力の向上やストレスの軽減を図り、日常生活の中で、運動をする習慣を身につける。また、健康について考え理解し、健康的な生活を送れるようになる。

健康はさまざまな要因の影響をうけているが，それらは，「人間の生物としての側面」「生活習慣」「環境」「保健・医療サービス」の4つに分けて 考えることができる。

本講義では、保健・医療サービスの概要を知るとともに、疾病の予防や健康増進に関する保健師・看護師の具体的活動や役割について学習する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	科目目標をしっかり理解し、バレーボール及びbasketballのルールをしっかり理解できる。	講義・実技	教室でガイダンスを行い、体育館へ移動するので体育ができる服装に着替えてから、教室で待機する
2	パス及びサーブができる（バレーボール）	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
3	ゲームでの一連の動きができる（バレーボール）	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
4	パス、ドリブル及びシュートができる（バスケットボール）	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
5	ゲームでの一連の動きができる（バスケットボール）	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
6	自分たちで競技を選び実施できる。（選択競技）	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
7	自分たちで競技を選び実施できる。（選択競技）	実技	体育ができる服装・シューズを準備する
8	健康（健康・生活習慣病・食育・運動・休養・喫煙）について理解できる	講義	事前にプリントを配布するので、講義までに読んでおく
9	健康（飲酒・薬物乱用・感染症・応急手当・心の健康）について理解できる	講義	事前にプリントを配布するので、講義までに読んでおく
10	授業の総括及び終講試験	講義筆記試験	
11	看護職とは何か、保健師、助産師、看護師の役割について	講義DVD	看護職についてのイメージをまとめてくる
12	様々な場における看護師の役割と具体的活動	講義DVD	講義資料を必ず持参する
13	保健所における保健師の役割と具体的活動	講義GW	GWの時は活発に意見を交わす
14	市町村における保健師の役割と具体的活動	講義GW	GWの時は活発に意見を交わす
15	事例を通して疾病の予防や健康増進に関しての保健師・看護師の役割と他職種との連携のあり方を考える 発表後レポート作成	GW試験	自分の意見をまとめて臨む

■受講上の注意

運動できる服装及び体育館用運動シューズを用意すること。忘れ物の無いようにし、規範意識を持ち、積極的に講義に臨むこと。配布する資料を忘れずに、講義内容はこまめに追記し、主体的に臨んでください。

■成績評価の方法

平常点（30%）、実技点（40%）、試験・課題レポート（30%）により、本試験、再試験ともに総合的に評価する

■テキスト参考書など

特になし
必要な場合は、適宜プリントを配布する

■備考

適宜、資料を配付

■実務経験

本科目の第11講以降は、看護師・保健師として実務経験のある教員による授業である。

医学総論

講師：山下 佐英、青山 公治

単位数：1単位	時間数：20時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

医療従事者にあっては、患者の健康事象はその患者を取り巻く生活要因と地域社会と密接に関わっているという視点をもつことが必要である。そのような意味で、将来、公衆衛生的素養をもった言語聴覚士として活躍するために必要な基礎的知識・技術および習慣・態度を身につけること。

そして、医学では、人間の健康について、さらに病気の原因やしくみ、症状、所見、身体構造の変化を明らかにした上で、病気と対峙する。 医学とは、病気を乗り越えて健康を維持しようとする人間の知的活動であり、その医学に基づく行為が医療である。

本授業では、各章毎に解説を加え、豊富な学識を体得することを目標としている。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「健康と公衆衛生学」 健康の概念と健康の決定因子を説明できる。公衆衛生学の目的とそれを達成するための方法を説明できる。	講義	配布資料、教科書、板書に基づき講義を進める。予習は教科書、復習は配付資料、板書記録および教科書を見返し整理すること
2	「保健統計」 集団としての健康水準をはかる健康指標を列挙し、主な指標についてわが国の動向を説明できる。	講義	
3	「疫学」 疫学という科学の目的を説明できる。病気の発症要因と結果という関連性及び因果性を検証する疫学研究の方法を説明できる。	講義	
4	「疾病の予防」 広義の予防医学の3段階のプロセスを説明できる。感染症の感染成立要因を説明できる。主な生活習慣病のリスク要因を列挙できる。	講義	
5	「母子保健」 地域における母子保健活動の目的とその現状と対策を説明できる。	講義	
6	「産業保健」 働く人々の産業保健活動の目的を説明できる。主な職業病を列挙できる。	講義	
7	「環境保健」 健康はヒトと生活環境の諸要因との相互作用によって成立していることを具体的に説明できる。上下水道および廃棄物処理の法的整備について説明できる。	講義	
8	健康について、また医学の歴史、医療の基本が理解できる。	講義	テキストの健康、医学の基本、医療の現場を読んでくる。
9	病気の基本、また診断と治療、予防について理解できる。	講義	テキストの病気の基本・分類、診断、治療、予防医療を読んでくる。
10	「終講試験とまとめ」	試験・講義	

■受講上の注意

教科書、配付資料及び板書に基づき授業を進めるが、公衆衛生に関連する社会情報に日頃から関心を持ち、理解を深めること。
※講義順が前後することがあるが、その場合は担任より事前に連絡を行う。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

厚生の指標「国民衛生の動向」（厚生労働統計協会）、公衆衛生学　社会・環境と健康　2023年版，医歯薬出版
日野原重明　医学概論，医学書院

■備考

■実務経験

本科目は、医師として実務経験のある教員による授業である。

医療倫理

講師：松尾 康弘

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

日本言語聴覚士協会における倫理綱領序文では「言語聴覚士は、自らの責任を自覚し、人類愛の精神のもと、全ての人々に奉仕する」と記されている。言語聴覚士は普遍的に他者を尊重し、自己研鑽を積み、対象者と社会に対して最善を尽くさなければならない。
本科目では、臨床において、対象者の人生観や価値観を尊重し、本人のQOLの向上やwell-beingに寄与できる倫理観を得ることを目指す。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	人間の尊厳を考える	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
2	倫理4原則について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
3	対象者の自己決定を尊重することの意義について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
4	告知について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
5	身体拘束と行動コントロールの倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
6	守秘義務とその解除・個人情報保護について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
7	希少な医療資源の公正配分について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
8	終末期医療の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
9	終末期医療（DNAR）の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
10	生殖補助医療の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
11	遺伝性疾患における倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
12	摂食・嚥下障害の倫理について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
13	医療者ー患者（対象者）関係について理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
14	倫理コンサルテーションについて理解する	PBL・TBL	チームで実施するため、活発なディスカッションを期待する
15	試験・解説	試験・解説	

■受講上の注意

毎講義終了後、ワークシートを提出してもらいます。

■成績評価の方法

講義への参加態度（20%）・ワークシート提出（40%）・試験（40%）により総合的に評価し、本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

■備考

■実務経験

人体の構造・機能・病態Ⅰ

講師：津山 新一郎

単位数：1単位　　時間数：30時間　　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

人体の構造・機能・病態Ⅰでの解剖学の全体的な理解を深めるというより、言語聴覚療法士として関係のある解剖の内容に限定して理解を深めることを目指す。項目的には以下のような事項の理解に注力する。 細胞については細胞膜表面の構造と機能との関連について。　神経系については中枢神経と末梢神経の関係について特に言語活動との関連で脳神経 Ⅷ, Ⅸ, Ⅹの理解を深める。伝音系、感音系における聴覚器の構造の理解。咽頭・喉頭の全体的成り立ちと声帯の構造、動作機能の働き等の理解を深める。 授業の進め方については受け身で講義を聞くのでなく積極的に参加することを目指す事を目的として、具体的には教室全員をグループ分けし、テーマを決めて各自で調べ、発表を行う「Group Working」と講義を並行する。さらに各項目での要点・重点の抽出、何がポイントになるか提示を行わせる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ヒト発生の概略：胚発生, 器官発生, 咽頭弓（鰓弓）などを理解できる。特に咽頭弓由来の器官について理解できる。	講義と演習	ヒト発生期間の胚期、胎児期などの理解。器官形成における過程などの理解を深める。
2	消化器系：口腔、消化管（食道, 胃, 小腸, 大腸), 消化腺(肝臓, 胆嚢, 膵臓)。　器官全体の総合的な理解を図る。特に上部消化管の構造と肝・胆・膵臓についての理解ができる。	講義と演習	消化管と消化腺に分けて系統立てて栄養摂取との関連で理解。
3	嚥下について：嚥下に関わる食道までの器官である舌, 咽頭, 喉頭の解剖的理解と、嚥下における働きと機能について解剖学的に理解できる。　　グループワーク ①	講義と演習, group work	食塊を取り込む際の咽頭での振り分け機構と支配神経の関係の理解。
4	呼吸器系：鼻腔、気道、呼吸部における系の全体的構成が理解できる。咽頭・喉頭部の構成、気管支から肺胞迄を理解できる。	講義と演習	上気道・下気道, 気管支の分岐、肺胞におけるガス交換の意義と構造、生理学との関連性。
5	発声について：咽頭から喉頭まで構造が理解できる。声門部分の構成、発声時の声帯の動き、声門裂の動きに関わる筋が理解できる。　　グループワーク ②	講義と演習, group work	咽頭と喉頭の成り立ちの詳細。発声器としての声門の構造と筋の運動、支配神経の関連性。
6	神経系 ：概論, 神経系の成り立ちが理解できる。ニューロンの成り立ちが理解できる。神経系の機能としての運動・知覚ニューロンが理解できる。	講義と演習	神経系の機能と刺激の伝達に関して細胞レベルとニューロンの関連付け。
7	中枢神経；脳の構成、各脳の機能、伝導路について理解できる。 脊髄の成り立ち、機能が理解できる。□グループワーク ③	講義と演習, group work	脳の構成と機能の局在の関連性についての理解をすすめる。
8	末梢神経；脳神経12対の中でも特にⅤ, Ⅶ, Ⅷ, Ⅸ, Ⅹ, Ⅻの分布、機能について理解出来る。	講義と演習	末梢神経の中でも咽頭・喉頭における作用と聴覚・発声に関連した神経の働きを系統立てる。
9	末梢神経；脊髄神経の中でも特に呼吸筋支配、上・下肢の運動支配神経、デルマトームの理解ができる。 中間テスト	講義と演習	筋運動と皮膚知覚を脊髄分節として理解する。
10	感覚器系　聴覚器の成り立ちが理解できる。 伝音系である外耳から中耳までが理解できる。	講義と演習	聴覚器(伝音系)における音のとらえ方を順序だてして明確化する。
11	感音系である内耳の成り立ち、コルチ器の構造、聴覚伝導路が理解できる。　□ グループワーク ④	講義と演習, group work	蝸牛管 コルチ器における音波振動の神経系における電気信号に変える機構の理解。
12	平衡覚器　平衡覚の概念が理解できる。半規管の成り立ちと働き, 球形嚢・卵形嚢における平衡斑の成り立ちと働きが理解できる。　　□ グループワーク ⑤	講義と演習, group work	平衡覚における知覚を運動方向覚、重力方向覚の成分捕捉として区別を明確にする。
13	視覚器、味覚・嗅覚器の構成が理解できる。特に感覚細胞の構成が理解できる。視覚路、味覚・嗅覚路が理解できる。　　グループワーク⑥	講義と演習, group work	視覚、味覚、嗅覚などの感覚器の働き作用を区別する。
14	言語・聴覚系における解剖学からみた感覚器と神経系の総括	講義と演習	発音器官、構音器官と呼吸・消化器官の関連を神経、筋運動と関連づける。
15	終了試験とまとめ		

■受講上の注意

膨大な情報を要領よく、系統的に理解する。ばらばらな知識は役立たない。
人に対する尊厳を忘れない。

■成績評価の方法

中間試験30%、終講試験70%, 平常点（受講態度）等を総合して行う.

■テキスト参考書など

教科書：言語聴覚士のための解剖・生理学□小林靖著　医歯薬出版.　参考資料：標準解剖学　坂井建雄著　医学書院.

■備考

プリント資料：レジュメを用意するので目を通しておくこと。

■実務経験

人体の構造・機能・病態Ⅱ

講師：笠井 聖仙

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

「人体の構造・機能・病態Ⅱ」を通して、高度に複雑化した人体の生存に必須の機能について学習するが、次のようなことを目標にして学習してほしい。

1　人体を構成する基本的な細胞や組織の機能について説明できる。DNAの異常における病態を説明できる。
2　約1日のリズムである概日リズムをそのメカニズムとリズム異常による疾病や医学における応用について説明できる。
3　身体が外界からの刺激を感知し応答する特殊感覚や神経系の基本的な機能について説明できる。
4　内分泌系が神経系と密接に関連してはたらき、人体のあらゆる細胞の活動を制御することを説明できる。内分泌系の異常による疾病を説明できる。
5　筋は身体の運動だけでなく、食物や尿などが消化器系や泌尿器系を運ばれるのに役立つことを説明できる。
6　終講義テストと講義

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	一般的な細胞の機能を理解し、細胞膜の主な機能を理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
2	細胞内小器官や核の主な機能を説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
3	概日リズムが内因性のものであり、その具体的な例とメカニズムついて理解し説明できる	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
4	概日リズムが各種生理機能に見られ、疾病の発現に関与することを具体的な例をあげて理解し説明できる。また、概日リズムリズムの乱れにより胃腸障害、循環器障害、睡眠リズムの乱れが起こることを理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
5	外界の刺激が特異的受容器により感知され、脳への投射に活動電位という信号で伝えられることを理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
6	聴覚と平衡感覚受容機構を理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
7	嗅覚・味覚の受容機構とそれらの社会的意義について説明できる。生きるための味覚、楽しむための味覚の違いについて説明できる。味覚障害はどのようなものがあるか、その治療法について理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
8	生体の警告信号系としての痛みについて理解し説明できる。慢性痛発症機序について理解する。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
9	ホルモンであるバソプレシン、メラトニン、成長ホルモン、甲状腺ホルモンの分泌機序とその作用について説明できる。これらホルモンの分泌異常で起こる病態について説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
10	ホルモンである副腎皮質ホルモン、副腎髄質ホルモンの分泌機序とその作用について理解し説明できる。副腎皮質ホルモンの分泌以上によって起こる病態について説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
11	自律神経系の働きについて説明できる。特に、内臓を支配する迷走神経（副交感神経）の働きを理解する。自律神経系とホルモン分泌との関連について説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
12	3種の筋組織の基本的な機能と骨格筋フィラメントの収縮に対する役割を説明できる。反射の種類と反射弓の構成要素をあげ説明できる。自律神経系による平滑筋の調節について理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
13	筋肉の神経支配について説明できる。筋肉を支配する運動神経が乳幼児の時期にシナプス回路網が一旦増加し、成長するにつれて脱落する。その意味合いについて理解し説明できる。	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
14	心臓の神経支配と体液支配および心電図波形発生メカニズムについて説明できる	講義	配布した授業内容の要約プリントを事前に一読し、教科書の図表に目を通しておく。
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

教科書を基にしたテキストを配布し、自学自習できるように問題集も配布する。授業では、図や表をもとにパワーポイントで解説するが、その内容を理解するために、配布したプリントに事前に目を通し、授業で得た知識をもとに、さらに復習問題や確認事項にも積極的に取り組んでほしい。

■成績評価の方法

本試験・再試験（85%）・平常点（15%）。平常点は出席と受講態度をもって評価する

■テキスト参考書など

テキスト：「人体の構造と機能」第4版　エレイン・N・マリーブ著　林正　健二ほか訳、医学書院　　参考書：「よくわかる生理学の基本としくみ」當瀬規嗣著　秀和システムほか

■備考

授業内容の要約プリントは前もって配布する。

■実務経験

医科学Ⅰ

講師：外薗 寿典、石田 和久
天野 夢子、廣畑 俊和、德永 弘樹

単位数：2単位　時間数：40時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

本講義では、臨床医学分野の中でも「形成外科学」「リハビリテーション医学」「薬理学」の各医学分野について深めた内容を展開していく。各分野とも言語聴覚療法の専門領域に関わる重要な分野である。
各分野の詳細は別紙配付資料を参照し講義に臨む。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	形成外科学の概要について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
2	形成外科の基本的な手術法について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
3	腫瘍に対する治療について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
4	顔面・四肢外傷、美容について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
5	形成外科領域における言語療法について理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
6	口唇口蓋裂の言語的特徴について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
7	口唇口蓋裂の言語評価について理解を深める。	講義	配付資料の要点を整理する。
8	試験（形成外科学分野）	筆記試験	
9	リハビリテーション医学（1） 摂食嚥下障害の処方、原因疾患と評価治療（1）	講義	
10	リハビリテーション医学（2） 摂食嚥下障害の処方、原因疾患と評価治療（2）	講義	第9・10回講義についてレポート課題を提出すること。
11	リハビリテーション医学（3） 高次脳機能障害の処方、原因疾患と評価治療（1）	講義	
12	リハビリテーション医学（4） 高次脳機能障害の処方、原因疾患と評価治療（2）	講義	第11・12回講義についてレポート課題を提出すること。
13	①実際の臨床現場で、処方薬から目的や疾患を把握できるよう、検索方法や添付文書の見方を理解 し、実際の処方で活用してみる。 ②薬の多様な用法について理解を深めるとともに、食品との飲み合わせや吸収に影響を及ぼす相互作用、薬物依存等を考える。 ③中枢系の各部位を模式的に理解し、特徴的な機能を確認する。	講義 GW IT利用検索 医薬品集 処方演習	・第1回薬理学から実施 ・インターネット活用 ・医薬品集、アプリ参照 ・過去の国試をもとに習得状況を確認する
14	①脳の伝達系異常と神経疾患について、心身症、うつ病、パーキン ソン病、統合失調症等の病態と薬物療法を理解し、副作用を考える。 ②脳卒中の急性期や回復期、慢性期の薬物療法を学び、その作用から言語聴覚療法への影響を考える。	講義・演習 IT利用検索 医薬品集	・第2回薬理学を一読しておく ・医薬品集、アプリ参照 ・過去の国試をもとに習得状況を確認する
15	認知症初期の病変部位による分類をもとに、臨床で遭遇する特徴的症状を理解し、処方される薬剤の作用や副作用を学ぶ。その他、てんかんやせん妄など知っておきたい疾患に処方される薬剤について、知識を深める。	講義・演習 IT利用検索 医薬品集	・第3回薬理学を一読しておく ・医薬品集、アプリ参照 ・過去の国試をもとに習得状況を確認する
16	循環器系の疾患に対応するために、心不全、不整脈、狭心症、高血圧、血栓性疾患等の病態を心臓および循環器系を図解化して理解し、治療薬の種類と作用機序、副作用を系統的に学ぶ。	講義・演習 IT利用検索 医薬品集	・第4回薬理学を一読しておく ・医薬品集、アプリ参照 ・過去の国試をもとに習得状況を確認する
17	①注射剤を理解すべく、細胞の機能や電解質、糖、アミノ酸などの役割を理解し、臨床でよく見かける点滴製剤の特徴を学ぶ。高血糖や腎機能低下時の薬物療法への理解も深める。よく利用されるサプリメントについても確認する。 ②高齢者に多い泌尿器障害や排便困難、消化管障害等について、治療薬の種類と作用機序、副作用を考える。	講義・演習 IT利用検索 医薬品集	・第5回薬理学を一読しておく ・ドラッグストア等で事前にサプリメントを見てみる ・インターネット活用 ・医薬品集、アプリ参照 ・過去の国試をもとに習得状況を確認する
18	①骨粗鬆症について、骨芽細胞や破骨細胞の機能とモデリングを理解し、治療薬の種類と作用機序、副作用を学ぶ。 ②免疫系の疾患への理解を深めるべく、生体防御機構を理解し、アレルギー用剤、気管支喘息用剤、抗菌剤・抗ウィルス剤、関節リウマチ用剤に加え、抗がん剤についても理解を深める。	講義・演習 IT利用検索 医薬品集	・第6回薬理学を一読しておく ・医薬品集、アプリ参照 ・過去の国試をもとに習得状況を確認する
19	「痛み」について、伝達経路を図解化して理解し、今回までに学んだ薬の組み合わせ効果、さらにはオピオイド・非オピオイド鎮痛薬等について理解を深める。	講義・演習 IT利用検索 医薬品集	・第7回薬理学を一読しておく ・医薬品集、アプリ参照 ・過去の国試をもとに習得状況を確認する

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。
私語は慎む。なお、講義中の質問および終了後の質問は積極的に行ってほしい。講義の予習とともに学んだ方法は実践してみること。講義で使用するオリジナルテキストを忘れないようにする。また、図解し演習する機会もあるので、各自で記録可能なノートなどを準備する。主体的に講義に臨むこと。

■成績評価の方法

形成外科学分野：試験100%
リハビリテーション医学分野：レポート課題、出席
薬理学分野：試験（90%）・授業への参加態度（10%）により総合的に評価する。試験は筆記にて行い、その結果を最重要視するが、質問等を通した講義への積極的な参加など受講態度なども加味する。

■テキスト参考書など

薬理学分野：テキスト：過去5年間の国家試験問題をもとに作成したオリジナルテキストおよび医薬品集を利用。また、IT活用として正確かつ最新の薬剤情報を取得できるアプリも利用する。各回ごとの学びは最近の国家試験問題を解くことで習得したこととする。

■備考

適宜資料を配付する。
薬理学分野：上記のオリジナルテキストおよび医薬品集は事前配布する。講義にはインターネット環境のパソコン1台とプロジェクターを準備。インターネットの検索サイト(pmda、薬価サーチ2023 他)の閲覧およびテキストを投影する。App Store・Android無料アプリ「ヤクチエ添付文書」の活用と機能は講義中に説明する。

■実務経験

本科目は、医師、薬剤師、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

医科学Ⅱ

講師：永野 広海、岡田 洋一、宮下 圭一、山下 勝、川畠 雅樹、大堀 純一郎、田中 洋、迫田 和也、有薗 良一

単位数：2単位	時間数：40時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

本講義では、臨床医学分野の中でも「耳鼻咽喉科学」「小児科学」「神経内科学」「精神医学」の各医学分野について深めた内容を展開していく。各分野とも言語聴覚療法の専門領域に関わる重要な分野である。
各分野の詳細は別紙配付資料を参照し講義に臨む。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	耳科学　聴覚障害について(1)	講義	
2	耳科学　聴覚障害について(2)	講義	
3	耳科学　耳疾患　めまい・平衡障害　各論	講義	
4	鼻科学　鼻疾患	講義	
5	口腔咽頭科学　口腔咽頭疾患	講義	
6	喉頭科学　喉頭疾患	講義	
7	気管食道科学　嚥下障害	講義	
8	子どもの発達の特徴を理解できる。 発達障害について理解する。	講義	
9	神経難病について理解を深める。	講義	
10	先天異常総論（染色体異常、胎芽病・胎児病、遺伝カウンセリング）・各論（遺伝子論）について理解する。	講義	
11	ことばの遅れについて理解する。 障害と障害児・療育について理解する。	講義	
12	エコーについて理解を深める (1)	講義	画像診断（超音波）の特性を予習しておく。
13	エコーについて理解を深める (2)	講義	画像診断（超音波）の特性を予習しておく。
14	画像検査の概要を知る。	講義	画像診断の基本的な考え方を学習しておく。
15	MRIによる画像検査の概要を知る。	講義	画像診断（MRI：磁気共鳴）の基本的な考え方を学習しておく。
16	精神医学の概念、精神科リハビリテーションについて理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
17	精神科リハビリテーションのプロセスと技法について理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
18	うつ病、双極性障害、トラウマとPTSDについて理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
19	境界性人格障害、統合失調症、アルコール依存症、嗜好問題について理解する。	講義	配付資料の要点を整理する。
20	試験（精神医学分野）とまとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

各講義回後のレポートおよび試験（精神医学分野）による。
※本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

適宜資料を配付する。以下の参考書は分野ごとに予習・持参・使用すること。
病気が見える「耳鼻咽喉科」vol.13, メディックメディア
病気が見える「脳と神経」vol.7, メディックメディア
心の病気って何だろう？, 平凡社

■備考

■実務経験

本科目は、医師、精神保健福祉士、診療放射線技師として実務経験のある教員による授業である。

医科学Ⅲ

講師：吉家 清貴

単位数：2単位	時間数：40時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

内科学は、すべての臨床医学の基本であり、疾病の原因・誘因、症状、診断、治療、予防について学ぶ。
内容が多岐にわたるので、必要最低限の疾患について講義、症例を供覧するが、自主的により広く、より深く学ぶ姿勢が大切である。
医療従事者が理解しておくべき疾患について、患者からの質問があった場合に、言語療法士として簡明に説明できる能力を獲得することを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	病理学　退行性変性と進行性変性、壊死とアポトーシス、修復、腫瘍	講義	
2	神経系疾患　神経機能の局在と病変	講義	神経系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
3	循環器疾患1、2　検査法、狭心症、心筋梗塞、心臓弁膜症、不整脈	講義	循環系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
4	循環器疾患3、4　動脈硬化症、動脈瘤、下肢深部静脈血栓症、高血圧	講義	
5	呼吸器疾患1，2　検査法、副鼻腔炎、喉頭炎、気管支炎、気管支喘息	講義	呼吸器系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
6	呼吸器疾患3、4　慢性閉塞性肺疾患、肺気腫、呼吸異常、胸膜疾患	講義	
7	血液・造血器疾患1，2　検査法、貧血と治療、白血病、悪性リンパ腫	講義	血液系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
8	血液・造血器疾患3，4　白血病の治療、出血傾向、抗凝固療法	講義	
9	消化器疾患1，2　検査法、口腔・食道・胃の疾患	講義	消化器系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
10	消化器疾患3，4　小腸・大腸・直腸の疾患、痔瘻	講義	
11	代謝疾患1，2　検査法、糖尿病	講義	代謝系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
12	代謝疾患3，4　脂質代謝異常、メタボリックシンドローム、痛風	講義	
13	内分泌疾患1，2　検査法、脳下垂体疾患、各内分泌機能亢進・低下症	講義	内分泌系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
14	免疫と免疫異常1，2　免疫細胞と炎症	講義	免疫系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
15	免疫と免疫異常3，4　アレルギー疾患、膠原病	講義	
16	泌尿器疾患1，2　検査法、腎炎、腎不全、尿管結石、膀胱疾患	講義	泌尿器系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
17	感染症1，2　感染性微生物、各臓器感染症	講義	免疫系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
18	国家試験問題　国家試験過去問題供覧	講義	
19	まとめ	講義	
20	終講試験とまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

前もって講義プリントを配布するので、講義する範囲を一読しておくこと。また、関連臓器系の解剖・生理機能を復習しておくこと。
講義初めに前回の講義内容を復習する時間を設け、ミニテストを実施する。
自宅で復習することが大切です。わからないことがあれば講義後に質問してください。

■成績評価の方法

ミニテスト10%、最終試験90%　60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

内科学 最新版（標準理学療法学・作業療法学 専門基礎分野）　著者：奈良　勲、出版社：医学書院

■備考

書画カメラを用いて板書を映写する。板書内容はホームページから pdf ファイルとしてダウンロードできるようにする。

■実務経験

本科目は、医師として実務経験のある教員による授業である。

歯科学（歯科口腔外科学）

講師：杉原 一正

単位数：1単位　時間数：20時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

構音、咀嚼、摂食嚥下の障害と関係のある歯科・口腔外科的疾患（う蝕、歯周病、口唇裂・口蓋裂、顎変形症、口腔腫瘍、嚢胞、顎骨骨折、歯性感染症、口腔粘膜疾患など）の特徴と治療法について具体的に述べることができ、臨床の現場で言語聴覚士として口腔外科学の知識と技能を治療のエビデンスに活用する能力を養う。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	臨床歯科医学の全体像と特徴について説明できる。	講義	小テストの実施
2	歯科疾患（う蝕と歯周病）の成り立ちと治療法について説明できる。	講義	小テストの実施
3	口腔領域の先天異常（口唇裂・口蓋裂など）の特徴と治療法について説明できる	講義	小テストの実施
4	口腔領域の外傷（顎骨骨折など）と嚢胞（顎骨内および軟組織内に発生する）の特徴と治療法について説明できる	講義	小テストの実施
5	口腔領域の良性腫瘍と悪性腫瘍の特徴と治療法について説明できる	講義	小テストの実施
6	口腔領域の感染症の特徴と治療法について説明できる	講義	小テストの実施
7	口腔粘膜疾患、唾液腺疾患、顎関節疾患、神経疾患の特徴と治療法について説明できる	講義	小テストの実施
8	咀嚼障害の特徴、評価法、治療法について説明できる	講義	小テストの実施
9	摂食嚥下障害のメカニズム、検査法、治療法について説明できる 器質性構音障害と口腔疾患による構音障害の特徴、評価法、治療法について説明できる	講義	小テストの実施
10	終講試験	試験	

■受講上の注意

講義の予習（前もって教科書を読んでおく）をして、主体的授業に望むこと。

■成績評価の方法

終講試験(80%)、小テスト(20%)
※本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

『言語聴覚士のための臨床歯科医学・口腔外科学―器質性構音障害』第2版
医歯薬出版

■備考

資料プリントは毎回配布する。

■実務経験

本科目は、歯科医師として実務経験のある教員による授業である。

音声・言語・聴覚医学Ⅰ

講師：津山 新一郎

単位数：2単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

人体の構造・機能・病態Ⅰでの解剖学の全体的な理解を深めるというより、言語聴覚療法士として関係のある解剖の内容に限定して理解を深めることを目指す。項目的には以下のような事項の理解に注力する。 細胞については細胞膜表面の構造と機能との関連について。　神経系については中枢神経と末梢神経の関係について特に言語活動との関連で脳神経 Ⅷ, Ⅸ, Ⅹの理解を深める。伝音系、感音系における聴覚器の構造の理解。咽頭・喉頭の全体的成り立ちと声帯の構造、動作機能の働き等の理解を深める。 授業の進め方については受け身で講義を聞くのでなく積極的に参加することを目指す事を目的として、具体的には教室全員をグループ分けし、テーマを決めて各自で調べ、発表を行う「Group Working」と講義を並行する。さらに各項目での要点・重点の抽出、何がポイントになるか提示を行わせる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ヒト発生の概略：胚発生，器官発生，咽頭弓（鰓弓）などを理解できる。特に咽頭弓由来の器官について理解できる。	講義と演習	ヒト発生期間の胚期、胎児期などの理解。器官形成における過程などの理解を深める。
2	消化器系：口腔、消化管（食道，胃，小腸，大腸），消化腺(肝臓，胆嚢，膵臓)。　器官全体の総合的な理解を図る。特に上部消化管の構造と肝・胆・膵臓についての理解ができる。	講義と演習	消化管と消化腺に分けて系統立てて栄養摂取との関連で理解。
3	嚥下について：嚥下に関わる食道までの器官である舌，咽頭，喉頭の解剖的理解と、嚥下における働きと機能について解剖学的に理解できる。 グループワーク ①	講義と演習，group work	食塊を取り込む際の咽頭での振り分け機構と支配神経の関係の理解。
4	呼吸器系：鼻腔、気道、呼吸部における系の全体的構成が理解できる。咽頭・喉頭部の構成、気管支から肺胞迄を理解できる。	講義と演習	上気道・下気道，気管支の分岐、肺胞におけるガス交換の意義と構造、生理学との関連性。
5	発声について：咽頭から喉頭まで構造が理解できる。声門部分の構成、発声時の声帯の動き、声門裂の動きに関わる筋が理解できる。 グループワーク ②	講義と演習，group work	咽頭と喉頭の成り立ちの詳細。発声器としての声門の構造と筋の運動、支配神経の関連性。
6	神経系 ：概論，神経系の成り立ちが理解できる。ニューロンの成り立ちが理解できる。神経系の機能としての運動・知覚ニューロンが理解できる。	講義と演習	神経系の機能と刺激の伝達に関して細胞レベルとニューロンの関連付け。
7	中枢神経；脳の構成、各脳の機能、伝導路について理解できる。　脊髄の成り立ち、機能が理解できる。□ グループワーク ③	講義と演習，group work	脳の構成と機能の局在の関連性についての理解をすすめる。
8	末梢神経；脳神経12対の中でも特にⅤ，Ⅶ，Ⅷ，Ⅸ，Ⅹ，Ⅻの分布、機能について理解出来る。	講義と演習	末梢神経の中でも咽頭・喉頭における作用と聴覚・発声に関連した神経の働きを系統立てる。
9	末梢神経；脊髄神経の中でも特に呼吸筋支配、上・下肢の運動支配神経、デルマトームの理解ができる。 中間テスト	講義と演習	筋運動と皮膚知覚を脊髄分節として理解する。
10	感覚器系　聴覚器の成り立ちが理解できる。 伝音系である外耳から中耳までが理解できる。	講義と演習	聴覚器(伝音系)における音のとらえ方を順序だてして明確化する。
11	感音系である内耳の成り立ち、コルチ器の構造、聴覚伝導路が理解できる。　□ グループワーク ④	講義と演習，group work	蝸牛管 コルチ器における音波振動の神経系における電気信号に変える機構の理解。
12	平衡覚器　平衡覚の概念が理解できる。半規管の成り立ちと働き，球形嚢・卵形嚢における平衡斑の成り立ちと働きが理解できる。　□ グループワーク ⑤	講義と演習，group work	平衡覚における知覚を運動方向覚、重力方向覚の成分捕捉として区別を明確にする。
13	視覚器、味覚・嗅覚器の構成が理解できる。特に感覚細胞の構成が理解できる。視覚路、味覚・嗅覚路が理解できる。 グループワーク⑥	講義と演習，group work	視覚、味覚、嗅覚などの感覚器の働き作用を区別する。
14	言語・聴覚系における解剖学からみた感覚器と神経系の総括	講義と演習	発音器官、構音器官と呼吸・消化器官の関連を神経、筋運動と関連づける。
15	試験とまとめ	試験	

■受講上の注意

膨大な情報を要領よく、系統的に理解する。ばらばらな知識は役立たない。
人に対する尊厳を忘れない。

■成績評価の方法

中間試験30%、終講試験70%，平常点（受講態度）等を総合して行う.

■テキスト参考書など

教科書：言語聴覚士のための解剖・生理学□小林靖著　医歯薬出版.　参考資料：標準解剖学　坂井建雄著　医学書院.

■備考

プリント資料：レジュメを用意するので目を通しておくこと。

■実務経験

音声・言語・聴覚医学Ⅱ

講師：小牧 祥太郎

単位数：2単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

言語聴覚士にとって重要となる音声・言語・聴覚医学に必要な神経の構造や機能、また病態について理解を深め、言語聴覚障害領域における専門内容を理解する為の基礎を学ぶ。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	神経細胞（灰白質）と神経線維（白質）の違いを理解し、神経の伝達方法（機序や神経伝達物質等）を学ぶ。また、大脳を中心に神経系の概要を把握し、簡潔に他者へ説明できるようになる。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
2	中枢神経系（大脳・辺縁系・基底核・間脳・脳幹・小脳・脊髄）の機能と、灌流する循環系（血液循環・髄液循環）について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
3	神経系の問題により生じる全般的な症状（意識障害・頭痛）について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
4	脳血管障害全般と、虚血性疾患（脳梗塞（血栓・塞栓））について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
5	脳血管障害の出血性疾患（脳出血・くも膜下出血）について学ぶ。 頭蓋内圧症状、水頭症について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
6	脳血管障害（動静脈奇形、Willis動脈輪閉塞症）、脳腫瘍について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
7	頭部外傷、認知症関連疾患について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
8	末梢神経系疾患（ワーレンベルグ症候群、ギランバレー症候群等）について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
9	末梢神経系疾患（重症筋無力症、筋ジストロフィー等）について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
10	錐体外路系疾患（パーキンソン病、ハンチントン舞踏病）について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
11	錐体外路系疾患（脊髄小脳変性症、多系統萎縮症など）について学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
12	末梢神経系として脳神経系の特徴と各神経の違いについて学ぶ（概要）。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
13	末梢神経系として脳神経系の特徴と各神経の違いについて学ぶ（検査）。	講義・演習	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
14	主に脳画像の参照より神経疾患の復習（言語聴覚士が臨床で担当しやすい疾患を主に）を行う。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。
15	試験・解説（あるいはまとめ）	試験・講義	

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合もある。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

病気が見える vol.7 第2版　発行：メディックメディア

■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

認知・学習心理学

講師：假屋園 昭彦

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

学習，知覚，知能，測定といった学習面に関する基本的な用語，現象，理論について理解する。これらの領域は，歴史が古く，心理学の中心的な 領域であり，今後の心理学理解の土台になる。学習面では行動主義，認知主義の心理学を心理学史に沿って理解する。知覚は，精神物理学，ゲ シュタルト心理学を中心に扱う。知能については知能の基礎理論と知能検査の歴史的変遷，測定についてはテスト理論について理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	古典的条件づけ（1）（意味と種類）	講義	
2	古典的条件づけ（2）（消去，般化，弁別）	講義	
3	オペラント条件づけ（1）（意味と種類）	講義	
4	オペラント条件づけ（2）（行動主義心理学の理論）	講義	
5	行動療法の考え方と種類	講義	
6	技能学習	講義	
7	社会的学習（模倣，観察学習）	講義	
8	知能（1）（知能の諸理論）	講義	
9	知覚（1）（ゲシュタルト心理学）	講義	
10	知覚（2）（精神物理学） 知覚（3）（錯視，知覚の諸現象）	講義	
11	テスト理論（信頼性，妥当性）	講義	
12	テスト理論（標準化，偏差，Z 得点などの基本用語）	講義	
13	知能（1）（知能の諸理論）	講義	
14	知能（2）（知能検査の発展過程）	講義	
15	知能（3）（知能検査の種類）	講義	

■受講上の注意

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

グラフィック認知心理学．サイエンス社
グラフィック学習心理学．サイエンス社

■備考

■実務経験

発達心理学

講師：島 義弘

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

人の生涯にわたる波多津を，心理学の観点から理解することを目標とする。発達段階ごとの特徴や課題を学び，将来，ヒューマンサービスに従事する専門職としての素地を養う。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	発達心理学とは	講義・討論	該当箇所の復習（教科書，レジュメ）
2	発達の理論	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
3	身体と運動の発達	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
4	認知の発達	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
5	言葉の発達	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
6	知能の発達	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
7	感情の発達	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
8	道徳性の発達	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
9	対人関係の発達	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
10	乳幼児期・児童期の自己の発達	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
11	青年期の自己の発達	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
12	成人期・老年期の自己の発達	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
13	キャリア発達	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
14	発達の遅れと障害	講義	該当箇所の予習・復習（教科書，レジュメ）
15	終講試験とまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

教科書またはその他の資料を用いて，予習をしてくること。授業中は積極的な参加を求める。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

『公認心理師スタンダートテキストシリーズ12　発達心理学』林　創（編著）ミネルヴァ書房

■備考

■実務経験

臨床心理学

講師：岩元 正知

単位数：2単位　時間数：40時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

「臨床」とは「病み、悩み、障害をもつ人間に対して、実際に、その状態像を把握し、治療すること」であり、「臨床心理」という言葉は、「心理学を臨床的に応用する」と考えられる。多くの人間は、心の内に悩みや迷い、葛藤を抱えており、「臨床心理学」はそのような状態像の解決を援助する学問である。ところで言語聴覚士国家試験の「臨床心理学」の過去出題範囲は、基礎心理学に始まり、心理統計、心理査定、精神症状、心理面接および心理療法、さらに出題回数は少ないが地域援助と多岐にわたっている。そこで本講義では出題頻度の高い心理査定、精神症状、心理面接および心理療法を中心に展開し、国家試験で問われる知識を身に付けていく。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「臨床心理学」の基本的概念および機械に写ることのない「人間の心」とは何か…について理解する。	講義	ミニ心理ゲーム「絶対に許せないのは誰？」の実施。
2	「パーソナリティ理論（性格類型論、性格特性論）」について理解する。	講義	ST国試に頻出されている「パーソナリティ理論」。国試で合格点を採るためのコツを理解すること。
3	「人格理論（質問紙法、作業検査法、投影法など）」について理解する。	講義	ST国試に頻出されている「人格検査」。国試で合格点を採るためのコツを理解すること。
4	「抑うつ障害群」について。特に、いわゆる「うつ病」についての知識を理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
5	「双極性障害および関連障害群」について。特に、「双極性障害（躁うつ病）」についての知識や「うつ病」との違いを理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
6	「統合失調症スペクトラム障害」について。特に、精神病の一つとされる「統合失調症」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
7	「パニック症」を含む心の病の一つ「不安症群」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
8	「強迫症および関連症群」について。特に、若者の心の病の一つ「強迫症（強迫性障害）」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
9	「パーソナリティ障害群」について。特に、「境界性パーソナリティ障害」についての理解を深める。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
10	「心的外傷およびストレス因関連障害群」について。特に「愛着障害」や「PTSD」等に関する理解を深める。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
11	「解離症群」について。「解離症」に加えて、近年注目されている「複雑性PTSD」についての理解を深める。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
12	「家族の病理」と呼ばれる「摂食障害」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
13	無意識という概念を提唱したフロイトの「精神分析」について理解する。	講義	ST国試に頻出されている「精神分析（的心理療法）」。国試で合格点を採るためのコツを理解すること。
14	ロジャーズの提唱した「クライエント（来談者）中心療法」について理解する。	講義	ST国試に頻出されている「クライエント中心療法」。国試で合格点を採るためのコツを理解すること。
15	学習理論に基づく心理療法「行動療法」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
16	「認知療法」「認知行動療法」について、国試に対応できる知識を理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
17	神経発達障害群より「知的発達症」および「ASD（自閉スペクトラム症）」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
18	神経発達障害群より「ADHD（注意欠如多動症）」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
19	神経発達障害群より「SLD（限局性学習症）」について理解する。	講義・DVD	講義および映像学習。映像の感想レポートの提出。
20	終講試験およびまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

居眠りはしないこと。時間は守ること。離席する場合には必ず伝えること。すべての質問にチャレンジすること（考えてみること）。主体的に講義に臨むこと。

■成績評価の方法

試験（70%）受容中のレポート（20%）授業への参加態度（10%）により相互的に評価する。

■テキスト参考書など

一発合格! 公認心理師対策テキスト&予想問題集」, ファイブアカデミー

■備考

毎回、講義資料を配布する。

■実務経験

本科目は、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

カウンセリング論

講師：岩元 正知

単位数：2単位	時間数：30時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

心理カウンセリングの基本は「信頼関係」。カウンセラー（聴き手）は相談に訪れた人（クライエント）が安心できる雰囲気を与える様に努める。実践的な体験型講義を通して、言語および非言語コミュニケーションや心理カウンセリングにおける言葉の使い方、ねぎらいやユーモラスな分脈の大切さなど、援助を必要とされるクライエントに対するカウンセリング法を学ぶことができる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「心身一如」。心の状態が身体の反応と相互に作用していることを理解することができる。	講義・GW	二人一組になっての体験学習を予定している。積極的に参加することが望ましい。
2	コミュニケーション体験型講義を通して、信頼の架け橋となる「ラポール」を体感することができる。	講義・GW	二人一組になっての体験学習が中心。積極的にすべてのワークを体験することが望ましい。
3	言葉の遅れのある自閉症児に対する療育スキル（ABA）を、映像を通して学ぶことができる。	講義・DVD	課題レポートの提出。
4	NLPカウンセリング体験。実際にカウンセラーおよびクライエントを体験することができる。	講義・GW	二人一組になってのカウンセリング体験。第二講で学んだ「ラポール・テクニック」を意識しながらカウンセリングすることが望ましい。
5	「コーチング」について理解することができる。同時にNLPコーチングを体験することもできる。	講義・GW	「コーチング」についての学びを通して、STとしてのコーチングの意義を考えてみる。その上で、二人一組になって「NLPコーチング」を体験する。
6	VAKテストを通して、自分の優位な「利き感覚」を理解することができる。	講義	講義中、「VAKテスト」を実施。これはあくまで、自分の「利き感覚」を理解するためのテスト。楽しみながら受験して欲しい。
7	「出生順位（きょうだいの中で何番目に生まれて来たか）の秘密」についての理解を深めることができる。	講義	「きょうだい性格分析クイズ」を気軽に体験し、出生順位の秘密を知る機会とする。
8	「アイパターン」と呼ばれる目の動きと内的表象との法則について理解することができる。	講義・GW	二人一組になって、相手に質問し、その時の目の動きを観察しながら、その人の心を読み取る体験をする。
9	心理カウンセリングを行う上で、「人（クライエント）はすでに変化に必要なリソースを持っている」という考え方がある。このリソースについて理解することができる。	講義・GW	二人一組になって「あなたのリソース探し」によるカウンセリングを体験する。
10	11個の質問を通して、様々な「リソース」を紡ぎ「焦点化」していくことによって「リソース・フォーカスト」について気づきを得ることを目的とする。	講義・GW	二人一組になって「リソース・フォーカスト・クエスチョン」によるカウンセリングを体験する。
11	ある出来事を体験した時、怒りや不安を感じる場合に影響する「生き方のルール（ビリーフ）」を理解することができる。	講義・GW	二人一組になって「5つの質問」によるカウンセリングを体験する。
12	人の気持ちの動きや行動パターンに大きく影響する「認知」を修正し、心のバランスを整えることでストレスを軽減する「認知行動療法」式カウンセリングを理解することができる。	講義・GW	二人一組になって「7つのコラム法」によるカウンセリングを体験する。
13	「心のケア（健康）」とは何か？　もし、あなたが心に傷を負ったとき、そのケア（健康）を保つためにはどうすればいいのか？　あなた自身が本講義を通して、自分の「心のケア」について意識することを目的とする。	講義	瞑想法「マインドフルネス」を体験する。
14	グループの中で、自分の役割が周囲に対し、どのように影響するのか･･･について理解を深めることができる。	講義・GW	4人程度のグループによるコミュニケーショントレーニング体験。積極的に参加することが望ましい。
15	終講試験およびまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

居眠りはしないこと。時間は守ること。離席する場合には必ず伝えること。すべての質問にチャレンジすること（考えてみること）。主体的に講義に臨むこと。

■成績評価の方法

試験（70%）授業中のレポート（20%）授業への参加態度（10%）により相互的に評価する。

■テキスト参考書など

テキストは特にないが、参考書として「臨床心理学」のテキスト「一発合格! 公認心理師対策テキスト&予想問題集」を使用する。

■備考

毎回、講義資料を配付する。

■実務経験

本科目は、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

心理測定法

講師：岩元 正知

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

人の心の状態や行動の特性などを解明するために行われる測定を「心理測定」と呼ぶ。「心理測定」は、広い意味では精神測定（一般知能の測定など）とほぼ同じ意味で用いられている。ここには、例えば、感覚・知覚で閾値を測定する「精神物理学的測定法」や、能力・性格などの研究領域での「テスト理論」、好みや社会的態度などの研究における評定法、尺度構成法など、様々な測定法がある。本講義では、言語聴覚士国家試験における心理測定法の過去出題範囲についての知識を理解することを目的とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「社会調査」および「質問紙法」について理解できる。	講義	
2	「尺度（名義尺度・順序尺度・間隔尺度・比率尺度）」についての知識を理解できる。	講義	次回、小テスト実施予定。
3	「精神物理学的測定法」についての知識および国試の解き方を理解できる。	講義	「調整法」「恒常法」「極限法」など本講での学びを復習すること。次回、小テスト実施予定。
4	「尺度構成法（直接尺度構成法および間接尺度構成法」についての知識を理解できる。	講義	
5	「信頼性」「妥当性」についての知識および国試出題パターンを理解できる。	講義	
6	「単一事例研究法」についての知識および国試の出題パターンを理解できる。	講義	
7	「信号検出理論」および「多次元尺度構成法」についての知識および国試出題パターンを理解できる。	講義	記憶の再認課題を実施。
8	終講試験およびまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

居眠りはしないこと。時間は守ること。離席する場合には必ず伝えること。すべての質問にチャレンジすること（考えてみること）。主体的に講義に臨むこと。

■成績評価の方法

試験（70%）授業中のレポート（20%）授業への参加態度（10%）により相互的に評価する。

■テキスト参考書など

テキストは無し。参考書として「臨床心理学」の「一発合格! 公認心理師対策テキスト&予想問題集」を使用することがある。

■備考

毎回、講義資料を配付する。

■実務経験

本科目は、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

日本語学

講師：山下 直子

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

①様々なポイントから日本語のしくみを理解し、他の人にも簡単に説明できる。
②自分がどんな日本語使用者であるのかを客観的に振り返ることができる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	私のことばを知る：自分の母語について客観的に振り返ることができる	GW・講義	4年間学び合うクラスメートのことを知る機会として、積極的にワークに参加してください。
2	日本語のことばと文字①：日本語の語彙の種類の特徴がわかる	GW・講義	
3	日本語のことばと文字②：日本語の文字と表記の特徴がわかる	GW・講義	グループワークではスマートフォンを活用します。
4	日本語のルール：文法から見た日本語の特徴がわかる	GW・講義	
5	日本語の使い分け①：〈やさしい日本語〉を通して、相手や場面による日本語の使い分けができる	GW・講義	
6	日本語の使い分け②：〈要約筆記〉を通して話し言葉と書き言葉の違いがわかる	GW・講義	
7	ことばを使わない日本語表現：日本語のジェスチャーや日本人の会話の特徴がわかる	GW・講義	グループワークではスマートフォンを使用します。
8	私のことばを語る：日本語の特徴について、他の人に自分のことばで説明できる	GW・講義	最終レポートの詳しい説明も行います。

■受講上の注意

①グループワークやペアワークを多く行いますので、積極的に参加してください。
②予習の必要はありませんが、復習・振り返りはぜひ行ってください。

■成績評価の方法

最終レポートで評価を行います。（最終講義終了後、期日内に提出。）
構成（10%）、内容（80%）、表現（10%）。 詳細は最終講義で詳しく説明します。
レポートのタイトル：「日本語の特徴」。パソコンで作成してください（手書き不可）。

■テキスト参考書など

なし。

■備考

毎回の授業でプリント等を配布します。
各自ファイルを用意して、配布資料をしっかり自己管理してください。
前の授業資料を見る場合もあります。毎回、必ずファイルを持ってきてください。

■実務経験

言語学

講師：山下 直子

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

①言語のさまざまな見方を理解し、他の人にも簡単に説明できる。
②日本語がどんな言語であるか、例を挙げながら説明することができる。
③国家試験の設問に対応できる言語学の基本知識が身につけられる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語とは何か（言語学概論）①： 言語学に含まれる様々な分野および言語の機能がわかる	GW・講義	
2	言語とは何か（言語学概論）②： 言語学の歴史や背景がわかる	GW・講義	
3	言語の音のしくみ（音韻論）①： 言語によって音の捉え方が異なることがわかる	GW・講義	1年次の「日本語音声学」の復習をした上で、授業に臨んでください。
4	言語の音のしくみ（音韻論）②： 日本語における音のバリエーションがわかる	GW・講義	1年次の「日本語音声学」の復習をした上で、授業に臨んでください。
5	言語の音と語の関係（形態論）①： 語のしくみと性質がわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語のことばと文字」で学んだ知識を活用します。
6	言語の音と語の関係（形態論）②： 語の成り立ちや音の変化についてわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語のことばと文字」で学んだ知識を活用します。
7	言語の音と語の関係（形態論）③： 日本語の語の特徴がわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語のことばと文字」で学んだ知識を活用します。
8	言語の文のしくみ（統語論）①： 文の構造が図式化できる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語のルール」で学んだ知識を活用します。
9	言語の文のしくみ（統語論）②： 日本語の文の特徴がわかる（1）	GW・講義	
10	言語の文のしくみ（統語論）③： 日本語の文の特徴がわかる（2）	GW・講義	
11	言語の意味と運用（意味論）①： 語や文の意味の捉え方についてわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語の使い分け」で学んだ知識を活用します。
12	言語の意味と運用（意味論）②： 場面や状況によって意味の捉え方が変化することがわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「日本語の使い分け」で学んだ知識を活用します。
13	言語の意味と運用（語用論）③ 言語と文化の関係についてわかる	GW・講義	1年次の「日本語学」の「ことばを使わない日本語の表現」で学んだ知識を活用します。
14	言語とは何か（言語学総論）③： 言語学の用語の意味を、他の人に自分のことばで説明できる	GW・講義	最終試験の詳しい説明も行います。
15	終了試験	試験	

■受講上の注意

①毎回、翌回の授業に向けた「事前タスク」を提示します（初回を除く）。
必ず＜事前タスク＞（「私のノート」の作成）に取り組んだ上で、次の授業に臨んでください。
②グループワークやペアワークを多く行いますので、積極的に参加してください。

■成績評価の方法

終了試験（筆記試験）で評価を行います。（最終講義日に実施。）
試験は、多肢選択問題（60%）、記述問題（40%）で構成されます。
記述問題は事前に提示する複数の設問の中から1～2問出題します。

■テキスト参考書など

『日本語教師のための入門言語学』（スリーエーネットワーク）
＊タイトルに「日本語教師のための」とありますが、内容は普遍的なものです。

■備考

テキストは毎回必ず持ってきてください。
また、授業の際にはプリント等の資料も配布します。各自ファイルを用意して、配布資料をしっかり自己管理し、ファイルは毎回必ず持ってきてください。

■実務経験

日本語音声学

講師：山下 直子

単位数：1単位　時間数：15時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

①日本語の音のしくみがわかる。
②日本語の話し方の特徴がわかる。
③自分の話し方の特徴に気づける。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	日本語のリズム①：日本語のアクセントの基本がわかる	GW・講義	
2	日本語のリズム②：さまざまなアクセントを正確に聞いたり書いたりできる	GW・講義	
3	日本語のリズム③： ・複合語のアクセントのルールが理解できる ・日本語のアクセントの特徴を自分のことばで説明できる	GW・講義	
4	日本語のいろいろな音①：日本語の音のシステムの全体像がつかめる	GW・講義	
5	日本語のいろいろな音②：日本語の調音点と調音法のシステムが理解できる	GW・講義	他科目で学習済みの「音声器官」の図と名称を復習の上、授業に臨んでください。
6	日本語のいろいろな音③：日本語の調音点と調音法の詳細が正確に理解できる	GW・講義	
7	発話の誤り：誤りのある発話を正確に聞き取り、その問題点が説明できる	GW・講義	
8	復習と振り返り：日本語の音声的な特徴について、他の人に自分のことばで説明できる	GW・講義	最終試験の詳しい説明も行います。

■受講上の注意

①グループワークやペアワークを多く行いますので、積極的に参加してください。
②予習の必要はありませんが、復習・振り返りは必ず行ってください。

■成績評価の方法

最終試験（筆記試験）で評価を行います。（最終講義終了後の別日に実施。）
試験は、聴解問題（40%）、多肢選択等の問題（60%）で構成されます。
最終講義で模擬問題に取り組みます。

■テキスト参考書など

なし。

■備考

毎回の授業でプリント等を配布します。
各自ファイルを用意して、配布資料をしっかり自己管理してください。
前の授業資料を見ることも多いです。毎回、必ずファイルを持ってきてください。

■実務経験

音声学

講師：山下 直子

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

①日本語の音声のしくみが詳しくわかる
②日本語の音声のしくみについて自分の言葉で説明することができる
③音を正確に聞き取り、記述することができる
④国家試験に対応できる音声学の知識を身につけられる

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	五十音図とIPA： 五十音図をIPAで記述することができる	演習・講義	1年次の「日本語音声学」の復習を行います。
2	母音①： 基本母音のしくみと特徴がわかる	演習・講義	
3	母音②： 様々な母音のしくみと特徴が説明できる	演習・講義	
4	子音①： 様々な子音のしくみと特徴がわかる	講義・GW	翌週のグループ発表の準備も行います。
5	子音②： 様々な子音のしくみと特徴が説明できる（1）	発表・演習	グループ発表を行います。
6	子音③： 様々な子音の仕組みと特徴が説明できる（2）	発表・演習	グループ発表を行います。
7	子音④： 特殊音の特徴がわかる	演習・講義	
8	様々な音声現象①： 子音と母音の様々な音声変化のしくみがわかる	講義・GW	グループ発表の準備も行います。
9	様々な音声現象②： 子音と母音の様々な音声変化のしくみが説明できる	発表・演習	グループ発表を行います。
10	音節とモーラ： 音節とモーラのしくみについて理解できる	演習・講義	
11	アクセントとイントネーション① 日本語のアクセント、イントネーション、プロミネンスについてわかる	講義・GW	翌週のグループ発表の準備も行います。
12	アクセントとイントネーション②： 日本語のアクセント、イントネーション、プロミネンスについて説明できる（1）	発表・演習	グループ発表を行います。
13	アクセントとイントネーション③： 日本語のアクセント、イントネーション、プロミネンスについて説明できる（2）	発表・演習	グループ発表を行います。
14	誤った音声の記述・分析： 誤りのある音声を聞き取り、それを記述・分析できる	演習・GW	最終試験の詳しい説明も行います。
15	修了試験	試験	筆記試験と聴解試験を行います。

■受講上の注意

①グループワークを多く行いますので、積極的に参加してください。
②グループ発表が3回あります。メンバーと協力して発表に臨んでください。
③テキスト付属の音声を聞きながら授業を行います。授業には必ずスマートフォン（充電済み）とイヤホンを持ってきてください。

■成績評価の方法

以下の①と②により評価を行います。
①グループ発表の成果（50%）：
〈主な評価観点〉(1)内容の正確さ (2)例示 (3)パフォーマンス (4)協力体制
②修了試験（50%）：
〈試験方法〉(1)筆記試験 (2)聴解試験

■テキスト参考書など

『たのしい音声学』（竹内京子・木村琢也 著，2019年，くろしお出版）

■備考

テキストは毎回必ず持ってきてください。
授業での配布資料（随時）、グループ発表資料などは、各自ファイルし、自己管理してください。

■実務経験

音響・聴覚心理学

講師：松尾 康弘

単位数：2単位　時間数：40時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

言語聴覚士はコミュニケーションに障害を持たれた方へ支援を行う。コミュニケーションには音声も含まれ、そこには「音」が存在する。本科目は「音」について物理学的側面および心理学的側面から講義し、「音」について理解を深めることを目標とする。さらに、音響分析装置を用いて「音声」を観察し、臨床に応用できるようにする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「音」の定義について理解できる	講義・PBL	
2	身近な「音」の違いに気づくことができる	講義・PBL	
3	（音）波の基本的性質について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿ってテキストの第1 章1. 波の基本的性質を予習しておくこと
4	共鳴について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿ってテキストの第1 章2. 定常波と共鳴を予習しておくこと
5	波の現象（うなり・回折等）を理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿ってテキストの第1 章16. 7. を予習しておくこと
6	音の強さと大きさ・音圧について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿ってテキストの第2 章1. 音圧と音の強さを予習しておくこと
7	デシベル計算に必要な数学的知識（対数log）を確認する	講義・PBL	デシベル計算に必要な数学的知識（対数log）を確認する
8	デシベルの計算ができるようになる	講義・PBL	高校で使用した数学の教科書を持参すること。対数log 計算が苦手な学生は復習しておくこと。
9	音のスペクトルについて理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿ってテキストの第3 章を予習しておくこと
10	音声とサウンドスペクトログラムについて理解する	講義・TBL	学習のねらいに沿ってテキストの第3 章6. を予習しておくこ
11	音響分析装置Praat を用いて音響分析できる①	講義・TBL	事前に音響分析装置Praat をダウンロードしたPCをチームに1 台持参すること
12	音響分析装置Praat を用いて音響分析できる②	講義・TBL	事前に音響分析装置Praat をダウンロードしたPCをチームに1 台持参すること
13	音響分析装置Praat を用いて音響分析できる③	講義・TBL	事前に音響分析装置Praat をダウンロードしたPCをチームに1 台持参すること
14	音響分析装置Praat を用いて音響分析できる④	講義・TBL	事前に音響分析装置Praat をダウンロードしたPCをチームに1 台持参すること
15	音の心理物理学について理解することができる。	講義・TBL	
16	音の心理物理学について理解することができる。	講義・TBL	
17	聴覚の周波数分析とマスキング現象について理解することができる。	講義・TBL	
18	両耳の聞こえについて理解することができる	講義・TBL	
19	環境と聴覚の関係について理解することができる。	講義・TBL	
20	試験	試験	

■受講上の注意

音響分析装置を使用するため、ノート型PC を持っていることが望ましい。多少の数学的知識が必要なため、高校数学を復習しておくこと。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

吉田友敬：言語聴覚士の音響学入門，海文堂
言語聴覚士テキスト

■備考

PBL: Problem Based Learning
TBL: Team Based Learning

■実務経験

言語発達学

講師：福元 恵美

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

子どもがどのような過程でことばを習得していくのか。について学ぶ講義です。
ことばは生涯を通して形作られていきますがその中でも出生から学齢期までのことばの発達は言語コミュニケーションの基盤となります。
この講義では、前言語期（ことばが出始める前の時期）・幼児期・学童期に分けてそれぞれの時期のことばの発達（理解力・発話能力・読み能力など）を理解し、定型発達児の言語発達の全体像を把握することを目標とします。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	こどもの発達（身体・認知・ことば）について学ぶ。	講義・グループワーク	資料の確認
2	前言語期のことばの発達について理解する。	講義・グループワーク	小テスト実施。
3	幼児前期のことばの発達について理解する。	講義・グループワーク	小テスト実施。
4	言語発達を促す大人の役割について学ぶ。	講義・グループワーク	小テストを実施。
5	幼児後期のことばの発達について理解する。	講義・グループワーク	小テストを実施。
6	学童期のことばの発達について理解する。	講義・グループワーク	小テストを実施。
7	前言語期～幼児期のことばをはぐくむ関わり方・遊びを学ぶ。 グループにてことばをはぐくむ遊びについて考える。	講義・GW	これまでの復習をしておくこと。 子どもの好きなおもちゃを調べる。また何がことばをはぐくむために役立つか考える。
8	単位認定試験とまとめ	試験・講義	これまでの復習をしておくこと。

■受講上の注意

何らかの配慮が必要な場合は申し出てください。
グループワーク・ディスカッションの際は肯定的なことばを使用してください。
教科書・配布資料を揃えて講義に臨み、受講後は復習をしてください。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

標準言語聴覚障害学　言語発達障害学　第3版　医学書院
※適宜資料を配布する。

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

障害児教育学

講師：片岡 美華

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

STとして障害のある子どもと接する上で必要となる、障害のある子どもたちへの教育の視点および、現在行われている特別支援教育制度を概括的にとらえることを目的とする。具体的には以下の二点を授業目標とする。
①障害のある子どもたちへの教育について、現代までの事績をつかみ、今日求められている障害のある子どもへの教育の意義と目的を明らかにする。
②特別支援教育の制度や法律を概括的にとらえ、連携や教育的支援の内容を理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	特別支援教育とは何か。障害の概念（ICIDHからICFへの視点の転換）	講義	
2	障害児教育通史	講義	
3	障害児者の権利獲得の歴史と教育	講義	
4	障害児教育とインクルージョン	講義	
5	特別支援教育制度①（特別支援学校・センター的役割）	講義	
6	特別支援教育制度②（特別支援学級）	講義	
7	特別支援教育制度③（発達障害）	講義	
8	通常学級における特別支援教育（通級制度・ユニバーサルデザイン教育）	講義	
9	学校全体支援体制と特別支援教育コーディネーターの役割	講義	
10	保護者への支援と障害受容	講義	
11	家庭との連携と就学支援	講義	
12	関係諸機関との連携と個別の教育支援計画	講義	
13	障害者の自立～進路選択・就労支援・セルフ･アドボカシー～	講義	
14	教育相談と支援の視点	講義・演習	
15	まとめと試験	試験	

■受講上の注意

講義内容は、進み具合等によって順番や内容が若干替わることがあります。

■成績評価の方法

授業中に課すミニレポート（30%）と小テスト（5%）、および期末試験（65%）により本試験・再試験ともに総合的に判断する。

■テキスト参考書など

玉村公二彦・黒田学・向井啓二・平沼博将・清水貞夫編著：「新版　キーワードブック特別支援教育　ーインクルーシブ教育時代の基礎知識」（2019）クリエイツかもがわ
本講義では、教科書を基本としながら、適宜、視聴覚教材や補助資料を用いて理解しやすいように工夫する。

■備考

臨床発達心理士としての経験を生かして、事例を盛り込むとともに特に第14回の授業ではロールプレイングを交えながらより実践的に学べるようにする。

■実務経験

地域言語聴覚療法学

講師：下村 孝子、酒匂 久光、戌亥 啓一

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

本講義名は「地域」を冠しているものの、その内容は「医療」「福祉」「教育」といったリハビリテーションの活動領域を包括したものであり、リハビリテーション概論として、国際的な評価基準や各領域における専門用語、機器や器具を使用する方法、障害者スポーツ、症例との関わり・対応を含め幅広く学んでいくとともに、関連職種による「チーム」をもう1つのテーマに「地域言語聴覚演習Ⅰ～Ⅲ」を通して各職種のアプローチと連携を学ぶ。

またリハビリテーションに関わる上で基本となる社会福祉、社会保障制度、関係法規について体系的に 学習し、その内容を理解し、近い将来に赴く 臨床現場（実習を含め）で、クライエントの利用可能な社会資源や必要な制度・関係法について、具体的にイメージできる能力を養い、制度を活かす方法を検討することができるようになることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	リハビリテーションの概要、ICFへの理解を深める。	講義	配布資料の要点をおさえる
2	リハビリテーションと障害についての基本的な専門用語を知る	講義	概念的な用語については特に留意して理解を深める
3	疾患・病期等からみたリハビリテーションへの理解を深める	講義	配布資料の要点をおさえる
4	障害に対するリハビリテーションへの理解を深める	講義	配付資料の要点を確認する 軽装を準備する
5	症例の生活に対応するリハビリテーションへの理解を深める	講義	配付資料の要点を確認する 軽装を準備する
6	リハビリテーションの一部を担う理学療法の役割とその職域を学ぶ	講義	事前に資料を配布します
7	理学療法における基本動作、リハビリテーション機器を体験する	講義・演習	機能訓練室で行う。 運動できる服装で受講してください。
8	障がい者スポーツを体験する。	講義・演習	体育館で行います。 運動できる服装で受講してください。
9	社会保障制度の概念を理解できる 自分の身の周りにある社会保険制度を考え、理解できる	講義	
10	健康保険制度の概要や給付内容を理解できる	講義	
11	介護保険制度の概要や給付内容を理解できる	講義	
12	社会福祉に関する法律（主に障害者）の概要を理解できる	講義	
13	生活保護制度の概要や給付内容を理解できる	講義	
14	社会福祉援助技術、リハビリテーション概論を理解する	講義	配布資料の要点をおさえる
15	終講試験とまとめ	試験・講義	前回までの内容を復習する

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番を変更する場合もある。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

資料を配布

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士、理学療法士、社会保険労務士として実務経験のある教員による授業である。

地域言語聴覚演習Ⅰ

講師：専任教員

単位数：2単位　時間数：60時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

リハビリテーションは医療分野をはじめ福祉、教育など社会全般にその活動が広がっている。別の視点として「地域」という枠組みがあり、ここで必要な要素はやはりリハビリテーション全般に共通するものであるが、「地域」という視点を持ちリハビリテーションを考え、携わることには重要な意義がある。そして、関連職種による「チーム」を1つのテーマに「地域言語聴覚演習Ⅰ～Ⅲ」を通して各職種のアプローチと連携についても学んでいく。

「地域言語聴覚演習Ⅰ」では、「地域言語聴覚療法学」で学んだリハビリテーション概論や、社会保障制度・関係法規の位置づけ、チームアプローチの重要性を認識し、言語聴覚士として「地域」における活動の実際と今後を見据えた視点を総合的に養うことを目標としている。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	施設訪問前オリエンテーションA、訪問施設情報の閲覧から必要な情報を得る	演習・GW	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
2	臨床実習マニュアルを参考に実習前情報との照合を行い、概要を確認する 施設訪問経験者から必要な情報を聴取するとともに疑問点を解消、準備事項を具体化する	演習・GW	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
3	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る（1）	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
4	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る（2）	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
5	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る（3）	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
6	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る（4）	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
7	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、調査・検討を行う（1）	演習・GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。
8	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、調査・検討を行う（2）	演習・GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。
9	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（1）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
10	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（2）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
11	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（3）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
12	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（4）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
13	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（5）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
14	施設訪問前オリエンテーションB、訪問施設情報の閲覧から必要な情報を得る	演習・GW	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
15	臨床実習マニュアルを参考に実習前情報との照合を行い、概要を確認する 施設訪問経験者から必要な情報を聴取するとともに疑問点を解消、準備事項を具体化する	演習・GW	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
16	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る（5）	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
17	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る（6）	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
18	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る（7）	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
19	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る（8）	演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
20	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、調査・検討を行う（3）	演習・GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。

21	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、調査・検討を行う（4）	演習・GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。
22	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（6）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
23	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（7）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
24	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（8）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
25	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（9）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
26	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（10）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
27	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする（1）	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。
28	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする（2）	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。
29	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする（3）	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。
30	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする（4）	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番を変更する場合もある。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

鹿児島医療技術専門学校　臨床実習マニュアル、言語聴覚療法技術ガイド
その他関連分野参考書

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員、指導者による授業である。

地域言語聴覚演習Ⅱ

講師：専任教員

単位数：2単位　時間数：60時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

リハビリテーションは医療分野をはじめ福祉、教育など社会全般にその活動が広がっている。別の視点として「地域」という枠組みがあり、ここで必要な要素はやはりリハビリテーション全般に共通するものであるが、「地域」という視点を持ちリハビリテーションを考え、携わることには重要な意義がある。そして、関連職種による「チーム」を1つのテーマに「地域言語聴覚演習Ⅰ～Ⅲ」を通して各職種のアプローチと連携についても学んでいく。

「地域言語聴覚演習Ⅱ」では、「地域言語聴覚演習Ⅰ」での経験に加え、言語聴覚士の活動場面の観察から専門基礎科目、専門科目で学んだ知識の活用を図るとともに、実践可能な活動を通して、リハビリテーションに関わる環境や活動全般に対する理解を深めることを目標としている。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	施設訪問前オリエンテーションA、訪問施設情報の閲覧から必要な情報を得る	GW・演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
2	臨床実習マニュアルを参考に実習前情報との照合を行い、概要を確認する 施設訪問経験者から必要な情報を聴取するとともに疑問点を解消、準備事項を具体化する	GW・演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
3	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る（1）	演習	実習マニュアル等を参考に実践する。
4	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る（2）	演習	実習マニュアル等を参考に実践する。
5	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る（3）	演習	実習マニュアル等を参考に実践する。
6	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る（4）	演習	実習マニュアル等を参考に実践する。
7	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、調査・検討を行う（1）	講義・GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。
8	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、調査・検討を行う（2）	講義・GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。
9	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（1）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
10	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（2）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
11	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（3）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
12	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（4）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
13	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（5）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
14	施設訪問前オリエンテーションB、訪問施設情報の閲覧から必要な情報を得る	GW・演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
15	臨床実習マニュアルを参考に実習前情報との照合を行い、概要を確認する 施設訪問経験者から必要な情報を聴取するとともに疑問点を解消、準備事項を具体化する	GW・演習	実習マニュアル等を参考に留意点を抽出する。
16	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る（5）	演習	実習マニュアル等を参考に実践する。
17	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る（6）	演習	実習マニュアル等を参考に実践する。
18	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る（7）	演習	実習マニュアル等を参考に実践する。
19	地域言語聴覚療法実施施設を訪問し、事前準備および学習した知識との照合を図るとともに臨床現場での知見を得る（8）	演習	実習マニュアル等を参考に実践する。
20	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、調査・検討を行う（3）	講義・GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。

21	地域社会において言語聴覚療法を有用な資源として活かす視点を得るため、調査・検討を行う（4）	講義・GW	社会活動全般の資料を参照することが役立つ。
22	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（6）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
23	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（7）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
24	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（8）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
25	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（9）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
26	検討案を実践することで検証－修正をする方法を学ぶ（10）	演習・GW	多様な意見を柔軟に取り入れる姿勢が重要となる。
27	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする（1）	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。
28	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする（2）	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。
29	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする（3）	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。
30	実践した内容をまとめ・発表することで全体的な視点で考証を行うとともに多様な意見を得る機会とする（4）	演習・GW	自身の意見を俯瞰し、他社へ建設的な意見を提案する機会とする。

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番を変更する場合もある。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

鹿児島医療技術専門学校　臨床実習マニュアル、言語聴覚療法技術ガイド
その他関連分野参考書

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員、指導者による授業である。

言語聴覚障害学総論

講師：専任教員

単位数：1単位　時間数：15時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

【一般目標】
・言語聴覚士と言語聴覚療法について理解し、自己の職業観を究めることができる
【到達目標】
・言語聴覚士の歴史的な流れとその意味を概説できる
・言語聴覚療法の対象者について具体的に説明できる
・言語聴覚療法の一般的な流れを説明できる
・言語聴覚士に関連する法律を概説できる
・言語聴覚士ならびにリハビリテーションにおける課題を説明できる

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語聴覚士の仕事や定義について説明できる。言語聴覚士の歴史を理解し、未来について熟考することができる	講義・TBL	講義を聞き、他者と自分自身の意見を相互交換することを体験する
2	言語聴覚障害の評価・診断の概要を説明できる	講義	配布資料参照、要点をチェックする
3	専門領域①の概要を理解する	講義・TBL	配布資料参照、要点をチェックする
4	専門領域②の概要を理解する	講義・TBL	配布資料参照、要点をチェックする
5	専門領域③の概要を理解する	講義・TBL	配布資料参照、要点をチェックする
6	専門領域④の概要を理解する	講義・TBL	配布資料参照、要点をチェックする
7	専門領域⑤の概要を理解する	講義・TBL	配布資料参照、要点をチェックする
8	専門領域⑥の概要を理解する	講義・TBL	配布資料参照、要点をチェックする

■受講上の注意

講義の大半を座学とTBLで実施します。各講義のねらいに従ってテキスト等で必ず予習を行う。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

配布資料

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語聴覚療法評価学Ⅰ

講師：高吉 進

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

本講義では、言語聴覚障害の評価・診断につながる情報収集および記録、観察レポートについて具体的事例や実施法を学ぶ。
情報収集の種類は、背景を成す情報、現象に関する情報などがあり、情報収集の方法には面接、質問紙、観察、検査、その他カルテや報告書、関連職種等から得るものなど多岐にわたる。守秘義務等の留意事項を含め重要な項目を学ぶ。
観察レポートについては、情報収集や記録をもとに一般的な形式を活用した作成を目指す。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語聴覚障害の評価・診断について臨床実習マニュアルを参照しながら、その流れを確認・理解する	講義・演習	
2	情報収集の種類や対象について具体的な事例を交え確認する	講義・演習	
3	情報収集の対象を具体的に想定し、その方法・流れを理解する	講義・演習	
4	観察・記録の方法、ポイントについて具体的な事例を交え確認する	講義・演習	
5	観察したものを表現・表記する方法を知る（1）	講義・演習	
6	観察したものを表現・表記する方法を知る（2）	講義・演習	
7	実際の見学報告、観察レポートに対して私見を持ち、客観的な評価視点を得る	講義・演習	
8	試験・解説	試験・解説	

■受講上の注意

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

臨床実習マニュアル、配布資料

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

失語症学Ⅰ

講師：高吉 進

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

・失語症と言語聴覚士の役割を理解する
・言語の構造・神経学的基盤を理解する
・失語症の言語症状・タイプ分類を理解する
・失語症の言語聴覚療法の全体像を理解する

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	失語症と言語聴覚士の役割	講義・TBL	テキスト①p1～2を予習する
2	言語の構造	講義・TBL	テキスト①p26～10を予習する
3	言語の神経学的基盤	講義・TBL	テキスト①p11～31を予習する
4	失語症の原因疾患	講義・TBL	テキスト①p33～39を予習する
5	失語症の言語症状①	講義・TBL	テキスト①p42～50を予習する
6	失語症の言語症状②	講義・TBL	テキスト①p51～56を予習する
7	失語症の近縁症状・随伴しやすい障害	講義・TBL	テキスト①p61～70を予習する
8	失語症候群の成り立ち	講義・TBL	テキスト①p74～75を予習する
9	失語症の古典的分類①	講義・TBL	テキスト①p76～85を予習する
10	失語症の古典的分類②	講義・TBL	テキスト①p86～99を予習する
11	失語症者のコミュニケーション訓練	講義・TBL	テキスト①p150～151を予習する
12	古典的分類以外の失語症	講義・TBL	テキスト①p101～140を予習する
13	失語症の言語聴覚療法の全体像	講義・TBL	テキスト①p144～149を予習する
14	失語症者とのコミュニケーションのとり方	講義・TBL	テキスト①p150～151を予習する
15	単位認定試験・解説	試験・解説	講義1～14を復習する

■受講上の注意

各講義のねらいに従ってテキストで予習・復習を行ってください。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

本講義で使用するテキスト）テキスト①藤田郁代，立石雅子，菅野倫子 編集『失語症学』（医学書院）

■備考

TBLとは，能動的学習を育成することを重視し，グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である

失語症学Ⅱ

講師：高吉 進

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

・失語症の評価・診断の原則を理解する
・失語症検査の目的・方法を理解する
・失語症の訓練を理解する

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	失語症の評価・診断	講義・TBL	テキスト①p154～158
2	総合的失語症検査	講義・TBL	テキスト①p158～161を予習する
3	失語症の特定検査	講義・TBL	テキスト①p162～166を予習する
4	認知機能等の情報収集	講義・TBL	テキスト①p167～185を予習する
5	失語症の評価のまとめ	講義・TBL	テキスト①p178～188を予習する
6	失語症の回復過程	講義・TBL	テキスト①p192～200を予習する
7	言語治療の理論と技法①	講義・TBL	テキスト①p204～218を予習する
8	言語治療の理論と技法②	講義・TBL	テキスト①p219～234を予習する
9	言語治療の理論と技法②	講義・TBL	テキスト①p234～249を予習する
10	言語治療の実際	講義・TBL	テキスト①p252～303を予習する
11	活動・参加・社会支援	講義・TBL	テキスト①p305～332を予習する
12	言語治療のまとめ	講義・TBL	テキスト①p334～338を予習する
13	失語症研究の歴史	講義・TBL	テキスト①p340～349を予習する
14	総合的失語症検査の実施手順	講義・TBL	検査マニュアルを予習する
15	単位認定試験・解説	試験・講義	講義1～14を復習する

■受講上の注意

各講義のねらいに従ってテキストで予習・復習を行ってください。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

本講義で使用するテキスト①藤田郁代，立石雅子 編集『失語症学』（医学書院） 各種検査マニュアル

■備考

TBLとは，能動的学習を育成することを重視し，グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である

高次脳機能障害学Ⅰ

講師：松尾 康弘

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

脳血管障害等で生じる後遺症は、運動・感覚障害だけでなく高次脳機能障害も多く認められる。本科目では、脳機能を踏まえ、認知・行為のメカニズム、神経心理学の概要を理解することを目標とする。
・神経心理学の基本概念が理解できる。
・背景症状および各種失認症・失行症の定義および病態が説明できる。
・背景症状および各種失認症・失行症の評価および訓練法について説明できる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	神経心理学および高次脳機能障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第1章を予習しておくこと
2	神経心理学および高次脳機能障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第1章を復習しておくこと
3	視覚認知およびその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第2章を予習しておくこと
4	視覚認知およびその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第2章を復習しておくこと
5	視空間認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第3章を予習しておくこと
6	視空間認知とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第3章を復習しておくこと
7	聴覚認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第4章を予習しておくこと
8	聴覚認知とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第4章を復習しておくこと
9	触覚認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第5章を予習しておくこと
10	触覚認知とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第5章を復習しておくこと
11	身体意識・病態認知とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第6 章を予習しておくこと
12	身体意識・病態認知の障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第6章を復習しておくこと
13	行為・動作のメカニズムとその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第7章を予習しておくこと
14	行為・動作のメカニズムとその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第7章を復習しておくこと
15	試験・解説	試験・解説	

■受講上の注意

本講義はPBLを中心として実施するため、事前の予習が必須となる。学習上の留意点を確認して予習をしておくこと。また講義は基本的に2講義で1セットとなっており、1講義目はまとめ学習、2講義目はまとめた内容を他者へプレゼンテーションを行う。積極的なディスカッションを期待する。

■成績評価の方法

講義への参加態度（20%）・ワークシート提出（40%）・試験（40%）により総合的に評価し、本試験・再試験ともに60%/100%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

藤田郁代ら編集：標準言語聴覚障害学高次脳機能障害第3版，医学書院

■備考

PBL: Problem Based Learning（問題発見解決型学習）

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

高次脳機能障害学Ⅱ

講師：松尾 康弘

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

近年、脳機能研究が進み、古典的な高次脳機能障害（失行・失認）だけでなく、意識障害、注意障害、記憶障害、認知症といった全体的症状に対する支援において、言語聴覚士の期待が高まっている。本科目ではコミュニケーションに係る高次脳機能障害の理解ができることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	記憶とその障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第8章を予習しておくこと
2	記憶とその障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第8章を復習しておくこと
3	前頭葉と高次脳機能障害の関係について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第9章を予習しておくこと
4	前頭葉と高次脳機能障害の関係についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第9章を復習しておくこと
5	数処理・計算とその障害について理解できる	講義・PBL	事前に資料を配布する。その資料を活用し、予習をすること。
6	数処理・計算の障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、復習しておくこと
7	脳梁離断症状について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第10章を予習しておくこと
8	脳梁離断症状についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第10章を復習しておくこと
9	認知症について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第11章を予習しておくこと
10	認知症についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第11章を復習しておくこと
11	脳外傷に伴う高次脳機能障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第12章を予習しておくこと
12	脳外傷に伴う高次脳機能障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第12章を復習しておくこと
13	認知コミュニケーション障害について理解できる	講義・PBL	学習のねらいに沿って、テキストの第13章を予習しておくこと
14	認知コミュニケーション障害についてプレゼンテーションができる	講義・PBL	プレゼンテーションができるように、テキストの第13章を復習しておくこと
15	試験・解説	試験・解説	

■受講上の注意

本講義はPBLを中心として実施するため、事前の予習が必須となる。学習上の留意点を確認して予習をしておくこと。また講義は基本的に2講義で1セットとなっており、1講義目はまとめ学習、2講義目はまとめた内容を他者へプレゼンテーションを行う。積極的なディスカッションを期待する。

■成績評価の方法

講義への参加態度(20%)・ワークシート提出（40%）・試験（40%）により総合的に評価し、本試験・再試験ともに60%/100%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

藤田郁代ら編集：標準言語聴覚障害学 高次脳機能障害第3版，医学書院

■備考

PBL: Problem Based Learning(問題発見解決型学習)

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

失語・高次脳機能障害学演習Ⅰ

講師：高吉 進

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

失語症・高次脳機能検査の概要・実施手順を理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	MMSE、HDS-Rの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
2	日本版レーヴン色彩マトリックス、コース立方体組み合わせテストの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
3	WAIS-Ⅳの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
4	WAIS-Ⅳの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
5	WAIS-Ⅳの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
6	WAIS-Ⅳの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
7	WMS-Rの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
8	WMS-Rの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
9	CATの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
10	CATの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
11	検査演習①	実技	検査を復習する
12	検査演習②	実技	検査を復習する
13	検査演習③	実技	検査を復習する
14	検査演習④	実技	検査を復習する
15	単位認定試験・解説	試験・講義	講義1～14を復習する

■受講上の注意

各講義のねらいに合わせて、予習・復習を行ってください。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに実技20点、筆記試験80点の合計100点で60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

各種検査マニュアル

■備考

TBLとは，能動的学習を育成することを重視し，グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語発達障害学Ⅰ

講師：福元 恵美

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

定型の言語獲得過程を指標として、発達障害に伴う言語発達障害の特徴と支援、各種評価法の概要を理解することを目標とする。特に知的能力障害・自閉症スペクトラム障害・注意欠如/多動性障害・特異的言語発達障害・限局性学習障害・脳性麻痺・小児失語症について理解を深める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語発達障害の概要について学ぶ。	講義	言語発達学の復習をしておくこと。
2	知的能力障害の特徴について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
3	知的能力障害の指導・支援について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
4	自閉症スペクトラム障害の特徴について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
5	自閉症スペクトラム障害の指導と支援について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
6	注意欠如/多動性障害の特徴について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
7	注意欠如/多動性障害の指導・支援について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
8	特異的言語発達障害の特徴を理解し、指導・支援の方法を学ぶ。	講義	予習・復習 小テスト実施。
9	学習障害の特徴を理解し、指導・支援の方法を学ぶ。	講義	予習・復習 小テスト実施。
10	脳性麻痺・重複障害の特徴について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
11	脳性麻痺・重複障害の指導・支援について理解する。	講義	予習・復習 小テスト実施。
12	小児失語症の特徴を理解し、指導・支援の方法を学ぶ。	講義	予習・復習 小テスト実施。
13	情報収集の仕方や各種検査の概要を学ぶ。①	講義	予習・復習 小テスト実施。
14	情報収集の仕方や各種検査の概要を学ぶ。②	講義	予習・復習 小テスト実施。
15	単位認定試験・解説	試験、講義	これまでの復習をしておく。

■受講上の注意

予習として指定された教科書や資料の項目を読んでおくこと。
授業活動の状況により上記の内容・講義順番を変更する場合もある。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

標準言語聴覚障害学　言語発達障害学第3版，医学書院
言語聴覚士テキスト第3版，医歯薬出版

その他の参考資料は随時配付する。

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語発達障害学Ⅱ

講師：雲井 未歓

単位数：2単位	時間数：40時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

1. 学習障害（特異的読み書き障害）の定義、診断基準を理解し、説明することができる。
2. 学習障害（特異的読み書き障害）の検査（音読検査）を実施することができる。
3. 読み書き障害の原因とサブタイプについて理解し、状態像に応じた支援方法を考えることができる。
4. 各種発達障害の状態像・特徴について、言語機能・言語発達の諸側面との関連から理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	インクルーシブ社会に向けた障害理解と支援の枠組みを理解し、支援者としての自己の在り方と目標を確認する	講義	リハビリテーション概念と社会保障の基本的内容の予習
2	学習障害の定義と分類、診断基準について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
3	学習障害の原因と脳の機能障害部位について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
4	学習障害（特異的読み障害）の診断手順と音読検査の実施方法について学ぶ（症例1の分析）	講義・GW	グループ別の学習・発表を含む
5	学習障害（特異的読み障害）の診断手順と音読検査の実施方法について学ぶ（症例2の分析）	講義・GW	グループ別の学習・発表を含む
6	学習障害のサブタイプと臨床症状の多様性について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
7	読み書きの認知的機序と読み書き困難の背景について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
8	学習障害児のアセスメントと治療的介入の方法・内容について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
9	読み書きの学習支援教材の特徴と活用方法について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
10	学習障害児への読み書きの学習支援方法について学ぶ（ひらがなの読み書き）	講義	教科書・資料の予習・復習
11	学習障害児への読み書きの学習支援方法について学ぶ（漢字の読み書き）	講義	教科書・資料の予習・復習
12	ADHDやASDを合併する学習障害の事例について学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
13	特別支援教育における学習障害への対応とRTIモデルについて学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
14	言語の多様な機能的側面と知的障害における言語媒介学習について学ぶ	講義・GW	グループ別の学習・発表を含む
15	発達障害児（特にADHD）における実行機能と言語・社会的発達について学ぶ	講義・GW	グループ別の学習・発表を含む
16	発達障害児（特にADHDとASD）におけるとソーシャルスキルの支援について学ぶ	講義・GW	グループ別の学習・発表を含む
17	発達障害児（特にASD）における言語・コミュニケーション障害と心の理論について学ぶ	講義・GW	グループ別の学習・発表を含む
18	発達障害児（特にASD）における弱い中枢性統合と構造化による支援について学ぶ	講義・GW	グループ別の学習・発表を含む
19	二次障害のリスクと予防的対応ついて学ぶ	講義	教科書・資料の予習・復習
20	単位認定試験・解説	試験	

■受講上の注意

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン−わかりやすい診断手順と支援の実際−,診断と治療社

■備考

■実務経験

言語発達障害学演習Ⅰ

講師：小原 路乃、上村花梨、提 雄輝
田中 尚美、福元 恵美

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

言語発達障害領域に関する職種間連携を学び、症例を用いて評価演習・支援計画演習を行う。
本講義では、特に①機能性構音障害や異常構音に対する構音訓練ができるようになる。②国リハ式＜S-S法＞言語発達遅滞検査を用いた評価が行えるようになる。③吃音に対する評価・訓練の理解。④PVT-R絵画語彙発達検査ができるようになることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	機能性構音障害について復習。 機能性構音障害に対する構音訓練を理解する。	講義・GW	予習・復習
2	機能性構音障害に対する訓練が行えるようになる。	演習・GW	予習・復習
3	異常構音について復習。 異常構音に対する構音訓練を理解する。	講義・GW	予習・復習
4	異常構音に対する構音訓練が行えるようになる。	講義・GW	予習・復習
5	国リハ式（S-S法）言語発達遅滞検査について概要を理解する。	講義・演習	予習・復習 必要な検査道具・物品の準備
6	国リハ式（S-S法）言語発達遅滞検査の実施ができるようになる。①	演習	予習・復習 必要な検査道具・物品の準備
7	国リハ式（S-S法）言語発達遅滞検査の実施ができるようになる。②	演習	予習・復習 必要な検査道具・物品の準備
8	国リハ式（S-S法）言語発達遅滞検査の結果からまとめができるようになる。	演習	予習・復習 教材作成に必要な物品の準備
9	吃音について概要を復習。①	講義	発声発語障害学Ⅱの復習をしておく。
10	吃音について概要を復習。②	講義	発声発語障害学Ⅱの復習をしておく。
11	吃音の症例をもとに評価・訓練を理解する。①	講義・GW・演習	発声発語障害学Ⅱの復習をしておく。
12	吃音の症例をもとに評価・訓練を理解する。②	講義・GW・演習	発声発語障害学Ⅱの復習をしておく。
13	PVT-R絵画語彙発達検査ができるようになる。①	演習	検査マニュアルを準備
14	PVT-R絵画語彙発達検査ができるようになる。②	演習	検査マニュアルを準備
15	単位認定試験、解説	試験、講義	これまでの復習をしておく

■受講上の注意

障害特性を十分理解して、対象となる子どものイメージができていないと難しい作業となります。発声発語障害学・言語発達障害学の復習・予習をしておくこと。
授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

・国リハ式（S-S法）言語発達遅滞検査マニュアル
・PVT-R絵画語彙発達検査マニュアル
その他の参考資料は随時配付する。

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

発声発語障害学Ⅰ

講師：福元 恵美

単位数：1単位　時間数：20時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

言語聴覚障害学のうち、小児から成人までの発声発語障害領域を学ぶ。
①発声発語障害に関する基礎的な知識や病態を理解する。
②小児の構音獲得について学び、それを指標として機能性構音障害の概要を理解する。
③新版構音検査が実施でき、評価のまとめがおこなえるようになる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	話しことば（Speech）の障害と言語聴覚士の関わりについて理解する。	講義	復習
2	発達途上の構音の誤りと機能性構音障害について理解する。	講義	復習
3	異常構音（声門破裂音・咽頭摩擦音・咽頭破裂音・側音化構音・口蓋化構音・鼻咽腔構音）の特徴を理解する。①	講義	復習
4	異常構音（声門破裂音・咽頭摩擦音・咽頭破裂音・側音化構音・口蓋化構音・鼻咽腔構音）の特徴を理解する。②	講義	復習
5	新版構音検査の概要を知り、検査の実施ができるようになる。①	講義・演習	復習
6	新版構音検査の概要を知り、検査の実施ができるようになる。②	講義・演習	復習
7	新版構音検査の評価のまとめができるようになる。①	講義・演習	復習
8	新版構音検査の評価のまとめができるようになる。②	講義・演習	復習
9	構音訓練の適応と注意点について理解する。	講義・演習	復習
10	単位認定試験・解説	試験・講義	これまでの復習をしておく。

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

本試験・再試験において60点/100点以上を合格とする。

■テキスト参考書など

言語聴覚士テキスト　第3版、医歯薬出版
適宜資料を配布する。

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

発声発語障害学Ⅱ

講師：川元 真由美

単位数：1単位	時間数：20時間	授業学年：1学年
必修選択：必修		

■科目目標

発声発語障害のなかでも流暢性障害（吃音）に関する理論と技術を学ぶ。吃音は幼児期に始まり発達・学習・環境などの多要因が関与すると考えられているものの、他の言語聴覚障害の領域に比べると未だ解明されていないことも多い。正しい知識を有し、患者様やご家族と向き合える知識及び技術を習得することを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	吃音体験談をとおし吃音の症状・心理的側面について考える。	講義・演習	吃音の症状について説明できる。
2	吃音の概要① （定義とメカニズム）	講義・演習	吃音の定義について説明できる。
3	吃音の概要② （発達性吃音・獲得性吃音・クラタリング）	講義・演習	発達性吃音・獲得性吃音・クラタリングについて説明できる。
4	吃音の概要③ （近年の研究・他疾患との鑑別）	講義・演習	吃音の概要について説明できる。
5	吃音の評価① （評価の流れ・情報収集）	講義・演習	吃音症状を理解し、臨床の流れについて説明できる。
6	吃音の評価② （吃音検査法　第2版）	講義・演習	吃音検査法の目的を把握し評価法について学ぶ。
7	吃音の指導・訓練① （直接訓練・間接訓練）	講義・演習	各訓練の目的を把握し訓練内容について説明できる。
8	吃音の指導・訓練② （環境調整）	講義・演習	環境調整の目的やアプローチの内容について説明できる。
9	吃音の指導・訓練③ （セルフヘルプグループ）	講義・演習	セルフヘルプグループについて説明できる。
10	終講試験およびまとめ	試験	

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

授業への参加態度及び課題（10%）・単位認定試験（90%）により総合的に判断し、本試験・再試験ともに60点/100点以上を合格とする。

■テキスト参考書など

言語聴覚療法技術ガイド，文光堂
標準言語聴覚障害学　発声発語障害学 第3版，医学書院
※適宜資料を配布する

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

発声発語障害学Ⅲ

講師：徳永 弘樹

単位数：1単位	時間数：20時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

発声発語障害のなかでも、口腔・中咽頭がん等や口蓋裂にて生じる器質性構音障害を理解する。
器質性構音障害の評価の内容や実施方法を理解する。
異常構音に関する耳のトレーニングを実施し理解を深める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	口唇口蓋裂に関する基礎知識	講義	
2	口唇口蓋裂に関する言語の問題点	講義	
3	口唇口蓋裂のチーム医療の流れ	講義	
4	口蓋裂言語検査	講義	
5	口蓋裂言語検査	演習	
6	構音障害の評価と訓練の流れ	講義	
7	言語評価・報告書	講義	
8	系統的構音訓練の手順	講義	
9	構音障害の特徴・聞き取り	演習	
10	試験・解説（あるいはまとめ）	試験	

■受講上の注意

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

適宜資料を配布する。

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

発声発語障害学Ⅳ

講師：戌亥 啓一

単位数：1単位　時間数：20時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

本講義では、発声発語障害の中でも、主に喉頭病変、発声の困難さにより生じる音声障害について病態と訓練方法を理解する。
呼吸器についての知識を基本に、発声発語にかかわる諸器官の構造・機能への理解が肝心となる。発声機能検査、音声（音響）分析検査、発声に関する多彩な訓練法を経験し理解を深めることが目標となる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	発声にかかわる器官の構造を発声機能の視点で理解する	GW・講義	呼吸器、特に喉頭周囲の構造について復習しておく
2	声の質について知り、声の質の評価法を知る。 音声障害の定義について理解する。	講義・演習	発声の多角的な表現方法と主観的・客観的な発声の評価方法の概要を整理する
3	声帯を中心とした喉頭の（間接的・直接的）観察方法を知り、観察方法による描出方法の違いから喉頭周辺の構造について理解を深める	講義・演習	機器の種類・名称と喉頭の描出方法の違いを整理する
4	音声障害の原因と分類および症状について理解を深める 音声障害の代表的な疾患について理解を深める	GW・講義	分類についてカテゴリーから理解し、細部については徐々に整理していく
5	音声障害の原因疾患について全体を知る 音声障害の指導・訓練と治療（手術、薬剤含む）について概要を知る	GW・講義	疾患や指導・訓練法概要の把握に努め演習時に再度確認・整理していく
6	症状対処的音声治療を経験し理解を深める	講義・演習	喉頭周囲の構造と状態（病態）をイメージしながら行う
7	包括的音声治療を経験し理解を深める	講義・演習	喉頭周囲の構造と状態（病態）をイメージしながら行う
8	無喉頭発声の種類と特徴について理解を深める	GW・講義	無喉頭後の状態に応じてどのように手段が変化するかを前提にすると特徴の理解が容易になる
9	無喉頭発声の訓練と関連知識	GW・講義	実物を用いることができるものも多いが、無喉頭状態の再現が困難な点を理解し、自身との違いをイメージする
10	これまでの講義のまとめと理解度の確認	試験・まとめ	

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

シリーズ監修 藤田 郁代：標準言語聴覚障害学　発声発語障害学 第3版, 医学書院
配付資料

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

発声発語障害学Ⅴ

講師：小牧 祥太郎

単位数：1単位　時間数：20時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

コミュニケーション障害分野において特に発現率が多いDysarthriaを対象に、基礎知識の習得、生じうる疾患を理解して、運動障害による発話障害を理解し、Dysarthriaのタイプ分類について理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	Dysarthriaの病態を理解する。症例VTRよりDysarthriaの全体像について学ぶ。	講義	特になし
2	Speechの仕組みの理解を深める（復習）。 Dysarthriaのタイプ分類の考え方を理解する。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 （参照するページは講義の際に案内を行う。）
3	上位運動ニューロン障害タイプのDysarthriaについて理解する（皮質延髄路両側性障害について）。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 （参照するページは講義の際に案内を行う。）
4	上位運動ニューロン障害タイプのDysarthriaについて理解する（皮質延髄路一側性障害について）。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 （参照するページは講義の際に案内を行う。）
5	下位運動ニューロン障害タイプによるDysarthriaについて学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 （参照するページは講義の際に案内を行う。）
6	仮性球麻痺・球麻痺の違いについて理解する（病態・症状について）。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 （参照するページは講義の際に案内を行う。）
7	錐体外路障害タイプによるDysarthriaについて学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 （参照するページは講義の際に案内を行う。）
8	小脳障害タイプによるDysarthriaについて学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 （参照するページは講義の際に案内を行う。）
9	運動系多重障害タイプによるDysarthriaについて学ぶ。	講義	使用テキストを読んでおくことが望ましい。 （参照するページは講義の際に案内を行う。）
10	試験・解説（あるいはまとめ）	試験・講義	

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

四尾正輝著「アイサースリア臨床標準テキスト 第2版」医歯薬出版株式会社
病気が見える　Vol.7　メディックメディア
その他、適宜資料を配布する。※テキストを変更する場合は速やかに連絡を行います。

■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

嚥下障害学Ⅰ

講師：小牧 祥太郎

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：2学年
必修選択：必修		

■科目目標

昨今、高齢社会に伴い嚥下障害は社会的な問題となっている。言語聴覚士は、医師または歯科医師の指示のもとに、診療の補助として嚥下訓練を実施でき、嚥下訓練の実施が法的に明記されている唯一の専門職である。本講義では、摂食・嚥下の基礎である解剖・生理から嚥下モデル、嚥下障害を生じうる疾患や病態について学ぶ。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	摂食嚥下障害の概要を理解する（嚥下障害と取り巻く状況について）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
2	嚥下障害の理解に必要な解剖を理解する（口腔・咽頭を中心に）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
3	嚥下障害の理解に必要な解剖を理解する（喉頭・食道を中心に）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
4	咀嚼の生理と神経機構について理解する。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
5	嚥下モデルについて理解する（モデルの概要について）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。動画サイトなどで嚥下モデルを見ておくことを推奨する。
6	嚥下モデルについて理解する（従来モデル（3、4期モデル）、臨床モデル（5期モデル））。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。動画サイトなどで嚥下モデルを見ておくことを推奨する。
7	嚥下モデルについて理解する（プロセスモデル）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。動画サイトなどで嚥下モデルを見ておくことを推奨する。
8	摂食嚥下に関わる神経機構について理解する（嚥下反射・呼吸と咳嗽反射）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
9	年齢による嚥下状態の変化を理解する（小児嚥下（発達的変化）、高齢者嚥下（機能低下、服薬の影響）について）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
10	嚥下障害の誤嚥の症状と分類について理解する。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
11	嚥下障害を起こす疾患について理解する（運動障害性（神経性））。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
12	嚥下障害を起こす疾患について理解する（器質性・機能性）。 高次脳機能障害、認知症 etc の問題に伴う摂食・嚥下障害について理解する。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
13	摂食・嚥下障害の合併症（誤嚥性肺炎・脱水・低栄養 etc）について理解する。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
14	科目の総まとめとして、嚥下障害の基礎的内容の復習を行う（主に嚥下モデルについて）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。嚥下モデルについてレポートを課す場合がある。
15	試験・解説（あるいはまとめ）	試験・講義	

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学　医歯薬出版株式会社
その他参考資料は随時配布を行う。

■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

聴覚障害学Ⅰ

講師：戌亥 啓一

単位数：2単位　時間数：40時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

聴覚障害は目に見えない、他者に気づかれにくい障害である。そのため障害についての理解や当事者の心中を推し量ることは難しい。言語聴覚士は聴覚障害に対する専門職であり、この分野における各方面からの期待は大きく、言語聴覚士を目指す本講義の受講者には聴覚領域に対して興味と関心をもってもらえることを目標の1つとしている。

受講者においては、聴覚の仕組みを理解し、その上で聴覚障害の種類と特性を知り、言語聴覚士として各種聴覚検査や助言、指導、訓練を行うための知識を身につけることが就業までの目的となる。本講義は導入の位置づけにあり、聴覚領域の講義は上位学年も含め複数の設定されていることから、まずは本講義を通して基礎的な理解を十分に得ることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	聴覚障害の基礎知識について理解を深める (1) 耳が音を感じる仕組みと構造	GW・講義	他の講義や教科書であいまいな点を1つずつ解消していく
2	聴覚障害の基礎知識について理解を深める (2) 難聴とは？音と聴覚器と伝導路について	GW・講義	全体像から局所の理科愛に進むようにする
3	補装具や補聴援助機器から聞こえや聴覚についての理解を深める	演習	試聴前にイメージをもちギャップを楽しむ
4	聴器の発達と脳科学からの視点について理解を深める	GW・講義	発達の知識との関連性を意識して抽出する
5	頻度の高い難聴のタイプとその特徴による影響について理解を深める	GW・講義	聴器の構造と障害・症状が密接に関係していることを知る
6	聴覚障害のさまざまな原因と影響について理解を深める	GW・講義	聴器の構造と障害・症状が密接に関係していることを知る
7	聴覚の検査の種類や特徴を把握し今後の講義につなげる	講義・演習	聴器の構造や障害のタイプが密接に関係していることを知る
8	代表的な聴覚検査の体験と通して聴覚とその障害についての理解を深める (1)	演習	操作・体験から学ぶことも多いので、メモを取るなど疑問・発見を楽しむ
9	代表的な聴覚検査の体験と通して聴覚とその障害についての理解を深める (2)	演習	操作・体験から学ぶことも多いので、メモを取るなど疑問・発見を楽しむ
10	代表的な聴覚検査の体験と通して聴覚とその障害についての理解を深める (3)	演習	操作・体験から学ぶことも多いので、メモを取るなど疑問・発見を楽しむ
11	聴覚障害と視覚的コミュニケーションについて理解を深める (1)	GW・講義	体験から聴覚障害児・者の生活上の思いを想像し、考察をしてみる
12	聴覚障害と視覚的コミュニケーションについて理解を深める (2)	GW・講義	体験から聴覚障害児・者の生活上の思いを想像し、考察をしてみる
13	聴覚障害と視覚的コミュニケーションについて理解を深める (3)	GW・講義	体験から聴覚障害児・者の生活上の思いを想像し、考察をしてみる
14	日本語の音と聞こえについて理解を深める	GW・講義	日本語を詳しく知ることの重要性を知り、その科学的特徴を整理する
15	日本語の音の聞き取りづらさや聞き間違いから聴覚障害の理解を深める	GW・講義	日本語を詳しく知ることの重要性を知り、その科学的特徴を整理する
16	両耳聴の効果から聴覚の機能について理解を深める	GW・講義	聴覚のさまざまな機能についてまとめる
17	代表的な聴覚検査の体験と通して聴覚とその障害についての理解を深める (4)	演習	操作・体験から学ぶことも多いので、メモを取るなど疑問・発見を楽しむ
18	代表的な聴覚検査の体験と通して聴覚とその障害についての理解を深める (5)	演習	操作・体験から学ぶことも多いので、メモを取るなど疑問・発見を楽しむ
19	代表的な聴覚検査の体験と通して聴覚とその障害についての理解を深める (6)	演習	操作・体験から学ぶことも多いので、メモを取るなど疑問・発見を楽しむ
20	終講試験とまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

授業活動の状況によって、上記の内容や順番を変更する場合もあります。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60％以上を合格とする。

■テキスト参考書など

病気が見える 耳鼻咽喉科 vol.13 第1版, メディックメディア
配付資料

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

聴覚障害学Ⅱ

講師：徳永 弘樹、戌亥 啓一

単位数：2単位　時間数：40時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

聴覚検査への理解を深める。
演習を通して聴覚検査の流れや実施方法の詳細を理解する。

・各種聴覚検査についてその目的や特徴を把握する。
・音場、幼児聴力検査、自覚・他覚的検査など目的別検査の分類に精通する。
・特に標準純音聴力検査を中心に各種検査に対する基礎的手技の習熟を目指す。
・聴覚障害に関わる支援、制度、補聴援助機器について理解を深める。
・聴覚障害児・者のコミュニケーション手段と情報伝達特徴の概要を理解する。
・乳幼児・小期聴覚障害、成人中途障害、加齢性対応の特徴について理解を深める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	聴覚検査の種類	講義	
2	純音聴力検査について	講義	
3	純音聴力検査	演習	
4	純音聴力検査（マスキング）	演習	
5	語音聴力検査について	講義	
6	語音聴力検査（語音了解閾値検査）	演習	
7	語音聴力検査（語音明瞭度検査）	演習	
8	試験（中間）	試験	
9	聴覚障害に関わるさまざまな側面について理解を深める（1）	講義	事前配付資料の通読及び確認
10	聴覚障害に関わるさまざまな側面について理解を深める（2）	講義	事前配付資料の通読及び確認
11	聴覚に関わる支援、制度について理解を深める（1）	講義	事前配付資料の通読及び確認
12	聴覚に関わる支援、制度について理解を深める（2） 補聴援助機器について理解を深める	講義	事前配付資料の通読及び確認
13	コミュニケーション手段と情報伝達特徴の概要を理解する（1）	講義	事前配付資料の通読及び確認
14	コミュニケーション手段と情報伝達特徴の概要を理解する（2）	講義	事前配付資料の通読及び確認
15	コミュニケーション手段と情報伝達特徴の概要を理解する（3）	講義	事前配付資料の通読及び確認
16	乳幼児・小期聴覚障害の特徴について理解を深める（1）	講義	事前配付資料の通読及び確認
17	乳幼児・小期聴覚障害の特徴について理解を深める（2）	講義	事前配付資料の通読及び確認
18	成人中途障害、加齢性対応について理解を深める（1）	講義	事前配付資料の通読及び確認
19	成人中途障害、加齢性対応について理解を深める（2）	講義	事前配付資料の通読及び確認

■受講上の注意

検査に対する講義は概略の解説および演習を通して実施・進行していく。オージオグラム、オージオメータの用語・単位・原理についての理解、また各検査名とさまざまな区分についてその根拠から整理・理解していく。授業活動の状況によって、上記の内容や順番を変更する場合もあります。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

藤田郁代監修：標準言語聴覚障害学　聴覚障害学 第3版, 医学書院　　病気が見える 耳鼻咽喉科 vol.13 第1版, メディックメディア
聴覚検査の実際, 南山堂

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語聴覚療法管理学Ⅰ

講師：松下 裕二、専任教員

単位数：1単位　時間数：15時間　授業学年：1学年

必修選択：必修

■科目目標

「言語聴覚療法管理学」では、医療、福祉、教育現場における言語聴覚士の役割を学び、自分自身が言語聴覚士として活動する際の知見を得る事を目標としている。

本講義では、ソーシャルスキルの基礎知識、職能団体の理解、臨床現場をはじめとする現役言語聴覚士の活動内容、多職種連携について基本的な事項を中心に取り上げる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	キャリアデザインについて学ぶ	講義・演習	自身を客観的に把握するよう意識する
2	キャリアデザインの重要性を理解する（1）	演習	自身を客観的に把握するよう意識する
3	キャリアデザインの重要性を理解する（2）	演習	第1・2講で学んだソーシャルスキルを活用する
4	キャリアデザインの重要性を理解する（3）	演習	第1・2講で学んだソーシャルスキルを活用する
5	就業者士から職能情報を能動的に得て職業イメージを強くする（1） 情報取得のプロセスを確認・構築する	演習	第1・2講で学んだソーシャルスキルを活用する
6	就業者から職能情報を能動的に得て職業イメージを強くする（2） 情報取得のプロセスを実行し、ソーシャルスキルを活用する	演習	第1・2講で学んだソーシャルスキルを活用する
7	就業者から職能情報を能動的に得て職業イメージを強くする（3） 情報取得のプロセスを実行し、フィードバックを実践する	演習	第1・2講で学んだソーシャルスキルを活用する
8	就業施設とそこでの活動について学ぶ	演習	

■受講上の注意

■成績評価の方法

参加・計画資料・レポートを項目としたルーブリック評価による。

■テキスト参考書など

適宜配布

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語聴覚療法管理学Ⅱ

講師：松下 裕二、専任教員

単位数：1単位　時間数：20時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

「言語聴覚療法管理学」では、医療、福祉、教育現場における言語聴覚士の役割を学び、自分自身が言語聴覚士として活動する際の知見を得る事を目標としている。

本講義では、ソーシャルスキルの活用方法、職能団体の具体的な役割、臨床現場をはじめとする現役言語聴覚士の活動事例、臨床施設報告、多職種連携について多くの実践例を中心に取り上げる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	就業場所における倫理、衛生等の重要な知識を理解する。	講義	実践で生かすことことが重要となる
2	就業から職能情報を得て職業イメージを強くする（1） 情報取得のプロセスを主体的に確認・構築する	GW・演習	第1講で学んだソーシャルスキルを活用する
3	就業から職能情報を得て職業イメージを強くする（2） 役割に応じて情報取得のプロセスを実行する	GW・演習	第1講で学んだソーシャルスキルを活用する
4	就業から職能情報を得て職業イメージを強くする（3） 情報取得のプロセスを実行し、フィードバックを主導する	GW・演習	第1講で学んだソーシャルスキルを活用する
5	臨床実習で活用できるソーシャルスキルの実践と応用を学ぶ（1）	GW・演習	第1講で学んだソーシャルスキルを活用する
6	臨床実習で活用できるソーシャルスキルの実践と応用を学ぶ（2）	GW・演習	学んだソーシャルスキルを活用する
7	臨床実習で活用できるソーシャルスキルの実践と応用を学ぶ（3）	GW・演習	
8	臨床実習で活用できるソーシャルスキルの実践と応用を学ぶ（4）	GW・演習	
9	臨床施設にかかわる情報とその活用方法を学ぶ（1）	GW・演習	
10	臨床施設にかかわる情報とその活用方法を学ぶ（2）	GW・演習	

■受講上の注意

■成績評価の方法

参加・計画資料・レポートを項目としたルーブリック評価による。

■テキスト参考書など

適宜配布

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

見学実習

講師：専任教員、実習指導者

単位数：1単位　時間数：45時間　授業学年：2学年

必修選択：必修

■科目目標

・言語聴覚障害がある人の抱える問題と背景を学ぶ。
・言語聴覚士の役割と業務を学ぶ。
・見学する施設の特徴と地域における役割を学ぶ。
・職業倫理（守秘義務など）について学ぶ。

■科目内容

■学習のねらい

（1）学内でのオリエンテーション
・臨床実習マニュアルをもとに実習全般について確認および諸注意を認識し、活動方法を学ぶ。
・臨床実習経験者からの講話および対話から具体的な事項を学ぶ。

（2）実習施設でのオリエンテーション
・施設の組織、管理運営の概要、職務規程の説明（勤務時間、休憩時間、電話・PC使用、個人情報に関する規則、更衣室の使用、喫煙、清掃、戸締りなど）
・部署、部門の概要と業務（運営規則、職員構成、職員と学生の任務と責任など）
・実習に伴う諸注意（安全面、衛生面、個人情報、器具、備品、図書の取り扱いなど）
・その他

（3）実習参加・活動
a. 指導者は、学生－指導者－教員連絡表（臨床実習マニュアル書式⑦）を参照し、学生の個々の能力と経験を考慮した上で基礎的かつ広範な知識・技術を身に付ける機会を与えられる。
b. 指導者は個別指導以外に、可能であれば以下のような場面の見学機会を与える。学生は実習の一環としてこれらに参加する。スタッフミーティング、症例検討会、医師による回診、手術見学、症例発表、文献抄読等の課題提示、他の関連部門の見学など

（4）臨床活動（見学 → 模倣 ）
学生は、見学を通して言語聴覚療法の詳細な説明を受ける。「何が行われていたのか」積極的な質問や調べ学習が求められる。
進歩に応じて自ら考え判断していく機会があれば、自身の考えを指導者に伝達していくなど、能動的な活動を行えるよう意識していくと実習活動がより充実したものになる。

（5）学生は実習後に実習報告を行い実習報告書の提出を行う。具体的な書式は個々の活動内容によってより適切な形式を採用する。

■方法

実習

■学習上の留意点

■受講上の注意

臨床実習前オリエンテーションへの参加（事前通達有）及び臨床実習マニュアルの参照を行う。特に出席および欠席・遅刻・早退等への対応については十分把握すること。

■成績評価の方法

鹿児島医療技術専門学校言語聴覚療法学科ルーブリック評価によりNICE段階評価が行われる（臨床実習マニュアル参照）。

■テキスト参考書など

鹿児島医療技術専門学校　臨床実習マニュアル、言語聴覚療法技術ガイド
その他関連分野参考書

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員、指導者による授業である。

臨床言語聴覚療法Ⅰ

講師:高吉 進

単位数:1単位　時間数:15時間　授業学年:1学年、授業学年:2学年

必修選択:選択必修

■科目目標

・神経心理学的検査を被検者として、体験し、検査の流れ・内容を理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	神経心理学的検査演習①	TBL	検査マニュアルを予習する
2	神経心理学的検査演習②	TBL	検査マニュアルを予習する
3	神経心理学的検査演習③	TBL	検査マニュアルを予習する
4	神経心理学的検査演習④	TBL	検査マニュアルを予習する
5	神経心理学的検査演習⑤	TBL	検査マニュアルを予習する
6	神経心理学的検査演習⑥	TBL	検査マニュアルを予習する
7	神経心理学的検査演習⑦	TBL	検査マニュアルを予習する
8	単位認定試験・解説	試験・講義	講義1～7を復習する

■受講上の注意

各講義のねらいに合わせて、予習・復習を行ってください。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに実技20点、筆記試験80点の合計100点で60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

各種検査マニュアル

■備考

TBLとは，能動的学習を育成することを重視し，グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

臨床言語聴覚療法Ⅱ

講師：高吉 進

単位数：1単位　時間数：20時間　授業学年：2学年

必修選択：選択必修

■科目目標

・失語症者とのコミュニケーション技術を身につける。
・失語症者の外出時に必要な会話支援を学ぶ。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	失語症者のコミュニケーション支援の概要	TBL	配付資料を予習・復習する
2	失語症者のコミュニケーション支援技法①	TBL	配付資料を予習・復習する
3	失語症者のコミュニケーション支援技法②	TBL	配付資料を予習・復習する
4	失語症者のコミュニケーション支援技法③	TBL	配付資料を予習・復習する
5	失語症者のコミュニケーション支援技法④	TBL	配付資料を予習・復習する
6	失語症者のコミュニケーション支援技法⑤	TBL	配付資料を予習・復習する
7	失語症者のコミュニケーション支援技法⑥	TBL	配付資料を予習・復習する
8	失語症者のコミュニケーション支援技法⑦	TBL	配付資料を予習・復習する
9	失語症者のコミュニケーション支援技法⑧	TBL	配付資料を予習・復習する
10	単位認定試験・解説	試験・講義	講義1～9を復習する

■受講上の注意

各講義のねらいに合わせて、予習・復習を行ってください。

■成績評価の方法

本試験、再試験ともに実技20点、筆記試験80点の合計100点で60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

■備考

TBLとは，能動的学習を育成することを重視し，グループで協働して互いに教え合う能力を鍛える少人数チームでの学習教育法です。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

地域言語聴覚実習

講師：専任教員

単位数：2単位　時間数：90時間　授業学年：2学年、授業学年：3学年、授業学年：4学年

必修選択：選択必修

■科目目標

本講義は言語聴覚士養成課程における「評価実習」「総合臨床実習」を拡大して実施する希望を持った学生が受講する選択科目である。上述の臨床実習では医療機関での活動時間が多く設定されているため、それ以外の領域での活動機会が相対的に得られないことから、本講義ではそれらを補完する位置づけを有している。よって、実習の目的としては上述の科目と相違なく、また内容も求める目標も相応のものとなっている。受講希望者とはオリエンテーションの際に十分に実習領域に対する要望や意見を聴取し、担当教員との調整の下、実習先・方法を決定していく。

■科目内容

学習のねらい

（1）受講時オリエンテーション
・臨床実習マニュアルをもとに実習全般について確認および諸注意を認識し、活動方法を学ぶ。
・必要に応じて臨床実習経験者からの講話および対話から具体的な事項を学ぶ。

（2）実習担当者とのオリエンテーション
・施設の組織、管理運営の概要、職務規程の説明（勤務時間、休憩時間、電話・PC使用、個人情報に関する規則、更衣室の使用、喫煙、清掃、戸締りなど）
・部署、部門の概要と業務（運営規則、職員構成、職員と学生の任務と責任など）
・実習に伴う諸注意（安全面、衛生面、個人情報、器具、備品、図書の取り扱いなど）
・その他

（3）実習参加・活動
a. 指導者が学生の担当する対象者の選択と割り当てをするにあたっては、学生－指導者－教員連絡表（臨床実習マニュアル書式⑦）を参照し、学生の個々の能力と経験を考慮した上で基礎的かつ広範な知識・技術を身に付ける機会を与えられる。
b. 指導者は個別指導以外に、可能であれば以下のような機会を与える。学生は臨床実習の一環としてこれらに参加する。
スタッフミーティング、症例検討会、医師による回診、手術見学、症例発表、文献抄読等の課題提示、他の関連部門の見学など

（4）活動（見学 → 模倣 → 実施）
学生は、まず見学を通して言語聴覚療法の詳細な説明を受ける。特に実習開始から間もない時期は、「どのような障害に、どのような目的、方法で」言語聴覚療法が行われているのかイメージできるよう積極的な質問や調べ学習が求められる。
例　数回の見学後に訓練等の模倣、指導者が大丈夫だと判断した時点を「実施」とし、以降はその技術に限定して実施など、実施項目（can）を増やしていく。一定レベルに達した後は、進歩に応じて自ら考え判断していく機会を得るよう、自身の考えを指導者に伝達していくことも肝要である。

（5）学生は実習後に実習報告を行い実習報告書の提出を行う。具体的な書式は個々の活動内容によってより適切な形式を採用する。

■受講上の注意

■成績評価の方法

臨床実習前オリエンテーションへの参加（事前通達有）及び臨床実習マニュアルの参照を行う。特に出席および欠席・遅刻・早退等への対応については十分把握すること。

■テキスト参考書など

鹿児島医療技術専門学校　臨床実習マニュアル、言語聴覚療法技術ガイド
その他関連分野参考書

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員、指導者による授業である。

言語聴覚研究入門

講師：専任教員

単位数：1単位　時間数：20時間　授業学年：1学年、授業学年：2学年

必修選択：選択必修

■科目目標

高度専門士を目指す学生としてとして研究法を理解することは重要である。「言語聴覚研究Ⅰ・Ⅱ」につながる研究活動の基礎を理解したい。

①適切な用語を使用し文章表現ができる　②論文の構成を理解する　③既存の論文や教科書を検索する方法を学ぶ　④引用・参考を活用できるようになる　④事実を基に考察できるようになる　⑤適切な用語を使用し発表ができる　以上を本講義の目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	研究について概要を理解する、研究の流れを把握し、今後の活動をイメージする	講義・演習	あいまいな点を指導者に確認するためリストアップする
2	担当指導者との調整を行い、段階を踏んだ具体的な流れを知る	講義・演習	担当指導者との連絡手段を確認する
3	担当指導者との調整を重ね、情報収集、テーマ設定のための活動を進める	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
4	企画書の作成、計画立案を通して、研究の流れを把握する	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
5	情報収集とデータ収集の方法を活動を通して知る（1）	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
6	情報収集とデータ収集の方法を活動を通して知る（2）	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
7	情報の分析と活用の具体的流れを経験し、図表作成および文章化する（1）	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
8	情報の分析と活用の具体的流れを経験し、図表作成および文章化する（2）	講義・演習	担当指導者と積極的な調整を図る
9	情報をまとめ、適切な形式で表現する手段と方法を知る（1）	演習	担当指導者と積極的な調整を図る
10	情報をまとめ、適切な形式で表現する手段と方法を知る（2）	演習	担当指導者と積極的な調整を図る

■受講上の注意

本講義は担当指導者との個別指導を中心に実施される

■成績評価の方法

発表内容およびその他代替と認められる実績にて評価する。

■テキスト参考書など

適宜使用

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

栄養学

講師：川元 真由美

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

リハビリテーションの効果は対象者の栄養状態により左右される。本講義は，リハビリテーションを行う前段階から栄養管理から視野に入れたリハビリテーションを提供できる言語聴覚士となるための学びとする。リハビリテーションと栄養の関係性を理解し，習得した知識を臨床現場で活かすことを最終目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	リハビリテーションと栄養①（リハビリテーションと栄養の関係性）	講義・演習	リハビリテーションと栄養の関係性について説明できる
2	リハビリテーションと栄養②（栄養法）	講義・演習	栄養法の復習 ※これまで学んだ資料を準備
3	リハビリテーションと栄養③（栄養素）	講義・演習	※パソコンの準備
4	リハビリテーションと栄養④（サルコペニア・低栄養）	講義・演習	各用語について説明できるようにする
5	リハビリテーションと栄養⑤（フレイル）	講義・演習	各用語について説明できるようにする
6	栄養評価①（評価の概要）	講義・演習	言語聴覚士として評価の視点を理解する
7	栄養評価②（症例検討）	講義・演習	症例を通し評価法を習得する
8	プレゼンテーション①（テーマの決定）	講義・演習	グループで協力して課題に取り組む ※パソコンの準備
9	プレゼンテーション②（資料の作成）	講義・演習	グループで協力して課題に取り組む ※パソコンの準備
10	プレゼンテーション③（資料の作成）	講義・演習	グループで協力して課題に取り組む ※パソコンの準備
11	プレゼンテーション④（発表）	講義・演習	グループで協力して課題に取り組む ※パソコンの準備
12	評価①（アセスメント）	講義・演習	評価の実際を学び、自身の状態を知る
13	評価②（実技）	講義・演習	評価の実際を学び、自身の状態を知る ※動きやすい服装
14	栄養の役割	講義・演習	臨床実習をふりかえり、栄養学的視点からリハビリテーションを捉える
15	理解度の確認・まとめ	筆記試験	

■受講上の注意

※授業活動の状況により，上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

・授業態度等（10%）、グループワーク（30%）、単位認定試験（60%）。
・総合的に判断し，60点/100点以上を合格とする。

■テキスト参考書など

・適宜、資料を配布する
・若林秀隆：PT・OT・STのためのリハビリテーション栄養基礎からリハ栄養ケアプロセスまで　第3版，医歯薬出版

■備考

配布資料やテキストを整理し，臨床現場で活かせる資料となるように各自工夫をしてください。

■実務経験

医科学歯科学総論

講師:桑木 共之

単位数:2単位　時間数:45時間　授業学年:3学年

必修選択:必修

■科目目標

生理学と解剖学の基礎を押さえた上で病態を学ぶことにより、原理原則の理解を元に個別の臨床問題の解決に応用できるような地頭を育てる

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	オリエンテーション:自己紹介と授業の進め方、学習の意義	講義	
2	STと医歯学との関係	講義	
3	生命維持、バイタルサイン	講義	
4	医用工学－1　観察する	講義	
5	医用工学－2　働きかける	講義	
6	頭頚部と呼吸器の解剖と病態生理－1　上気道	講義	
7	頭頸部と呼吸器の解剖と病態生理－2　下気道	講義	
8	頭頸部と呼吸器の解剖と病態生理－3　酸素運搬	講義	
9	頭頸部と呼吸器の解剖と病態生理－4　二酸化炭素	講義	
10	頭頸部と呼吸器の解剖と病態生理－5　睡眠と呼吸調節	講義	
11	頭頸部と呼吸器の解剖と病態生理－6　咀嚼、嚥下と発声	講義	
12	頭頸部と呼吸器の解剖と病態生理－7　特殊環境、脳死判定	講義	
13	体温−1　熱射病	講義	
14	体温−2　低体温症	講義	
15	中間試験	講義	
16	成長、生殖と老化−1　性と生殖	講義	
17	成長、生殖と老化−2　発生・成長と老化	講義	
18	心と身体の健康とその破綻−1　自律神経・内分泌系による身体の調節	講義	
19	心と身体の健康とその破綻−2　脳の構造と精神機能	講義	
20	心と身体の健康とその破綻−3　心と身体の結びつき	講義	
21	心と身体の健康とその破綻−4　ストレス	講義	
22	心と身体の健康とその破綻−5　ハピネス	講義	
23	期末試験	講義	

■受講上の注意

1年次の解剖学、生理学で使用したテキストを復習しておく事。

■成績評価の方法

中間試験（40点満点）、期末試験（60点満点）の合計で60点以上を合格とする

■テキスト参考書など

資料は講義の際に配布する

■備考

看護学

講師：濱川 孝二

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

医療現場における看護師の役割を学び、自分自身が言語聴覚士として、チーム医療の推進のため、どのように連携や協働ができるか考えることができる

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	看護の概念、本質を多様の定義を通して学ぶ	講義、GW	看護についての自己のイメージや考えを述べる
2	健康の概念を通して、人間における健康の意義について理解できる	講義、DVD、GW	看護の目的である健康とは何かについて討議し、健康の意義について考える
3	看護の機能と役割について理解する	講義、DVD、GW	看護師の業務について学び、対象への主な関わりについて考える
4	看護における倫理的行動について理解できる	講義、GW	事例検討において、看護現場における倫理的配慮について考える
5	チーム医療における看護師の役割について考えることができる	講義、GW	事例を通して、チーム医療の必要性について考える
6	看護の実践方法について理解できる（バイタルサイン測定法・吸引法・フィジカルアセスメント他）	講義、演習	看護の実践方法について学び、自己の実践力の向上に努める
7	看護の実践方法について理解できる（バイタルサイン測定法・吸引法・フィジカルアセスメント他）	講義、演習	看護の実践方法について学び、自己の実践力の向上に努める
8	終講試験・まとめ	試験	

■受講上の注意

看護の内容や役割について理解を深める科目です。自己の目指す職業との比較をしながら考えて、理解を深めてください。

■成績評価の方法

筆記試験　90点
平常点　10点（出席状況・授業態度など）

■テキスト参考書など

参考：看護学概論　医学書院　看護倫理　学研
DVD：生まれてくれてありがとう　メディアパーク

■備考

講義資料については、適宜配布する

■実務経験

本科目は、看護師として実務経験のある教員による授業である

運動療法

講師：小牧 祥太郎

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

運動を行うことによりどの様な生体反応が得られるのかを理解し、運動療法の理論的背景と実施方法について学び、個々に合わせた介助方法を習得することを目標とする。また、構音・嚥下障害といった運動障害に起因する言語聴覚障害の治療に繋がる運動療法について理解を深める。障害背景に応じた運動療法を選択できるようになる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	運動療法を学ぶ意義を理解する。 身体の名称と筋肉の名称を復習する。	講義・演習	特になし
2	筋肉の活動と筋緊張について理解を深める。 運動学的用語を理解する。	講義・演習	特になし
3	運動における支持基底面について理解する。	講義・演習	動きやすい服装を準備する事。
4	車椅子での移乗動作の解除について理解する。	演習	動きやすい服装を準備する事。
5	背臥位における姿勢調整法を学ぶ。	演習	動きやすい服装を準備する事。
6	口腔構音器官に対する徒手的介入法を学ぶ。	演習	Dysarthria・嚥下障害の復習をしておくこと。
7	障害背景に応じた運動療法の選択を学ぶ。 （主に画像を参照しながら）	講義・演習	病気が見える vol.7 第2版を持ってくること。
8	試験・解説（あるいはまとめ）	試験・講義	

■受講上の注意

人体の骨・筋肉について復習をしておくこと。基本的に実技形式で実施する事が多いため、動きやすい服装を忘れないこと。

■成績評価の方法

単位認定試験（100%）において60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

適宜、資料を配布
病気が見える vol.7 第2版　発行：メディックメディア

■備考

特になし

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

発達心理演習

講師：島 義弘

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

人の発達が生涯を通して続くという近年の視点から見れば，出生から死までを発達プロセスとしてとらえ，発達段階ごとの特徴や課題について学ぶことは，ヒューマンサービスを職業とする専門職にとって意義あることであろう。本授業では，LTD（話し合いによる学習）法を取り入れ，青年期以降の発達および発達の課題について学ぶだけでなく，話し合いを通して，コミュニケーションスキルを身につけることも目標として位置づける。

■科目内容

1	オリエンテーション：授業の進め方とLTD学習について	講義・討論 該当箇所の復習（教科書）
2	発達心理学とは？	講義・討論 該当箇所の予習・復習（教科書）
3	社会性はいつから？	講義・討論 該当箇所の予習・復習（教科書）
4	友だちはいつからできるの？	講義・討論 該当箇所の予習・復習（教科書）
5	なぜ「イヤ」って言いだすの？	講義・討論 該当箇所の予習・復習（教科書）
6	なぜ「どうして」と言いたがるの？	講義・討論 該当箇所の予習・復習（教科書）
7	やる気はどのように育つのか？	講義・討論 該当箇所の予習・復習（教科書）
8	思いやる心はどこからか？	講義・討論 該当箇所の予習・復習（教科書）
9	「わからないことがわかる」とは？	講義・討論 該当箇所の予習・復習（教科書）
10	「自分」とは何か？	講義・討論 該当箇所の予習・復習（教科書）
11	友人関係に悩むのはじぶんだけ？	講義・討論 該当箇所の予習・復習（教科書）
12	親子関係はどうあるべき？	講義・討論 該当箇所の予習・復習（教科書）
13	男と女は違うの？	講義・討論 該当箇所の予習・復習（教科書）
14	長生きするのは幸せですか？	講義・討論 該当箇所の予習・復習（教科書）
15	気になる子どもとは？	講義・討論 該当箇所の予習・復習（教科書）

■受講上の注意

予習，ディスカッション，復習の内容をノートにまとめること。授業はディスカッションを中心に行うので，積極的に参加すること。予習の際には，教科書を読むだけでなく，読んで分からないことを自分で調べるよう，努めること。

■成績評価の方法

授業（ディスカッション）への参加状況（30%）と予習・復習ノート（70%）で評価する。

■テキスト参考書など

『ひと目でわかる発達－誕生から高齢期までの生涯発達心理学－』渡辺弥生・西野泰代（続著）福村出版

■備考

LTD学習：課題文を深く読み解くことを目標にする学習法。単に正確に読むだけでなく，読解した内容を自分の知識や生活，社会に関する内容と結び付けて読んでいくこと。また，その過程で批判的な思考力や自己学習能力の育成を目指す。

カウンセリング論

講師：岩元 正知

単位数：1単位	時間数：30時間	授業学年：3学年
必修選択：必修		

■科目目標

実践的な体験型講義を通して、言語および非言語コミュニケーションや心理カウンセリングにおける言葉の使い方、ねぎらいやユーモラスな分脈の大切さなど、援助を必要とされるクライエントに対するカウンセリング法を学ぶことができる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「心身一如」。心の状態が身体の反応と相互に作用していることを理解することができる。	講義・GW	二人一組になっての体験学習を予定している。積極的に参加することが望ましい。
2	コミュニケーション体験型講義を通して、信頼の架け橋となる「ラポール」を体感することができる。	講義・GW	二人一組になっての体験学習が中心。積極的にすべてのワークを体験することが望ましい。
3	言葉の遅れのある自閉症児に対する療育スキル（ABA）を、映像を通して学ぶことができる。	講義・DVD	課題レポートの提出。
4	NLPカウンセリング体験。実際にカウンセラー及びクライエントの体験することができる。	講義・GW	二人一組になってのカウンセリング体験。第二講で学んだ「ラポール・テクニック」を意識しながらカウンセリングすることが望ましい。
5	「コーチング」について理解することができる。同時にNLPコーチングを体験することもできる。	講義・GW	「コーチング」についての学びを通して、STとしてのコーチングの意義を考えてみる。その上で、二人一組になって「NLPコーチング」を体験する。
6	VAKテストを通して、自分の優位な「利き感覚」を理解することができる。	講義	講義中、「VAKテスト」を実施。これはあくまで、自分の「利き感覚」を理解するためのテスト。楽しみながら受験して欲しい。
7	12問の質問を通して、客観的に「本当の自分」について理解を深めることができる。	講義	課題レポートの提出。
8	「アイパターン」と呼ばれる目の動きと内的表象との法則について理解することができる。	講義・GW	二人一組になって、相手に質問し、その時の目の動きを観察しながら、その人の心を読み取る体験をする。
9	「出生順位」によって考え方や行動、人間関係の持ち方に影響が及んでいる可能性について理解することができる。	講義	楽しみながら「出生順位」に関する質問に答えて欲しい。
10	「自閉スペクトラム症」について映像を通して理解することができる。	講義・DVD	課題レポートの提出
11	9問の質問を通して、感情を揺さぶり、または、行動を制限させる自らの「トラウマ」について理解を深めることができる。	講義・GW	二人一組になってのカウンセリング体験。
12	「文章完成療法」を体験し、心（潜在意識）の中にある気付いていない自分を理解することができる。	講義・GW	二人一組になって「文章完成療法」によるカウンセリング体験。
13	過去に体験したポジティブな想い出と、身体の刺激を一致させる「条件付け（アンカーリング）」を体験することができる。	講義・GW	二人一組になって「アンカーリング・テクニック」を体験。
14	グループの中で、自分の役割が周囲に対し、どのように影響するのか･･･について理解を深めることができる。	講義・GW	五人程度のグループによるコミュニケーショントレーニング体験。積極的に参加することが望ましい。
15	終講試験およびまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

居眠りはしないこと。時間は守ること。離席する場合には必ず伝えること。すべての質問にチャレンジすること（考えてみること）。主体的に講義に臨むこと。

■成績評価の方法

試験（60%）授業中のレポート（20%）授業への参加態度（20%）により相互的に評価する。

■テキスト参考書など

テキストは無し。

■備考

毎回、講義資料を配付する。

■実務経験

本科目は、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

心理測定法

講師：岩元 正知

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

本講義は次の2点についての学びを目的とする。
1. 心はどのように測定することができるか、心理測定法の基礎的知識について理解できる。
2. 言語聴覚士国家試験における心理測定法の過去出題範囲についてマスターできる。
人の心の状態や行動の特性などを解明するために行われる測定を「心理測定」と呼ぶ。「心理測定」は、広い意味では精神測定（一般知能の測定など）とほぼ同じ意味で用いられている。ここには、例えば、感覚・知覚で閾値を測定する「精神物理学的測定法」や、能力・性格などの研究領域での「テスト理論」、好みや社会的態度などの研究における評定法、尺度構成法など、様々な測定法がある。今回、受講生となる皆さんは、2年次に「統計学」を履修済みと伺っている。「心理測定」では、対象となる人の心の状態や行動の特性

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	「統計学」に親しみや興味をもってもらうことができる。	講義	誕生日から性格を割り出す「統計心理学」を実施。
2	「社会調査」や「質問紙法」について理解できる。	講義	
3	統計学の基礎用語について理解できる。	講義	2年次までに学んだ「統計学」の基礎用語（平均値・中央値・最頻値など）を復習しておくことが望ましい。
4	「分散」や「標準偏差」について知識として理解できる。	講義	2年次までに学んだ「統計学」の「分散」や「標準偏差」について復習しておくことが望ましい。
5	「尺度」についての知識及び国試の解き方を理解できる。	講義	2年次までに学んだ「統計学」の「尺度（名義尺度、順序尺度、間隔尺度、比率尺度）」について復習しておくことが望ましい
6	「カイ2乗検定」についての知識および国試出題パターンを理解できる。	講義	第5講の「尺度」に関する小テスト実施。
7	「相関係数」および「クロス分析」についての知識および国試出題パターンを理解できる。	講義	前講までの「統計学」の用語についての復習が望ましい。
8	「仮説検定」「F検定」「t検定」についての知識および国試出題パターンを理解できる。	講義	前講までの「統計学」の用語についての復習が望ましい。
9	「精神物理学的測定法」についての知識および国試の解き方を理解できる。	講義	「調整法」「恒常法」「極限法」など本講での学びを復習すること。次回、小テスト実施予定。
10	「尺度構成法」についての知識および国試の解き方を理解できる。	講義	小テストの実施。
11	「単一事例研究法」についての知識および国試の出題パターンを理解できる。	講義	
12	「信号検出理論」および「多次元尺度構成法」についての知識および国試出題パターンを理解できる。	講義	記憶の再認課題を実施。
13	「信頼性」「妥当性」についての知識および国試出題パターンを理解できる。	講義	
14	「多変量解析」についての知識および国試出題パターンを理解できる。	講義	LETS-2（leeの恋愛色彩理論テスト）実施。
15	終講試験およびまとめ	筆記試験	

■受講上の注意

居眠りはしないこと。時間は守ること。離席する場合には必ず伝えること。すべての質問にチャレンジすること（考えてみること）。主体的に講義に臨むこと。

■成績評価の方法

試験（70%）授業中のレポート（20%）授業への参加態度（10%）により相互的に評価する。

■テキスト参考書など

テキストは無し。

■備考

毎回、講義資料を配付する。

■実務経験

本科目は、公認心理師として実務経験のある教員による授業である。

社会保障制度・関係法規

講師：下村 孝子

単位数：1単位　時間数：15時間　授業学年：4学年

必修選択：必修

■科目目標

社会福祉、社会保障制度について体系的に 学習し、その内容を理解することができる。臨床現場（実習を含め）で、クライエントの11用可能な社会資源について、具体的にイメージできる能力を養い、制度を活かす方法を検討することができる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	社会保障制度の概念を理解できる	講義	小テストの実施
2	社会保障の体系・内容を理解できる	講義	小テストの実施
3	少子高齢化の現状を理解し、関連する制度の内容を理解する	講義	小テストの実施
4	社会福祉法の内容を理解する	講義	小テストの実施
5	福祉6法の内容を理解する	講義	小テストの実施
6	障害者福祉に関連する法律の内容を理解する	講義	小テストの実施
7	社会福祉援助技術、ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ概論を理解する	講義	小テストの実施
8	まとめ・試験		前回までの内容を復習する

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番を変更する場合もある。

■成績評価の方法

筆記試験（100%）

■テキスト参考書など

資料を配布

■備考

■実務経験

本科目は、社会保険労務士として実務経験のある教員による授業である。

言語聴覚障害診断学

講師：高吉 進

単位数：1単位　時間数：15時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

言語聴覚士は、専門的な相談治療を求めてきた人との最初の面接を通し、主訴や言語障害の種類や程度、関連する諸問題を素早く把握しなければならない。
本科目は、評価・診断に関わる知識を得て、実際の評価診断の流れを理解することを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語聴覚障害の評価・診断の概要	講義	1年次に学んだ言語聴覚障害総論を復習しておくこと
2	STADの概要・実施手順	講義・TBL	STADのマニュアルを予習する
3	STADの実践	実技	STADのマニュアルを復習する
4	小児領域のスクリーニング検査	講義・TBL	小児領域の言語聴覚療法を復習する
5	スクリーニング検査の作成	TBL	これまでの講義を復習する
6	スクリーニング検査の作成	TBL	これまでの講義を復習する
7	スクリーニング検査のまとめ	TBL	これまでの講義を復習する
8	単位認定試験・解説	試験・講義	これまでの講義を復習する

■受講上の注意

ディスカッションを主体とした講義となるため、積極的な参加を期待する。

■成績評価の方法

筆記試験100%で60%以上を合格とする

■テキスト参考書など

資料配付
言語聴覚療法技術ガイド，文光堂　言語聴覚士テキスト第2版，医歯薬出版

■備考

PBL: Problem Based Learning(問題発見解決型学習)
TBL: Team Based Learning（チーム基盤型学習）

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である

言語聴覚障害診断学演習

講師：高吉 進、福元 恵美

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

言語聴覚士は、専門的な相談治療を求めてきた人との最初の面接を通し、主訴や言語障害の種類や程度、関連する諸問題を素早く把握しなければならない。
本科目は診断学で得た知識と実際の演習をとおし、実際の評価および診断ができるようになることを目標とする。

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	スクリーニング検査の実践①	実技	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
2	評価結果のまとめ・解説	TBL	必要な参考・引用文献を準備すること
3	スクリーニング検査の実践②	実技	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
4	評価結果のまとめ・解説	TBL	必要な参考・引用文献を準備すること
5	スクリーニング検査の実践③	実技	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
6	評価結果のまとめ・解説	TBL	必要な参考・引用文献を準備すること
7	スクリーニング検査の実践④	実技	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
8	評価結果のまとめ・解説	TBL	必要な参考・引用文献を準備すること
9	言語機能検査の実践	実技	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
10	評価結果のまとめ・解説	TBL	必要な参考・引用文献を準備すること
11	認知機能検査の実践	実技	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
12	評価結果のまとめ・解説	TBL	必要な参考・引用文献を準備すること
13	各種検査の実践	実技	白衣にて受講・スクリーニング検査の準備すること
14	評価結果のまとめ・解説	TBL	参考・引用文献を準備すること
15	単位認定試験・解説	試験・講義	講義1～14を復習する

■受講上の注意

白衣にて受講すること。身だしなみに注意すること。実技試験においては、学園外の方々が来校される場合もある。個人情報保護の遵守および失礼の無いようにすること。

■成績評価の方法

実技試験50点、筆記試験50点、計100点で60点以上を合格とする

■テキスト参考書など

■備考

TBL: Team Based Learning（チーム基盤型学習）

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語聴覚障害学特論Ⅰ

講師：専任教員

単位数：3単位　時間数：90時間　授業学年：4学年

必修選択：必修

■科目目標

言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識について知識と理解を深め、4年間の集大成につなげる。本科目は卒業後の言語聴覚士としての活動に向けた基礎知識の整理、確認を目標としており、実際にこれまでに履修した各科目の資料・ノート、また言語聴覚士学生を対象とした総合的な教科書が重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。なお、本科目の単位認定試験は卒業試験として位置付ける。単位未修得者は卒業資格が与えられない事もある。

■科目内容

1	基礎医学分野の知識を再確認する（医学総論・解剖学・生理学）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
2	基礎医学分野の知識を再確認する（医学総論・解剖学・生理学）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
3	基礎医学分野の知識を再確認する（医学総論・解剖学・生理学）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
4	基礎医学分野の知識を再確認する（病理学・内科学・小児科学）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
5	基礎医学分野の知識を再確認する（病理学・内科学・小児科学）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
6	基礎医学分野の知識を再確認する（病理学・内科学・小児科学）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
7	基礎医学分野の知識を再確認する（精神医学・リハビリテーション医学・耳鼻科）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
8	基礎医学分野の知識を再確認する（精神医学・リハビリテーション医学・耳鼻科）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
9	基礎医学分野の知識を再確認する（精神医学・リハビリテーション医学・耳鼻科）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
10	基礎医学分野の知識を再確認する（臨床神経・形成外科・歯科）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
11	基礎医学分野の知識を再確認する（臨床神経・形成外科・歯科）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
12	基礎医学分野の知識を再確認する（臨床神経・形成外科・歯科）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
13	基礎医学分野の知識を再確認する（口腔外科・呼吸発声発語系）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
14	基礎医学分野の知識を再確認する（口腔外科・呼吸発声発語系）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
15	基礎医学分野の知識を再確認する（口腔外科・呼吸発声発語系）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
16	基礎医学分野の知識を再確認する （聴覚系の構造・機能・病態・神経系の構造・機能・病態）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
17	基礎医学分野の知識を再確認する （聴覚系の構造・機能・病態・神経系の構造・機能・病態）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
18	基礎医学分野の知識を再確認する （聴覚系の構造・機能・病態・神経系の構造・機能・病態）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
19	心理学分野の知識を再確認する（認知・学習心理）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
20	心理学分野の知識を再確認する（認知・学習心理）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
21	心理学分野の知識を再確認する（認知・学習心理）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う

22	心理学分野の知識を再確認する(心理測定法)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
23	心理学分野の知識を再確認する(心理測定法)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
24	心理学分野の知識を再確認する(心理測定法)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
25	心理学分野の知識を再確認する(臨床心理)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
26	心理学分野の知識を再確認する(臨床心理)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
27	心理学分野の知識を再確認する(臨床心理)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
28	心理学分野の知識を再確認する(生涯発達心理)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
29	心理学分野の知識を再確認する(生涯発達心理)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
30	心理学分野の知識を再確認する(生涯発達心理)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
31	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(音声学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
32	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(音声学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
33	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(音声学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
34	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(音響学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
35	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(音響学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
36	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(音響学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
37	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(聴覚心理)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
38	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(聴覚心理)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
39	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(聴覚心理)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
40	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(言語学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
41	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(言語学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
42	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(言語学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
43	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(言語学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
44	音声・言語・聴覚医学分野の知識を再確認する(言語学)	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
45	単位認定試験　解説	講義	

■受講上の注意

科目内容の修得状況によって、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

本科目の単位認定試験は卒業試験とする。試験において正答率60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

独自の資料

言語聴覚療法技術ガイド, 文光堂　　言語聴覚士テキスト第2版, 医歯薬出版

■備考

科目内容の分野により、これまでの講義で使用したテキストを持参する。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語聴覚障害学特論Ⅱ

講師：専任教員

単位数：3単位	時間数：90時間	授業学年：4学年
必修選択：必修		

■科目目標

言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識について知識と理解を深め、4年間の集大成につなげる。本科目は卒業後の言語聴覚士としての活動に向けた基礎知識の整理、確認を目標としており、実際にこれまでに履修した各科目の資料・ノート、また言語聴覚士学生を対象とした総合的な教科書が重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。なお、本科目の単位認定試験は卒業試験として位置付ける。単位未修得者は卒業資格が与えられない事もある。

■科目内容

1	社会福祉・教育分野の再確認をする（社会保障制度）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
2	社会福祉・教育分野の再確認をする（社会保障制度）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
3	社会福祉・教育分野の再確認をする（社会保障制度）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
4	社会福祉・教育分野の再確認をする（リハビリテーション概論）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
5	社会福祉・教育分野の再確認をする（リハビリテーション概論）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
6	社会福祉・教育分野の再確認をする（リハビリテーション概論）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
7	社会福祉・教育分野の再確認をする（医療福祉教育・関係法規）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
8	社会福祉・教育分野の再確認をする（医療福祉教育・関係法規）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
9	社会福祉・教育分野の再確認をする（医療福祉教育・関係法規）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
10	言語聴覚障害学総論分野の再確認をする（言語聴覚障害学総論）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
11	言語聴覚障害学総論分野の再確認をする（言語聴覚障害学総論）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
12	言語聴覚障害学総論分野の再確認をする（言語聴覚障害学総論）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
13	言語聴覚障害学総論分野の再確認をする（言語聴覚障害診断学）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
14	言語聴覚障害学総論分野の再確認をする（言語聴覚障害診断学）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
15	言語聴覚障害学総論分野の再確認をする（言語聴覚障害診断学）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
16	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症①）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
17	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症①）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
18	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症①）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
19	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症②）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
20	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症②）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
21	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症②）	講義、GW	グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う

22	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症③）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
23	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症③）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
24	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症③）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
25	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症④）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
26	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症④）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
27	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症④）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
28	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症⑤）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
29	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症⑤）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
30	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（失語症⑤）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
31	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害①）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
32	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害①）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
33	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害①）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
34	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害②）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
35	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害②）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
36	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害②）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
37	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害③）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
38	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害③）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
39	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害③）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
40	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害④）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
41	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害④）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
42	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害④）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
43	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害④）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
44	失語症・高次脳機能障害学分野の再確認をする（高次脳機能障害④）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
45	単位認定試験　解説	講義

■受講上の注意

科目内容の修得状況によって、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

本科目の単位認定試験は卒業試験とする。試験において正答率60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

独自の資料

言語聴覚療法技術ガイド, 文光堂　　言語聴覚士テキスト第2版, 医歯薬出版

■備考

科目内容の分野により、これまでの講義で使用したテキストを持参する。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語聴覚障害学特論Ⅲ

講師：専任教員

単位数：3単位	時間数：90時間	授業学年：4学年
必修選択：必修		

■科目目標

言語聴覚士にとって必須の基礎・専門知識について知識と理解を深め、4年間の集大成につなげる。本科目は卒業後の言語聴覚士としての活動に向けた基礎知識の整理、確認を目標としており、実際にこれまでに履修した各科目の資料・ノート、また言語聴覚士学生を対象とした総合的な教科書が重要な資料となる。これらをベースに個別学習、グループ学習等、適宜形態を用いて講義を進めていく。なお、本科目の単位認定試験は卒業試験として位置付ける。単位未修得者は卒業資格が与えられない事もある。

■科目内容

1	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
2	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
3	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
4	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
5	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
6	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
7	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
8	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
9	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
10	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
11	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
12	言語発達障害学分野の再確認をする（言語発達障害学）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
13	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（音声障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
14	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（音声障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
15	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（音声障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
16	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（構音障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
17	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（構音障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
18	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（構音障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
19	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（嚥下障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
20	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（嚥下障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
21	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（嚥下障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う

22	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（吃音）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
23	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（吃音）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
24	発声発語・嚥下障害学分野の再確認をする（吃音）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
25	聴覚障害学分野の再確認をする（小児聴覚障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
26	聴覚障害学分野の再確認をする（小児聴覚障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
27	聴覚障害学分野の再確認をする（小児聴覚障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
28	聴覚障害学分野の再確認をする（成人聴覚障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
29	聴覚障害学分野の再確認をする（成人聴覚障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
30	聴覚障害学分野の再確認をする（成人聴覚障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
31	聴覚障害学分野の再確認をする（補聴器・人工内耳）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
32	聴覚障害学分野の再確認をする（補聴器・人工内耳）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
33	聴覚障害学分野の再確認をする（補聴器・人工内耳）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
34	聴覚障害学分野の再確認をする（視覚聴覚二重障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
35	聴覚障害学分野の再確認をする（視覚聴覚二重障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
36	聴覚障害学分野の再確認をする（視覚聴覚二重障害）	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
37	総まとめ	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
38	総まとめ	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
39	総まとめ	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
40	総まとめ	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
41	総まとめ	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
42	総まとめ	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
43	総まとめ	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
44	総まとめ	講義、GW グループワークと個別学習を適宜切り替えて行う
45	単位認定試験　解説	講義

■受講上の注意

科目内容の修得状況によって、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

本科目の単位認定試験は卒業試験とする。試験において正答率60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

独自の資料
言語聴覚療法技術ガイド, 文光堂　　言語聴覚士テキスト第2版, 医歯薬出版

■備考

科目内容の分野により、これまでの講義で使用したテキストを持参する。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語聴覚総合演習

講師：専任教員

単位数：3単位　時間数：90時間　授業学年：4学年

必修選択：必修

■科目目標

本講義は、総合演習として1年次より学んだ基礎科目および専門科目を基礎として、様々な言語聴覚障害に関わる演習をおこない、言語聴覚療法の総合的な理解を得ることを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	聴覚障害・補聴器ディスカッション	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
2	聴覚障害・補聴器ディスカッション	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
3	聴覚障害・補聴器ディスカッション	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
4	聴覚障害まとめ	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
5	聴覚障害まとめ	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
6	聴覚障害まとめ	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
7	失語症まとめ	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
8	失語症まとめ	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
9	失語症まとめ	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
10	高次脳機能障害まとめ	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
11	高次脳機能障害まとめ	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
12	高次脳機能障害まとめ	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
13	グループディスカッション1（聴覚障害分野）	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
14	グループディスカッション1（聴覚障害分野）	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
15	グループディスカッション1（聴覚障害分野）	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
16	グループディスカッション2（失語症・高次脳機能障害）	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
17	グループディスカッション2（失語症・高次脳機能障害）	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
18	グループディスカッション2（失語症・高次脳機能障害）	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
19	小児疾患と障害のまとめ1	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
20	小児疾患と障害のまとめ1	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う
21	小児疾患と障害のまとめ1	GW、演習	グループワークと演習を適宜切り替えて行う

22	小児疾患と障害のまとめ2	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
23	小児疾患と障害のまとめ2	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
24	小児疾患と障害のまとめ2	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
25	グループディスカッション3（小児疾患）	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
26	グループディスカッション3（小児疾患）	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
27	グループディスカッション3（小児疾患）	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
28	グループディスカッション4（小児リハビリテーション）	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
29	グループディスカッション4（小児リハビリテーション）	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
30	グループディスカッション4（小児リハビリテーション）	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
31	聴覚心理学・音響学まとめ	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
32	聴覚心理学・音響学まとめ	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
33	聴覚心理学・音響学まとめ	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
34	グループディスカッション5（聴覚心理学・音響学）	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
35	グループディスカッション5（聴覚心理学・音響学）	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
36	グループディスカッション5（聴覚心理学・音響学）	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
37	構音障害・嚥下障害まとめ	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
38	構音障害・嚥下障害まとめ	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
39	構音障害・嚥下障害まとめ	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
40	グループディスカッション6（構音障害・嚥下障害）	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
41	グループディスカッション6（構音障害・嚥下障害）	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
42	グループディスカッション6（構音障害・嚥下障害）	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
43	グループディスカッション6（構音障害・嚥下障害）	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
44	グループディスカッション6（構音障害・嚥下障害）	GW、演習 グループワークと演習を適宜切り替えて行う
45	単位認定試験　解説	

■受講上の注意

科目内容の修得状況によって、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

総合試験を行い、60％以上の正答率を合格とする。

■テキスト参考書など

資料配布
言語聴覚療法技術ガイド, 文光堂　　言語聴覚士テキスト第2版, 医歯薬出版

■備考

科目内容の分野により、これまでの講義で使用したテキストを持参する。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

本科目は、各品聡見上として実務経験のある教員による授業である。

失語症学演習Ⅱ

講師：高吉 進、有川 瑛人

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

・失語症訓練のための必要な基本的臨床技能を身に付ける。
・病期に応じた訓練の計画・実施ができる。
・的確な報告書を作成できる。

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	言語治療の原則	講義・TBL	テキスト①p204～208を予習する
2	各期の言語治療	講義・TBL	テキスト①p208～214を予習する
3	症例検討①	講義・TBL	失語症の評価・訓練を復習する
4	症例検討②	講義・TBL	失語症の評価・訓練を復習する
5	症例検討③	講義・TBL	失語症の評価・訓練を復習する
6	症例検討④	講義・TBL	失語症の評価・訓練を復習する
7	症例検討⑤	講義・TBL	失語症の評価・訓練を復習する
8	症例検討⑥	講義・TBL	失語症の評価・訓練を復習する
9	失語症の言語訓練（刺激法）	講義・TBL	テキスト①p215～216を予習する
10	失語症の言語訓練（機能再編成法）	講義・TBL	テキスト①p217～218を予習する
11	失語症の言語訓練（遮断除去法）	講義・TBL	テキスト①p218～219を予習する
12	失語症の言語訓練（認知神経心理学的アプローチ）	講義・TBL	テキスト①p219～224を予習する
13	言語訓練のまとめ①	講義・TBL	訓練法を復習する
14	言語訓練のまとめ②	講義・TBL	訓練法を復習する
15	単位認定試験・解説	試験・講義	講義1～14を復習する

■受講上の注意

各講義のねらいに従って、予習・復習をする。

■成績評価の方法

筆記試験100%で60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

本講義で使用するテキスト①藤田郁代，立石雅子 編集『失語症学』（医学書院）

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

高次脳機能障害学演習 Ⅰ

講師：高吉 進

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

・代表的な神経心理学検査の理論や手続きを習得し、実施（考察を含む）が可能になる。

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	MMSE、HDS-Rの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
2	日本版レーヴン色彩マトリックス、コース立方体組み合わせテストの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
3	WAIS-Ⅳの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
4	WAIS-Ⅳの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
5	WAIS-Ⅳの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
6	WAIS-Ⅳの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
7	WMS-Rの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
8	WMS-Rの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
9	CATの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
10	CATの概要・手順	TBL	検査マニュアルを予習する
11	検査演習①	実技	検査マニュアルを復習する
12	検査演習②	実技	検査マニュアルを復習する
13	検査演習③	実技	検査マニュアルを復習する
14	検査演習④	実技	検査マニュアルを復習する
15	単位認定試験・解説	試験・講義	これまでの講義を復習する

■受講上の注意

各講義のねらいに従い、予習・復習をする。

■成績評価の方法

実技20%、筆記試験80%、計100%で60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

各種検査マニュアル

■備考

TBL: Team Based Learning（チーム基盤型学習）

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

高次脳機能障害学演習Ⅱ

講師：高吉 進

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

・高次脳機能障害学に関する論文を抄読し、臨床現場に活かせる知識や応用力を習得する。
・学会形式でポスター発表ができる。
・高次脳機能における研究法およびその進め方について理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	論文抄読	TBL	論文を予習する
2	論文抄読	TBL	論文を予習する
3	論文抄読	TBL	論文を予習する
4	論文抄読	TBL	論文を予習する
5	ポスター作製①	TBL	ポスター作成に必要な資料（論文・教科書）を持参する
6	ポスター作成②	TBL	ポスター作成に必要な資料（論文・教科書）を持参する
7	ポスター作成③	TBL	ポスター作製に必要な資料（論文・教科書）を持参する
8	ポスター作成④	TBL	ポスター作成に必要な資料（論文・教科書）を持参する
9	ポスター発表①	TBL	ポスター作成に必要な資料（論文・教科書）を持参する
10	ポスター発表②	TBL	ポスター作成に必要な資料（論文・教科書）を持参する
11	症例演習①	TBL	これまでの講義を復習する
12	症例演習②	TBL	これまでの講義を復習する
13	症例演習③	TBL	これまでの講義を復習する
14	症例演習④	TBL	これまでの講義を復習する
15	単位認定試験・解説	試験・講義	講義1～14を復習する

■受講上の注意

各講義のねらいに従い、予習・復習をする。

■成績評価の方法

ポスター発表20%、筆記試験80%、計100%で60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語発達障害学Ⅲ

講師：雲井 未歓

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

概要：評価治療を行うための基礎知識とアプローチについて学ぶ。特に学習認知心理学・発達心理学の知識を踏まえた上で、言語発達支援に必要な考え方を理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	臨床家として大切にしたいこと、学びの目的・意義について	講義	言語発達障害Ⅱの復習
2	障害概念の共通理解	講義	言語発達障害Ⅱの復習
3	インクルーシブ時代の障害概念と特別支援教育	講義	復習
4	医学モデル・統計モデル・社会モデルと学習障害定義について	講義	予習・復習
5	学習障害概念の変遷について	講義	予習・復習
6	学習障害の臨床像と問題の切り分けを学ぶ	講義	予習・復習
7	発達性ディスレクシアの臨床像の実際について学ぶ	講義	予習・復習
8	発達性ディスレクシア以外の読字書字障害について学ぶ	講義	予習・復習
9	学習障害の診断評価	講義	予習・復習
10	読み検査の実施方法①	講義	予習・復習
11	学習障害の生理・病理的背景について学ぶ	講義	予習・復習
12	読み検査の実施方法②	講義	予習・復習
13	症例の解釈と臨床での情報収集の仕方	講義	予習・復習
14	・二次障害、合併症について学ぶ ・注意欠如/多動性障害との関連について学ぶ	講義	予習・復習
15	単位認定試験・解説	講義	予習・復習

■受講上の注意

予習・復習をしっかりと行うこと。

■成績評価の方法

評価対象：単位認定試験　評価基準：単位認定試験100%（60%/100%以上を合格とする）

■テキスト参考書など

特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン−わかりやすい診断手順と支援の実際−,診断と治療社
言語聴覚療法技術ガイド, 文光堂　言語聴覚士テキスト第2版, 医歯薬出版　その他の参考資料は随時配付する。

■備考

■実務経験

言語発達障害学Ⅳ

講師：雲井 未歓、福元 恵美

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

概要：評価治療を行うための基本的なアプローチについて学ぶ。特に学習認知心理学・発達心理学の知識を踏まえた上で、言語発達支援に必要な考え方を理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	学校での支援の考え方について学ぶ（リハビリとの違い、教育課程、自活）	講義	言語発達障害Ⅲの復習
2	大阪LDセンター方式を学ぶ	講義	復習
3	鳥取大方式を学ぶ	講義	復習
4	東京学芸大学方式を学ぶ	講義	復習
5	指導事例	講義・演習	復習
6	漢字の読み、書字の指導事例	講義・演習	復習
7	指導用教材、web教材、RTIによる支援について学ぶ	講義・演習	復習
8	これまでの講義の補足、復習	講義	復習
9	言語発達障害学Ⅰ・Ⅱの復習	講義	予習・復習
10	脳性麻痺復習、AACについて学ぶ	講義・演習	予習・復習
11	脳性麻痺児・者への支援について学ぶ	講義	予習・復習
12	自閉症スペクトラム障害児・者への支援、SSTについて学ぶ	講義・演習	予習・復習
13	行動療法、インリアルアプローチについて学ぶ	講義・演習	予習・復習
14	S-S法、太田ステージについて学ぶ	演習、講義	予習・復習
15	単位認定試験・解説	試験・講義	これまでの復習をしておく

■受講上の注意

言語発達障害学の総括。言語発達学・発達心理学・学習認知心理学の知識を復習する。

■成績評価の方法

評価対象：単位認定試験　評価基準：単位認定試験100%（60%/100%以上を合格とする）　単位認定試験60%未満で合った場合再試験を実施する。
再試験60%未満で合った場合再々試験を実施する。（再試験、再々試験ともに60%/100%以上を合格とする。）

■テキスト参考書など

特異的発達障害診断・治療のための実践ガイドライン−わかりやすい診断手順と支援の実際−,診断と治療社
言語聴覚療法技術ガイド, 文光堂　言語聴覚士テキスト第2版, 医歯薬出版　その他の参考資料は随時配付する。

■備考

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語発達障害学演習Ⅱ

講師：提 雄輝、福元 恵美

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

言語発達障害領域に関する職種間連携を学び、症例を用いて評価演習・支援計画演習を行う。
その他、各種発達検査・知能検査・認知検査また等の評価方法を学び、症例を用いて評価が行えるようになる。
視知覚認知機能について学び、ビジョントレーニングを実際に体験する。
異常構音に対する構音評価と構音訓練立案ができるようになる。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	小児に携わる職種間の連携を学ぶ。	講義	特になし
2	ケースを用いて評価を行い、問題行動や言語発達について学ぶ。①	演習	予習・復習
3	ケースを用いて評価を行い、問題行動や言語発達について学ぶ。②	演習	予習・復習
4	ケースに対する支援計画を立案できるようになる。①	演習	予習・復習
5	ケースに対する支援計画を立案できるようになる。②	演習	予習・復習
6	ケースに対する支援計画を立案できるようになる。③	演習	予習・復習
7	小児の教材作成を行う。	演習	教材作成に必要な物品の準備
8	各種発達検査について理解する。また、症例を用いて評価を行い、問題点抽出を行う。	講義・演習	講義内容を復習
9	各種知能検査について理解する。また、症例を用いて評価を行い、問題点抽出を行う。	講義・演習	講義内容を復習
10	各種認知・学習検査について理解する。また、症例を用いて評価を行い、問題点抽出を行う。	講義・演習	講義内容を復習
11	視知覚認知機能について理解する。	講義	講義内容を復習
12	ビジョントレーニングを体験する。	演習	講義内容を復習
13	異常構音の構音評価が行えるようになる。	演習	講義内容を復習
14	異常構音に対する訓練プログラム立案ができるようになる。	演習	講義内容を復習
15	単位認定試験、解説	試験、講義	これまでの復習をしておく

■受講上の注意

障害特性を十分理解して、対象となる子どものイメージができていないと難しい作業となります。言語発達障害学の復習・予習をしておくこと。

■成績評価の方法

・単位認定試験において60%/100%以上を合格とする　・単位認定試験60%未満で合った場合再試験を実施する
再試験60%未満で合った場合再々試験を実施する

■テキスト参考書など

言語聴覚療法技術ガイド, 文光堂
言語聴覚士テキスト第2版, 医歯薬出版　その他の参考資料は随時配付する

■備考

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

発声発語障害学Ⅳ

講師：小牧 祥太郎

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

コミュニケーション障害分野において、特に発現率が多いDysarthriaを対象に、基礎知識の習得、生じうる疾患を理解して、運動障害による発話の異常性について理解する。

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	Dysarthriaの病態を理解する。症例VTRよりDysarthriaの全体像について学ぶ。	講義	ディサースリア臨床標準テキストのp1-5ページを読んでおくこと。
2	Speechの仕組みの理解を深める（復習）。 Dysarthriaのタイプ分類の考え方を理解する。	講義	1学年次の発声発語障害学Ⅰの講義で行った内容の復習をしておくこと。 ディサースリア臨床標準テキストのp8-13ページを読んでおくことが望ましい。
3	上位運動ニューロン障害タイプのDysarthriaについて理解する（皮質延髄路両側性障害について）。	講義	ディサースリア臨床標準テキストのp29-32,41-43,64-65ページを読んでおくことが望ましい。
4	上位運動ニューロン障害タイプのDysarthriaについて理解する（皮質延髄路一側性障害について）。	講義	ディサースリア臨床標準テキストのp29-32,41-43,70-71ページを読んでおくこと。
5	下位運動ニューロン障害タイプによるDysarthriaについて学ぶ。	講義	ディサースリア臨床標準テキストのp33-36,49-51,57ページを読んでおくことが望ましい。
6	仮性球麻痺・球麻痺の違いについて理解する（病態・症状について）。	講義	病気が見える Vol.7 第2版（メディックメディア）のp275を読んでおくことが望ましい。
7	錐体外路障害タイプによるDysarthriaについて学ぶ。	講義	ディサースリア臨床標準テキストのp32,43-48,67-70ページを読んでおくことが望ましい。
8	小脳障害タイプによるDysarthriaについて学ぶ。	講義	ディサースリア臨床標準テキストのp32-33,48-49,65-67ページを読んでおくこと。
9	運動系多重障害タイプによるDysarthriaについて学ぶ。	講義	ディサースリア臨床標準テキストのp71-73ページを読んでおくこと。
10	Dysarthriaの発話特徴について全体像をつかむ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 講義中、適宜リスニングを実施します。
11	Dysarthriaの発話特徴についてタイプに応じた特徴をつかむ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 講義中、適宜リスニングを実施します。
12	医学的診断・発話特徴・神経学的特徴からDysarthriaを捉える。	講義・演習	ディサースリア臨床標準テキストのp11-14ページを読んでおくことが望ましい。
13	模擬症例を通して、運動障害の特徴、発話特徴などよりタイプ分類について考察する。	講義・演習	特になし。
14	Dysarthriaへのアプローチについて概要をつかむ。 Dysarthriaのタイプ別の介入方法を捉える。	講義・演習	ディサースリア臨床標準テキストのp125-127ページを読んでおくことが望ましい。 ディサースリア臨床標準テキストのp129-133ページを読んでおくことが望ましい。
15	試験・解説（あるいはまとめ）	試験・講義	

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■成績評価の方法

単位認定試験（100%）において60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

西尾正輝著「ディサースリア臨床標準テキスト」医歯薬出版株式会社　　病気が見える Vol.7　メディックメディア（特に1-9講まで）

その他、適宜資料を配布する。

■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

スピーチリハビリテーション演習Ⅱ

講師：小牧 祥太郎

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

Dysarthriaの発話特徴を理解し、標準ディサースリア検査（以下、AMSD）を通して発声発語器官評価の具体的な実施方法を学ぶ。また、治療にあたり発声発語器官への徒手的介入方法、発話の調整手法を理解する。

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	発声発語器官への評価・介入の意義について学ぶ。 Dysarthriaの障害構造に関して、発声発語障害学Ⅳで学んだ内容をもとに復習を行う。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 確認問題を実施し習熟状況の把握を行う。
2	AMSDの検査内容の構成、実施概要を学ぶ。 定性的な評価、定量的な評価の側面について理解する。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
3	AMSDを実際に行い、評価の視点と状態の解釈を行う（呼吸機能について）。	講義・演習	AMSDに必要な道具を準備すること（道具の詳細は第2講で述べる）。
4	AMSDを実際に行い、評価の視点と状態の解釈を行う（発声機能・鼻咽腔閉鎖機能について）。	講義・演習	AMSDに必要な道具を準備すること（道具の詳細は第2講で述べる）。
5	AMSDを実際に行い、評価の視点と状態の解釈を行う（口腔構音機能（運動範囲・反射の評価）について）。	講義・演習	AMSDに必要な道具を準備すること（道具の詳細は第2講で述べる）。
6	AMSDを実際に行い、評価の視点と状態の解釈を行う（口腔構音機能（交互反復・筋力）について）。	講義・演習	AMSDに必要な道具を準備すること（道具の詳細は第2講で述べる）。
7	AMSDを実際に行い、評価の視点と状態の解釈を行う（補助検査とその他の補足説明）。	講義・演習	AMSDに必要な道具を準備すること（道具の詳細は第2講で述べる）。
8	発声発語器官の徒手的治療について学ぶ（呼吸機能に対して）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 実習室にて講義を実施予定。
9	発声発語器官の徒手的治療について学ぶ（発声機能に対して）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。 実習室にて講義を実施予定。
10	発声発語器官の徒手的治療について学ぶ（鼻咽腔閉鎖機能・口腔構音機能に対して）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
11	発話速度の調整法と、訓練時の課題音（対照生成ドリルなど）の設定について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
12	模擬症例を想定し、評価視点の共有や訓練プログラムの立案についてCase Study（症例検討）を行う。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
13	模擬症例を想定し、発声発語器官検査としてAMSDの実技試験を行う。	講義・演習	AMSDに必要な物品を準備し、白衣（KC）を着用する。※物品の準備状況も実技試験の採点対象とする。
14	模擬症例を想定し、発声発語器官検査としてAMSDの実技試験を行う。 検査実施後にフィードバックを行い改善事項等の共有を行う。	講義・演習	AMSDに必要な物品を準備し、白衣（KC）を着用する。※物品の準備状況も実技試験の採点対象とする。
15	試験・解説（あるいはまとめ）	試験・講義	

■受講上の注意

授業活動の状況や実習室の利用状況に応じて、上記の内容や順番は変更する場合がある。
講義内容によっては徒手的な介入を行う為、講義前後は入念な手指の清潔管理に努めること。

■成績評価の方法

AMSD実技試験とその後のレポート　30%（実技試験25%、レポート5%）　期末の単位認定試験　70%
上記2つにおいて、60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

ディサースリア臨床標準テキスト　医歯薬出版株式会社　標準ディサースリア検査　インテルナ出版
その他、適宜資料を配布する。

■備考

特になし

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

嚥下障害学Ⅱ

講師：小牧 祥太郎

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

本講義では、嚥下造影検査、嚥下内視鏡検査を中心とする摂食・嚥下障害の各種検査法と評価法について学び、適切な治療方針を選択できるようになる事を目標とする。

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	摂食嚥下障害について復習を行う（主に嚥下時の動態について）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。2学年次の講義である「嚥下障害学Ⅰ」の内容について十分復習を行っておくこと。
2	情報収集（基本的情報・医学的情報）、嚥下器官検査（構音器官）について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
3	嚥下器官検査（音声所見）、理学的所見、神経学的所見（反射）について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
4	神経学的所見（脳神経）、簡便な検査（水飲み検査、反復唾液飲み検査など）について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
5	酸素飽和度状態の評価（パルスオキシメーター）、着色水テスト、唾液分泌検査について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
6	不顕性誤嚥を測れる検査、研究的意味合いの強い検査について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
7	嚥下造影検査の概要とその適応について、また、使用機器について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
8	嚥下造影検査装置について実際の機器の見学を行う。また、その際に造影検査のリスク等について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。診療放射線学科教員の協力のもと、嚥下造影にて使用する機器の見学を行う。
9	嚥下造影検査の読影について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
10	嚥下造影検査の異常所見とその解釈について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
11	症例ごとの嚥下造影検査の異常所見について学び、説明を実施する。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。グループに分かれてCase studyを実施予定であり、また、その検討内容についてレポートを課すことを予定している。
12	嚥下内視鏡検査を理解し、嚥下造影検査との観察項目の比較について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
13	頸部聴診法について学ぶ。 摂食嚥下障害の重症度分類について学ぶ（藤島のグレード等を参考に）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
14	摂食嚥下障害のリハビリテーションの概要について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
15	試験・解説（あるいはまとめ）	試験・講義	

■受講上の注意

授業活動の状況や実習室の利用状況に応じて、上記の内容や順番を一部変更する場合がある。

■成績評価の方法

単位認定試験（100%）において60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学　医歯薬出版株式会社
その他参考資料を随時配布する。

■備考

講義内容に応じて遠隔講義を実施する場合もある。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

嚥下障害学演習

講師：小牧 祥太郎

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

本講義では、摂食嚥下障害患者に応じた訓練方法を理解し、患者タイプ毎の訓練方法の選定と実践が行える事を目標とする。また、昨今の知見から嚥下障害患者を取り巻くチームアプローチの理解や、嚥下調整食の取り扱い、外科手術による嚥下障害の治療について学ぶ。

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	摂食嚥下障害患者への評価手順について復習を行い、訓練立案について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。3学年次の講義である「嚥下障害学Ⅱ」の内容について十分復習を行っておくこと。
2	摂食嚥下障害患者の状態に応じた適正な評価手法の選定について復習を行い、訓練立案について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。3学年次の講義である「嚥下障害学Ⅱ」の内容について十分復習を行っておくこと。
3	訓練介入における運動学習理論について学ぶ。 間接嚥下訓練について学ぶ（口腔ケア、サーマルスティミュレーション、皮膚のアイスマッサージ、嚥下体操 等）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
4	間接嚥下訓練について学ぶ(呼吸訓練、頸部の可動域訓練、頸部挙上訓練、発声訓練）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
5	間接嚥下訓練について学ぶ（鼻咽腔閉鎖機能訓練、口腔構音器官訓練、バルーン訓練、構音訓練、 電気刺激訓練）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
6	直接嚥下訓練について学ぶ（姿勢調整、環境調整、嚥下誘発訓練、K-point刺激、スライス法、息こらえ嚥下、努力嚥下、メンデルソン手技）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
7	嚥下障害における代償法について学ぶ(姿勢の調整、頭位の調整（頸部屈曲・回旋）、一側嚥下、交互嚥下、一口量の調整、複数回嚥下）	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
8	嚥下障害患者の代償法における嚥下調整食について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
9	模擬症例を用いて、食事の際の観察視点や問題点抽出を学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
10	頭頸部腫瘍により生じる嚥下障害へのリハビリ介入について理解する。 また、歯科補綴的治療、再建術について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
11	摂食嚥下障害の外科治療について学ぶ（誤嚥防止術、嚥下機能改善術）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
12	摂食嚥下障害におけるチーム医療とNST、吸引について学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
13	摂食嚥下障害患者の栄養管理について学ぶ（IVH、経管栄養について）。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。
14	摂食嚥下障害患者の模擬症例を用いて、検査～訓練介入、予後の推定といった一連の流れについて学ぶ。	講義・演習	講義とグループワークを適宜切り替えて行う。Case studyを実施予定。時間内に検討事項がまとまらない場合はレポートとして課すことも検討する。
15	試験・解説（あるいはまとめ）	試験・講義	

■受講上の注意

授業活動の状況により、上記の内容や順番を一部変更する場合もある。

■成績評価の方法

単位認定試験（100%）において60%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

言語聴覚士のための摂食・嚥下障害学　医歯薬出版株式会社
その他参考資料は随時配布を行う。

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

聴覚障害学Ⅱ

講師：上江 愛

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

聴覚障害者に対して難聴支援を行うにあたり、その対象や使用する機器は多岐にわたり、適切に使用できているか把握するための評価方法も異なる。本講義では補聴器及び人工内耳等人工聴覚器についてその目的、仕組みや特徴、調整方法、評価法などの概要について学習する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	補聴器の目的と対象（成人、小児）について	講義	講義資料を必ず持する
2	補聴器の構造と機能について	講義	補聴器の仕組みを理解する
3	補聴器の構造と機能について（2）	講義	補聴器の仕組みを理解する
4	補聴器の種類と調整について	講義	解剖学的な知識を踏まえたうえで補聴器の違いを学習する
5	補聴器の種類と調整について（2）	講義	解剖学的な知識を踏まえたうえで補聴器の違いを学習する
6	補聴器特性の測定について	講義	講義資料を必ず持する
7	補聴器適合検査と装用効果測定について	講義	講義資料を必ず持する
8	補聴器の聴覚情報保障支援システムについて	講義	人工内耳の概要を学習する
9	人工内耳の目的と対象（成人、小児）	講義	人工内耳の対象を理解する
10	人工内耳の機能と構造	講義	刺激方法などの理解を深める
11	人工内耳の種類について	講義	解剖学的な知識を踏まえたうえで各人工内耳の違いを学習する
12	人工内耳の調整について（概要）	講義	マッピング手法の違いを学習する
13	人工内耳の調整について（成人）	講義	マッピング手法の違いを学習する
14	人工内耳の調整について（小児）	講義	マッピング手法の違いを学習する
15	人工内耳の評価法について	講義	現行の標準化、非標準化の評価法について学習する
16	人工内耳の評価法について（2）	講義	現行の標準化、非標準化の評価法について学習する
17	その他人工聴覚器（BAHA、VSB、Bone Bridge）についての適応と概要	講義	解剖学的な知識を踏まえたうえで各人工聴覚器の違いを学習する
18	人工聴覚器の聴覚情報保障支援システムについて	講義	福祉・行政の支援システムについて理解する
19	試験前学習	講義	
20	試験	試験	

■受講上の注意

配布する資料等に適宜講義内容を追記してください。

■成績評価の方法

レポート30点、筆記試験70点

■テキスト参考書など

言語聴覚士テキスト（医歯薬出版株式会社）、聴覚検査の実際（日本聴覚医学会）、言語聴覚療法技術ガイド（文光堂）、その他適宜資料を配布

■備考

■実務経験

本科目は、実務経験のある言語聴覚士による授業である。

聴覚障害学Ⅲ

講師：良久 万里子、戌亥 啓一

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

・視覚聴覚二重障害者を理解し，視覚聴覚二重障害者とのコミュニケーションスキルを高める。
・視覚聴覚二重障害者の困難やニーズに対してのサポート力を高める。
・人工内耳分野に関する理解を総合的に深める。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	視覚聴覚二重障害の定義	講義	
2	視覚聴覚二重障害者のコミュニケーション手段	講義	
3	視覚聴覚二重障害者の困難とニーズ	講義	
4	視覚聴覚二重障害者の実態	講義	
5	視覚聴覚二重障害者の移動介助方法	講義	
6	視覚聴覚二重障害者の福祉サービス．関連機関との連携	講義	
7	視覚聴覚二重障害者のサポート方法・訓練	講義	
8	中間評価と説明	講義	
9	わが国の聴覚障害児教育について理解を深める	講義	時代背景の推察が重要なポイントとなる。
10	聾学校とは、その位置づけについて理解を深める	講義	地域における拠点機能に加え、教育的、社会的観点からの理解が重要である。
11	聾学校の設備や活動について理解を深める 1)	GW	教育的、社会的観点からの理解が重要である。
12	聾学校の設備や活動について理解を深める 2)	GW	教育的、社会的観点からの理解が重要である。
13	聾学校の設備や活動について理解を深める 3)	講義・演習	教育的、社会的観点からの理解が重要である。
14	聾学校の設備や活動について理解を深める 4)	講義・演習	教育的、社会的観点からの理解が重要である。
15	これまでの講義のまとめと理解度の確認	試験・まとめ	

■受講上の注意

※授業活動の状況によって、上記の内容や順番を変更する場合もあります。

■成績評価の方法

筆記試験

■テキスト参考書など

配付資料

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

聴覚障害学演習Ⅱ

講師：戌亥 啓一、徳永 弘樹

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

各種聴覚検査についてその目的や特徴を把握し、分類に精通する。講義は概略の解説および演習を通して実施・進行していく。オージオグラム、オージオメータの用語・単位・原理についての理解、また各検査名とさまざまな区分についてその根拠から整理・理解していく。目標として、聴覚障害学演習Ⅰをもとにした基礎知識の基礎的な手技の習熟を目指す。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	オージオメータを操作し聴覚図を描くことができる	演習	
2	各種検査音とその特徴について説明できる	演習	
3	音場検査について説明を実施できる	演習	
4	自覚的聴覚検査の種類と特徴を説明できる	演習	
5	他覚的聴力検査の種類と特徴について説明できる	演習	
6	目的別聴力検査の種類と特徴について説明できる	演習	
7	小児聴力検査の種類と特徴について説明できる	演習	
8	中間評価と説明の実施	演習・講義	
9	音場検査について理解を深める	講義・演習	音場の条件、校正を把握する。
10	幼児聴力検査について理解を深める	講義・演習	検査名と適応、それに伴う特徴を把握する。
11	VRAの測定について理解を深める	講義・演習	CORとの違いを明確にする。
12	人工内耳の構造・機能、特徴について理解を深める	講義・演習	特に注意が必要な補聴器との違いについて整理する。
13	人工内耳に関わる医学的情報について理解を深める	講義・演習	インプラントしての人工内耳の特性を整理する。
14	人工内耳のマッピングと装用後の指導について理解を深める	講義・演習	対象者・装用者の立場を意識する。
15	これまでの講義のまとめと理解度の確認	試験・まとめ	

■受講上の注意

※活動状況によって、上記の内容や順番を変更する場合もあります

■成績評価の方法

レポートと単位認定試験にて総合的に評価します

■テキスト参考書など

立木　孝：聴覚検査の実際 3版　日本聴覚医学会　編，南山堂
藤田郁代監修：標準言語聴覚障害学　第3版，医学書院

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

聴覚障害学特論Ⅰ

講師：戌亥 啓一

単位数：1単位	時間数：15時間	授業学年：4学年
必修選択：必修		

■科目目標

聴覚解剖から聴覚障害に関連する既習事項を統合的に理解し、言語聴覚士としての臨床活動に活用できる知識・技術として習得する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	聴覚の解剖・機能について再認識する	講義	事前配付資料を通読すること
2	聴覚と言語との密接で重要な関連について再認識する1)	講義	事前配付資料を通読すること
3	聴覚と言語との密接で重要な関連について再認識する2)	講義	事前配付資料を通読すること
4	聴覚の病態について、聴覚系の構造・機能と対応付けて理解する1)	講義	事前配付資料を通読すること
5	聴覚の病態について、聴覚系の構造・機能と対応付けて理解する2)	講義	事前配付資料を通読すること
6	純音聴力検査、語音聴力検査等を題材として、妥当性・信頼性の高い測定の重要性を理解する1)	講義	事前配付資料を通読すること
7	純音聴力検査、語音聴力検査等を題材として、妥当性・信頼性の高い測定の重要性を理解する2)	講義	事前配付資料を通読すること
8	これまでの講義のまとめと理解度の確認	試験・まとめ	

■受講上の注意

＊授業活動の状況によって、上記の内容や順番を変更する場合もあります。

■成績評価の方法

試験

■テキスト参考書など

配付資料

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

聴覚障害学特論Ⅱ

講師：戌亥 啓一

単位数：1単位　時間数：15時間　授業学年：4学年

必修選択：必修

■科目目標

聴覚障害特論Ⅰとともに聴覚障害に関連する既習事項を統合的に理解し、言語聴覚士としての臨床活動に活用できる知識・技術として習得する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	ABR検査、OAE等を題材として、聴覚系の構造・機能と対応づけてた測定原理や結果の分析方法を理解する1)	講義	事前配付資料を通読すること
2	ABR検査、OAE等を題材として、聴覚系の構造・機能と対応づけてた測定原理や結果の分析方法を理解する2)	講義	事前配付資料を通読すること
3	補聴器と人工内耳を対比させ聴覚補償機器としての共通性および特殊性について理解する1)	講義	事前配付資料を通読すること
4	補聴器と人工内耳を対比させ聴覚補償機器としての共通性および特殊性について理解する2)	講義	事前配付資料を通読すること
5	母語獲得前発症児、中途発症者、加齢性発症者への専門的対応方法について理解する1)	講義	事前配付資料を通読すること
6	母語獲得前発症児、中途発症者、加齢性発症者への専門的対応方法について理解する2)	講義	事前配付資料を通読すること
7	先天性二重障害児への発達支援の意義について考察し、その重要性を理解する	講義	事前配付資料を通読すること
8	これまでの講義のまとめと理解度の確認	試験・まとめ	

■受講上の注意

＊授業活動の状況によって、上記の内容や順番を変更する場合もあります。

■成績評価の方法

試験

■テキスト参考書など

配付資料

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

臨床実習Ⅰ

講師：専任教員

単位数：4単位　時間数：160時間　授業学年：3学年

必修選択：必修

■科目目標

①臨床実習Ⅰは、3年次に行う臨床現場での実習である。初めてSTのもとで、リハビリテーション・言語聴覚療法の実際（評価・訓練計画）および職業人・社会人としての態度を学ぶ。
②指導者と対象者及びその家族との関わり方を通して、臨床家として適する態度・接遇を学ぶ。
③対象者を全体的に把握するために必要な情報収集、及び評価（観察・面接・検査等）の実際を体験する。
④評価に基づいた問題点抽出、目標（長期及び短期）の設定、および対象者の病態像を考察する。ポイントを押さえた評価報告書を作成する。等の目標がある。
詳しくは臨床実習マニュアルを参照のこと。

■科目内容

■学習のねらい

＊内容は上記の実習目標に準ずる。
実習期間
実習期間は160時間（約20日間）である。追加・補充等の場合はその限りでない。
実施計画（例）　※施設・症例毎に計画は異なる。
1週目
　院内オリエンテーション
　ST訓練見学→見学レポート作成
　担当症例選択

2週目
　ST訓練見学→見学レポート作成
　担当症例に対する言語評価

3～4週目
　担当症例に対する評価・訓練の立案・実施
　レジメ発表

実習後セミナー
　発表会での実習報告

■方法

実習

■学習上の留意点

■受講上の注意

臨床実習前オリエンテーションへの参加（事前通達有）及び臨床実習マニュアルの参照を行う。

■成績評価の方法

鹿児島医療技術専門学校言語聴覚療法学科ルーブリック評価による。

■テキスト参考書など

鹿児島医療技術専門学校　臨床実習マニュアル、言語聴覚療法技術ガイド
その他関連分野参考書

■備考

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

臨床実習Ⅱ

講師：専任教員

単位数：8単位　時間数：320時間　授業学年：4学年

必修選択：必修

■科目目標

①指導者の指導を受けながら対象者の評価・治療計画の立案、具体的治療の実施、その記録・報告、再評価など、STとしての一貫した治療行為を習得する。
②STとしての管理運営業務を学ぶ。
③対象者に対する総合的リハビリテーションサービスの中における言語聴覚療法の意義を考える。
④社会人・医療人としての態度を身につける。

■科目内容

■学習のねらい

実習のプログラム（例）
・実習オリエンテーション
・施設の組織、管理運営の概要
・服務規定の説明
・リハビリテーション部の紹介
・症例実習に伴う諸注意
・対象者の評価・問題点抽出・訓練立案
・中間発表
・訓練実施
・再評価、最終レポート作成
休日は実習施設に応じる（土曜日も実習日となる可能性がある）
現在，日曜リハを行う施設が増加しているため，日曜日の出勤や学会への
参加も想定される。

■方法

■学習上の留意点

■受講上の注意
臨床実習前オリエンテーションへの参加（事前通達有）及び臨床実習マニュアルの参照を行う。

■成績評価の方法
鹿児島医療技術専門学校言語聴覚療法学科ルーブリック評価による。

■テキスト参考書など
鹿児島医療技術専門学校　臨床実習マニュアル　、言語聴覚療法技術ガイド
その他関連分野参考書

■備考

■実務経験
本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

症例演習Ⅱ

講師：専任教員、福元恵美

単位数：2単位　時間数：60時間　授業学年：3学年

必修選択：選択必修

■科目目標

言語発達障害児の評価は1）ことばに関連する諸側面の状態を明らかにする。2）障害の原因の推定。3）具体的目標の設定。4）長期的展望を提起するために行われる。
本講義では正常発達など情報収集に必要な知識をもとに、適切な検査を選択し、実施できることを目標にする。
また、事例をもとに子どもや保護者、周囲の方に必要な支援や訓練方法等も考えられる力を身につけられるようにする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	きらきらチェック（ことばの発達検査）について理解する	講義	言語発達について復習をしておく。
2	初回インテーク	講義・演習	講義と演習を組み合わせて行う。
3	質問-応答関係検査の概要を理解する。 検査が行えるようになる。	講義・演習	講義と演習を組み合わせて行う。
4	質問-応答関係検査演習	演習	質問-応答関係検査について復習をしておく。
5	質問-応答関係検査演習	演習	質問-応答関係検査について復習をしておく。
6	構音検査を実施できるようになる。	演習	構音検査の復習を行う。
7	構音検査を実施できるようになる。	演習	構音検査の復習をしておく。
8	仮名単語の音読を被検者にとり、反応に合わせて対応ができるようになる。	演習	復習
9	質問-応答関係検査、構音検査、仮名単語の音読課題を被検者にとれるようになる。	演習	他学年の協力をもらい、演習を行う。
10	しらゆきこども園での検査演習①	演習	質問-応答関係検査、構音検査、音読の仕方など復習・練習をしておくこと。
11	しらゆきこども園での検査演習②	演習	質問-応答関係検査、構音検査、音読の仕方など復習・練習をしておくこと。
12	しらゆきこども園での検査演習③	演習	質問-応答関係検査、構音検査、音読の仕方など復習・練習をしておくこと。
13	しらゆきこども園での検査演習④	演習	質問-応答関係検査、構音検査、音読の仕方など復習・練習をしておくこと。
14	検査結果のまとめができるようになる。①	演習	個人情報漏洩に注意する。
15	検査結果のまとめができるようになる。②	演習	個人情報漏洩に注意する。
16	検査結果の解釈ができるようになる。①	GW	検査結果の内容を把握しておく。
17	検査結果の解釈ができるようになる。②	GW	検査結果の内容を把握しておく。
18	事例をもとにアセスメントができるようになる。①	GW	様々な小児の評価を復習しておく。
19	事例をもとにアセスメントができるようになる。②	GW	様々な小児の評価を復習しておく。
20	事例をもとにアセスメントができるようになる。③	GW	様々な小児の評価を復習しておく。
21	事例をもとにアセスメントが行えるようになる。④	GW	復習

22	事例をもとにアセスメントが行えるようになる。⑤	GW	復習
23	事例をもとにアセスメントが行えるようになる。⑥	GW	復習
24	事例をもとにアセスメントが行えるようになる。⑦	GW	復習
25	事例をもとにアセスメントが行えるようになる。⑧	GW	復習
26	事例をもとにアセスメントが行えるようになる。⑨	GW	復習
27	事例をもとにアセスメントが行えるようになる。⑩	GW	復習
28	事例をもとに訓練立案ができるようになる。①	GW	復習
29	事例をもとに訓練立案ができるようになる。②	GW	復習
30	試験・解説（事例をもとに問題点抽出・評価・訓練立案を考える）	試験	これまで実施した内容の復習を行う。

■受講上の注意

学外演習も兼ねているため、言葉遣いや身なりに特に気を付けること。

■成績評価の方法

演習時の検査内容10%、検査のまとめ（記録用紙）30%、レポート20%、試験内容40%
全ての合計から60%/100%以上を合格とする。

■テキスト参考書など

随時配布予定

■備考

授業活動の状況により、上記の内容や順番は変更する場合もある。

■実務経験

本科目は言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

地域連携

講師：高吉 進、山口浩明、松尾 康弘

単位数：1単位　時間数：15時間　授業学年：3学年

必修選択：選択必修

■科目目標

厚生労働省は、団塊の世代が75歳以上となる2025年をめどに、重度な要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供させる地域包括ケアシステムの構築を実現していくとしている。つまり、院内の支援から地域での支援に移行しつつある。本科目は、地域包括ケアシステムとそれに係る言語聴覚療法について理解することを目標とする。
小児分野の地域連携(幼稚園・保育園、子育て支援センター、発達支援センター、乳幼児健診など)やライフステージに即した支援における言語聴覚療法について理解することを目標とする。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	地域包括ケアシステムの概要について理解できる	講義・TBL	講義のねらいに従い、予習をする
2	地域包括ケアシステムとリハビリテーションの関係について理解できる	講義・TBL	講義のねらいに従い、予習をする
3	災害リハにおける地域連携システムの概要について理解できる①	講義・TBL	講義のねらいに従い、予習をする
4	災害リハにおける地域連携システムの概要について理解できる②	講義・TBL	講義のねらいに従い、予習をする
5	失語症における地域連携システムの概要について理解できる	講義・TBL	講義のねらいに従い、予習をする
6	小児分野における地域連携システムの概要について理解できる	講義	講義のねらいに従い、予習をする
7	巡回相談、乳幼児健診、発達相談、発達教室、子育て支援センター等における言語聴覚士の役割について理解できる	講義	講義のねらいに従い、予習をする
8	単位認定試験・解説	試験・講義	これまでの講義を復習する

■受講上の注意

各講義のねらいに従って予習・復習をする

■成績評価の方法

筆記試験100%で評価し、60%以上を合格とする

■テキスト参考書など

必要に応じ資料を配布する

■備考

TBL: Team Based Learning（チーム基盤型学習）

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

言語聴覚療法管理論

講師：原口 友子、山口浩明、藤井 達也

単位数：1単位　時間数：15時間　授業学年：4学年

必修選択：選択必修

■科目目標

【一般目標】

医療、福祉、教育現場における言語聴覚士の役割を学び、自分自身が言語聴覚士として活動する際の知識を得る事ができる。

【到達目標】

・職能団体について理解する。
・言語聴覚療法における産学官について理解する。
・言語聴覚士の開業について理解する。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	職能団体について理解できる	講義・TBL	日本言語聴覚士協会HPを確認しておく
2	職能団体について理解できる	講義・TBL	日本言語聴覚士協会HPを確認しておく
3	職能団体について理解できる	講義・TBL	日本言語聴覚士協会HPを確認しておく
4	小児分野の教育・保健・福祉分野のSTの領域について理解できる。 「子どもの発達支援を考えるSTの会」について理解できる。	講義	
5	小児分野の言語聴覚士が取得できる資格（特別支援教育士、臨床発達心理士、特別支援学校自立 活動教諭一種免許状）について理解できる。	講義	
6	言語聴覚士における開業への可能性について理解することができる	講義・TBL	
7	言語聴覚士における開業への可能性について理解することができる	講義・TBL	
8	言語聴覚士における開業への可能性について理解することができる	講義・TBL	

■受講上の注意

ディスカッションを主体とした講義となるため、積極的な参加を期待する。

■成績評価の方法

終講後、一週間以内にレポートを提出し、その内容によって判定する。優・良・可・不可にて判定し、不可の場合は再試験として再レポートを求める。

■テキスト参考書など

配布資料

■備考

TBL: Team Based Learning（チーム基盤型学習）
開講される講義の内容・日時等は講師の都合により年度ごとに変更されることががる。

■実務経験

本科目は、言語聴覚士として実務経験のある教員による授業である。

卒業研究Ⅰ

講師:専任教員

単位数:1単位　時間数:15時間　授業学年:3学年

必修選択:選択必修

■科目目標

各教員の指導のもとオリエンテーションの実施し、テーマ及び実験計画の立案を決定する過程を学ぶ。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	テーマの検討方法を知る	講義	興味関心に留意する
2	テーマの候補を挙げる 文献検索の方法を知る	講義	過去の研究の重要性を認識する
3	テーマを選定する	講義	計画的に見通しを持った選定とは
4	テーマを決定する	講義	計画的に見通しを持った選定とは
5	計画・方法等の検討方法を学ぶ	講義	信頼性、妥当性を踏まえた観点に留意する
6	計画・方法等の検討方法を学ぶ	講義	信頼性、妥当性を踏まえた観点に留意する
7	計画を文面化する手段を知る	講義	他者にわかりやすい表現を検討する
8	計画をプレゼンテーションする手段を知る	講義	他者にわかりやすい表現を検討する

■受講上の注意

卒業研究は授業時間以外にも積極的に遂行する。

■成績評価の方法

計画発表の評価:方法、評価基準などは講義にて提示します。

■テキスト参考書など

必要な文献、実験マニュアル等の資料を紹介・提示する。

■備考

■実務経験

卒業研究Ⅱ

講師:専任教員

単位数:1単位　時間数:15時間　授業学年:3学年

必修選択:選択必修

■科目目標

研究計画、データ取得、論議の進め方を学ぶ。

■科目内容

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	関係論文・専門書輪読 計画の修正・確認	講義	文献検索法をよく確認する
2	関係論文・専門書輪読 計画の修正・確認	講義	指導者との進捗状況を確認すること
3	関係論文・専門書輪読 計画の修正・確認	講義	指導者との進捗状況を確認すること
4	関係論文・専門書輪読 計画の修正・確認	講義	指導者との進捗状況の確認・修正を行う
5	信頼性と妥当性にそった研究計画の実行と必要に応じたプレゼンテーションの実施	講義	指導者との進捗状況の確認・修正を行う
6	信頼性と妥当性にそった研究計画の実行と必要に応じたプレゼンテーションの実施	講義	指導者との進捗状況の確認・修正を行う
7	信頼性と妥当性にそった研究計画の実行と必要に応じたプレゼンテーションの実施	講義	指導者との進捗状況の確認・修正を行う
8	信頼性と妥当性にそった研究計画の実行と必要に応じたプレゼンテーションの実施	講義	指導者との進捗状況の確認・修正を行う

■受講上の注意

卒業研究は授業時間以外にも積極的に遂行する。

■成績評価の方法

計画発表の評価:方法、評価基準などは講義にて提示します。

■テキスト参考書など

必要な文献、実験マニュアル等の資料を紹介・提示する。

■備考

■実務経験

卒業研究Ⅲ

講師：専任教員

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：4学年

必修選択：選択必修

■科目目標

指導者とともに関係論文や専門書について議論を行い、信頼性・妥当性を意識した研究計画の適宜修正、着実な実行を進める。

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
2	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
3	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
4	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
5	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
6	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
7	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
8	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
9	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
10	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
11	論文とりまとめを念頭に計画を確認修正し、研究を進める	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
12	中間発表による研究計画の確認・修正 プレゼンテーションによる表現方法を学ぶ	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
13	中間発表による研究計画の確認・修正 プレゼンテーションによる表現方法を学ぶ	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
14	中間発表による研究計画の確認・修正 プレゼンテーションによる表現方法を学ぶ	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む
15	中間発表による研究計画の確認・修正 プレゼンテーションによる表現方法を学ぶ	演習	関係論文・専門書輪読、論議、教員の指導などを含む

■受講上の注意

卒業研究は授業時間以外にも積極的に遂行する。

■成績評価の方法

提出された論文の研究経過と内容、論文作成能力により評価する。

■テキスト参考書など

必要な文献、実験マニュアル等の資料を紹介・提示する。

■備考

■実務経験

卒業研究Ⅳ

講師：専任教員

単位数：1単位　時間数：30時間　授業学年：4学年

必修選択：選択必修

■科目目標

卒業研究発表会にて研究内容を口頭発表にて説明するための、スライド作成・説明表現の技術を身につける。

回数	学習のねらい	方法	学習上の留意点
1	論文のとりまとめにむけて研究室内で卒業研究の進捗状況をプレゼンテーションする。	演習	指導者との繰り返しの細部にわたる議論を行う
2	論文のとりまとめにむけて研究室内で卒業研究の進捗状況をプレゼンテーションする。	演習	指導者との繰り返しの細部にわたる議論を行う
3	論文のとりまとめにむけて研究室内で卒業研究の進捗状況をプレゼンテーションする。	演習	指導者との繰り返しの細部にわたる議論を行う
4	論文のとりまとめにむけて研究室内で卒業研究の進捗状況をプレゼンテーションする。	演習	指導者との繰り返しの細部にわたる議論を行う
5	論文のとりまとめにむけて研究室内で卒業研究の進捗状況をプレゼンテーションする。	演習	指導者との繰り返しの細部にわたる議論を行う
6	論文のとりまとめにむけて研究室内で卒業研究の進捗状況をプレゼンテーションする。	演習	指導者との繰り返しの細部にわたる議論を行う
7	論文のとりまとめにむけて研究室内で卒業研究の進捗状況をプレゼンテーションする。	演習	指導者との繰り返しの細部にわたる議論を行う
8	論文作成、プレゼンテーション検討、報告要旨集作成など	演習	他者の研究に対する興味関心、聴講モラルを持つ
9	論文作成、プレゼンテーション検討、報告要旨集作成など	演習	他者の研究に対する興味関心、聴講モラルを持つ
10	論文作成、プレゼンテーション検討、報告要旨集作成など	演習	他者の研究に対する興味関心、聴講モラルを持つ
11	論文作成、プレゼンテーション検討、報告要旨集作成など	演習	他者の研究に対する興味関心、聴講モラルを持つ
12	論文作成、プレゼンテーション検討、報告要旨集作成など	演習	他者の研究に対する興味関心、聴講モラルを持つ
13	論文作成、プレゼンテーション検討、報告要旨集作成など	演習	他者の研究に対する興味関心、聴講モラルを持つ
14	論文作成、プレゼンテーション検討、報告要旨集作成など	演習	他者の研究に対する興味関心、聴講モラルを持つ
15	論文作成、プレゼンテーション検討、報告要旨集作成など	演習	他者の研究に対する興味関心、聴講モラルを持つ

■受講上の注意

卒業研究は授業時間以外にも積極的に遂行する。

■成績評価の方法

発表能力及び修正提出された論文により評価する。

■テキスト参考書など

必要な文献、実験マニュアル等の資料を紹介・提示する。

■備考

■実務経験